

西ガーツ山地村落におけるウシ飼育

中 里 亜 夫

Cattle Keeping in the Western Ghats Villages.

Tsuguo NAKASATO

Abstract The actual condition of bovine keeping in India, “the world’s largest cattle keeping” have scarcely been investigated, in contrast to the frequent debate over “sacred cow”. This paper analyzed the contemporary condition of bovine keeping in the area of Western Ghats, with the case study of Kurubathur and Yadavarahalli in Sakleshpur (Manjarabad) Taluk, Hassan District focusing on the three topics; village community, agricultural management and regional relation.

The main findings of this paper are as follows;

1) From the perspective of village community, cattle and buffalo play an essential role for economical support and reproduction on an enlarged scale. Their excrement is utilized as primary manure for paddy crop and plantation products such as coffee and cardamom. A vast grazing land has been farmed under the control village community. Recent phenomena, however, such as overgrazing and separate control of grazing land, have caused a great change in the habitual method of bovine keeping, and remain as administrative problems.

2) All the households keeping bovine were classified into four classes according to the rearing soze of their bovine populations; (1) Both the medium and the large classes surpassed the rest in the rearing number and the size of landholdings; (2) they were enlarging not only cattle rearing but also the plantations of coffee and cardamom. Although still marginal in scale, however bovine keeping has been more generally dissminated over the village since 1966. It can be guessed, that plantation management farm has been gradually shifting from the “Sacred cow” keeping type—although his is the fundamental type of cattle rearing—to the more practical type by rearing more economical buffaloes. There are three kinds of cow farming from the point of view of management: (A) reproduction on an enlarged scale type, (B) plain reproduction type, (C) purchasing rearing type. Both types of (A) and (B) consist of a self-supply system for rearing, while (C) rype nearly dwpend on purchasing.

3) The direct transaction are the most important method in the purchase of rearing

cows (31 %) in the sample village, on the other hand Dallali (cattle merchant, mostly Muslim) rarely takes an active hand in purchasing. More than half of direct transaction are held in yards of sellers within a range of three miles from the sample village. Five of seven cattle markets are large annual fairs while two are weekly markets. The big fairs are held around in January and February, where mainly the cattle from Maidan are traded. Boving left over are brought by Dallali to be sold, through the western Ghats to other cattle markets or billeting ares in the Marabaru Plains. Unwanted aged and sterile cows may be transported to some slaughterhouses in Kerala State.

目	次
一. はじめに——研究の目的	四. 農家レベルでのウシ飼育
二. 調査対象地域・村落の概要	1. ウシ飼育農家と飼育規模
1. 地域概要	2. ウシ (牛・水牛) 飼育型
2. 調査村落の概要	五. ウシの取引と地域間移動
三. 村落社会とウシ飼育	1. 取引頭数と購入目的
1. 農業生産の再生産システム	2. 取引方法と購入価格
2. 入会放牧地の存在形態	3. ウシの購入地と地域間移動
3. 村落社会と牧童型放牧	六. おわりに

一. はじめに——研究の目的

インドは、文字通り“世界のウシの国”である。¹⁾1983年現在、世界の牛 (Cattle) の14.9% (約0.63億頭)、水牛 (Buffalo) の50.7% (約0.63億頭) がインドで飼育されていると推定される。²⁾これまで、この莫大な数のウシ (Bovine, 牛と水牛の総称) について、インド社会とりわけ村落社会の経済・社会・文化との関連において数多くの論議がなされてきた。

2しかしその多くは、“聖なる牛”論争³⁾やウシ屠殺をめぐる是非論⁴⁾などマクロ的研究に偏し、村落および農家レベルでのウシ飼育の実像にせまるものに欠けている。これを近年の M.S. Kataria (1982) や K. Ranganath (1981) などのウシ飼育をめぐる代表的な地理学的研究に限ってみても、問題の多い「家畜センサス」などの統計資料に大半の論拠を求めており、ミクロレベルでの実態調査はなされていない。また、O.H.K. Spate (1965) や P. Gourou (1980) 等のウシ飼育に関する論究は、単にインド地誌ないし熱帯農牧業研究の一端としてのみであり、フィールドワークにもとづく村落・農家レベルでのウシ飼育の実像にせまるものではない。その他の地理学からの研究にしても、多くは「家畜センサス」など政府資料の統計分析に終始したものとなっている。一方、畜産経済学的研究に目を転じてみると、近年数多くのウシ飼育をめぐる研究が発表されている。その好例として、1980年にカルナータカ州バンガロール市で行われた“雇用ポテンシャルに関する企業の畜産経営の経済性”に関するシンポジウム⁵⁾での発表があげられよう。しかし、これらにしても、単なる政府資料の利用かあるいは便宜的なサンプル農家調査の結果に限定しての議論が多く、B. Odend'hal (1972) のような現地調査による農家および村落レベルでのウシの種類別飼育頭数や年齢頭数などの研究を欠いており、そのために、サンプル農家調査は単なるアトランダムな事例に終わっている。

つまり、インドのウシ飼育をめぐるこれら多くの研究成果を発展的に利用するためにも、ひとまず村落・農家レベルでのウシ飼育の実態を究明する必要がある。S. Kumar が指摘⁶⁾しているように、「家畜センサス」の数値の正確さがしばしば疑問視されている状況では、ひとまず一村落を構成するすべての世帯を対象とした種類別飼育頭数を確定した上で、サンプル農家調査を研究目的に応じて実施することが要求されよう。

この小稿は、隆起準平原遺物の残る西ガーツ山地分水界地域 (Malnad) の村落を対象地域にして、イネ・コーヒー栽培と結合して行われているウシ飼育の再生構造の実態を村落・農家レベルで究明し、そしてウシ飼育が本地域の村落社会にどのような関わりをもっているか、さらにウシ流通を通じて本地域と他地域との関係を明らかにしようとするもの

である。ただ、この地域が、インド全域からみれば、①多雨地域であることと、②コーヒーやカルダモンといった樹木作物 (Tree Krops) を主作物とする点で、決してインド村落の平均的な村落とは言えないであろう。しかし、これら調査村落は、とりわけ東のデカン高原内陸 (Maidan) と西のマラバル海岸地域とは、歴史的にもまた現状に於いても深い関係を持ち、決して孤立した存在ではないのである。

現地調査は、昭和57年度文部省科学研究費海外学術調査 (代表者・藤原健蔵) による広島大学南インド地理学調査の一環として、昭和57年8月24日から9月10日の期間に実施された。なお、面接調査には、マイソール大学大学院修士課程 (地理学) 修了者を通訳兼調査補助者として協力いただいた。

調査は、カルナータ州ハッサン (Hassan) 県マンジャラバード (Manjarabad) 郡のクルバトゥール (Kurubathur) 行政村⁷⁾ (Group Panchayat) にある二つの旧徴税村⁸⁾ (Revenue Village)、つまりクルバトゥール小村地区 (以下 K 地区と略) とヤダワラハリ (Yadavarahalli) 小村地区 (以下 Y 地区と略) である。クルバトゥール行政村は、後述するように九つの旧徴税村からなり、いずれも今世紀初めよりカルダモン・コーヒー園が拓かれてきたが、その過程で K 地区には、カルダモンやコーヒーを扱う商人や諸種のサービス業者が集住する核集落 (Key Settlements) が形成されてきた。⁹⁾ 純粋な農業村落である Y 地区のほか、K 地区と併せ調査することにより、自然村つまり徴税村を越えた広域的な行政村機能とウシ飼育との関連性をも究明されるであろう。

現地調査は次の手順で進められた。期間の前半は、隊員5名による悉皆調査 (Door to Door 調査またはセンサス調査と称す) を、広範は、隊員各自の研究テーマに基づくサンプル調査に当てられた。センサス調査では、K 地区79戸、Y 地区51戸の合計130戸のすべての世帯を対象とした。このうちウシ飼育農家は68戸であり、①飼育規模と②飼育型とから K 地区10戸、Y 地区13戸のサンプル調査対象農家を選定し、インテンシブな面接調査¹⁰⁾ を実施した。なお、サンプル調査の実施にあたっては、あらかじめ、ウシ飼育農民はいずれも、飼育しているウシの個体識別能力を有していることを確認した。¹¹⁾

しかしながら、調査後の反省点としては、①村落社会の複雑な事情や特定人物からの情報に依存しすぎたことや、②調査期間を延長できないためにウシの販売に関するデータが不十分となったことなどがあげられる。この点に関しては、後述の如く、若干の問題を残す結果となった。

二. 調査対象地域・村落の概要

1. 地域概要

カルナータ州については、1956年にカンナダ (Kannada) 語を使用する地域が新たなマイソール州¹²⁾となり、その後1960年に“黒い土”を意味するカルナータカ州と改称された。面積191,791km²、人口3,074,451人 (1981年) を有し、州面積の91.2%はデカン高原の上にある。州域は、①海岸地域 (Coast-land region)、②ガーツ地域 (Ghat region 又は Malnad)、③東部 (内陸) 高原地域 (the eastern plateau 又は Maidan) の3地域に区分される。¹³⁾

調査村落のあるハッサン県は、州南西部に位置する面積6,823km²、人口1,351,923人 (1981年) の比較的小さな県で、前述のガーツ地域から東部高原にまたがっている。県域は、さらに(a)南マルナードゥ、(b)セミマルナードゥ、(c)南マイダンの3地域に細分される。¹⁴⁾ハッサン県は、第1表の通り作付耕地率や人口増加率さらに作付作物の構成からみても州平均に酷似しているのに対し、コーヒーや、カルダモンなどプランテーション樹木作物の作付面積率や牛密度に著しい差異がみられる。

調査村落のあるマンジャラバード郡¹⁵⁾は南マルナードゥ地域に位置し、年間降水量が約2,500mmにも達する多雨地帯であり、熱帯夏緑林が卓越するが、丘陵地の緩傾斜面には放牧地も広がる。コーヒー・カルダモンの栽培は作付面積の過半を占め、マルナードゥ地域の経済を支えている。本郡下へのコーヒー栽培の導入は、すでに19世紀前半にヨーロッパ人を中心に行われ、1930年代に本格化して“黄金の土地 (Golden land)”と呼ばれた。¹⁶⁾郡役所 (Tashil office) のあるサクレスプール (Shaklespur) の町は、人口●人 (1981年)、コーヒー・カルダモンの取扱いのほか、国道バンガロールー・マンガロールに沿う交通の要衝として発展してきた。調査村落は、この町の南19kmにあり、バスの便がある。

2. 調査村落の概要

(1) 自然環境

地形は、第1図の通り、樹枝状の丘陵地 (高度930~955 m) と浅くて狭長な谷底地 (高度900~940 m) とに二分される。前者には一段と高い孤立丘陵があり、比較的単調な地形にアクセントを与えている。

K地区の年間降水量 (1981年) は、3,108mmに及ぶが、その92%余りが6月から9月までの南西モンスーンによってもたらされている。この降水量の季節分布は、アラビア海沿岸地域およびガーツ地域に共通する特徴であり、内陸高原地域のそれとは相違する。¹⁷⁾また、降水量の年変化は、K地区の1959年から4か年間でみても、最も降水量の多い1961年

には4,313mmを記録したが、その翌年には2,650mmしか降らず、著しい変化があることを指摘しておきたい。

気温については、調査村落における観測データがないので正確なところは知れないが、県庁所在地ハッサン市では、月平均最高気温が最も低いのは南西モンスーン最盛期の8月(24.8℃)で、年平均最高気温(28.4℃)を大きく下回っている。¹⁸⁾村落調査の方が、ハッサン市より南西モンスーンの影響をより強く受けることから、北半球の暦の上での夏季に調査村落において気温がさらに低下することが推察される。つまり、南西モンスーン期は、日照不足と冷たい雨によって1年中で最も低温となる時期で、住民にとっても、またウシなど家畜にとっても風邪など消化器系統の障害が多い時期となっている。このような気候の著しい年及び季節変化は、広大な丘陵地上の放牧地に大きな影響を与えている。近年、この放牧地の草生力の低下が大きな地域問題となっているが、その原因を気候の不順、例えば降水量の極端な低下に求める住民が多い。しかし、ガーツ地域の放牧地での早生力の低下は、これまでウシ飼育における過放牧(Overgrazing)にその原因が求められており、¹⁹⁾調査村落でも、丘陵地頂部の入会放牧地(Gomal)に著しい植生の後退がみられ、場所によっては表土が失われて下部の風化層の赤色粘土が露出していることは、近年のやや過放牧状況との関連を考えざるを得ない。

(2) 集落の発達

K地区には、行政村役場をはじめ、高等学校、簡易診療所、銀行支店、家畜診療所など公共施設のほかに、29戸の店舗や週1回開かれる定期市²⁰⁾があり、典型的な核集落²¹⁾(Key settlement)である。この地域の行政上の名称は、クルバトゥール(Kurubathur)であるが、サクラバラサンテ(Sukravarasanthé, 金曜市の意)という別称があり、また18世紀のチップ、サルタン(Tippu Sultan)時代には、ラクディジュマバザール(Lakdijumma Bazaar)とも呼ばれていた。²²⁾K及びY地区を含めて当地域の集落概史は、藤原により①第1期(17世紀中頃まで)、②第2期(17世紀広範より20世紀はじめ)、③第3期(20世紀のはじめから独立前)、④第4期(独立後から現在まで)の4つの時期に分けられた。²³⁾第1期は、クルバ(Kurubas, 羊飼)が召集団で居住していた時代で牧畜をしながら小規模な焼畑などの農業をしていたものと推測される。ただし、この時期に水田農業が行われていたかについては明らかではない。ついで、17世紀後半からの第2期になると、マイダン地域からリングヤット(Lingayat, 農耕民)家族が●とウシを伴って移住し、水田農業を行うことによって定着した。これらの集落は、南西モンスーンによる横風を避けて、丘陵地の北東斜面に立地した。イギリス植民地支配の強化される19世紀後半には、リングヤットについてボカリガ(Vokaliga, 農耕民)集団も来住し、これらの移住者により小村

Figure 1 Some basic statistics in Karnataka state and Hassan district

表1 カルナタカ州及び調査対象村落のある県・郡の概要

		カルナタカ州		ハ ッ サ ン 県				
				県 合 計		マンジャラバード郡		
a) 降水量 (mm)	年 平 均	1,354.7		1,040.7		2,348.7		
	1980年	1,508.6		1,176.1		2,766.0		
b) 気 温 (°C)	1 月	最高28.1	最低13.5	最高28.6		最低13.9		
	7 月	最高28.5	最低19.8	最高25.3		最低18.1		
c) 総 面 積 (km ²)		191,791		6,814		1,029 ^x		
c) 人 口 (人)		37,043,451		1,351,923		91,175 ^x		
c) 人口密度(人/km ²)		193.1		198.4		88.6 ^x		
c) 人口増加率(年率)		2.64		2.26		N. A		
c) 総 面 積 (ha)		19,049,801	100.0	662,602	100.0	102,889	100.0	
d) 土 地 利 用	作 付 耕 地	10,330,437	54.2	348,887	52.7	42,658	41.5	
	不 耕 作 地	1,922,914	10.1	101,581	15.3	6,021	5.8	
	休 用 地	1,563,042	8.2	45,190	6.8	10,377	10.1	
	放 牧 地 其 他	2,214,318	11.6	112,915	17.0	17,664	17.2	
	森 林 地	3,019,090	15.8	54,029	8.2	26,169	25.4	
作 付 面 積 率 (%)	e) 穀 物 + 工 芸 作 物	ジョワール	15.7	ラ ギ	30.2	米	40.7	
		米	10.5	豆 類	18.1	ラ ギ	0.2	
		綿 花	9.3	米	17.1			
		ラ ギ	8.8	ジョワール	4.5			
	b) 樹 木 作 物	ココナッツ	1.0	ココナッツ	9.9	コーヒー	49.9	
		コーヒー	0.9	コーヒー	8.8	カルダモン	8.0	
		アレカナッツ	0.3	カルダモン	1.0	アレカナッツ	1.0	
f) 家 畜	ウシ	牛	10,221,960	99 [*]	585,038	168	54,060	127 [*]
		水 牛	3,278,128	32 [*]	132,997	38 [*]	13,659	32 [*]
	羊	4,563,481	44 [*]	213,601	61 [*]	1,084	3 [*]	
	山 羊	3,388,139	33 [*]	129,792	37 [*]	6,257	15 [*]	
	豚	296,368	3 [*]	10,837	3 [*]	3,820	9 [*]	

注) a) 1980-81 Karnataka at a glance (Government of Karnataka) を主に使用。
 b) Statistics abstract of Karnataka 1973-74. 但し, カルダモンの作付面積は1978-79年。
 c), d), e), f) は州と県は 1980-81 Karnataka at a Glance を使用し, 郡については Hassan District at a Glance 1980-81 を使用。
 但し, f) は Livestock and Poultry Census 1977 (Government of Karnataka) を使用。
 ※ 耕地100ha当たりの頭数を示す。
 × 1971年センサス。

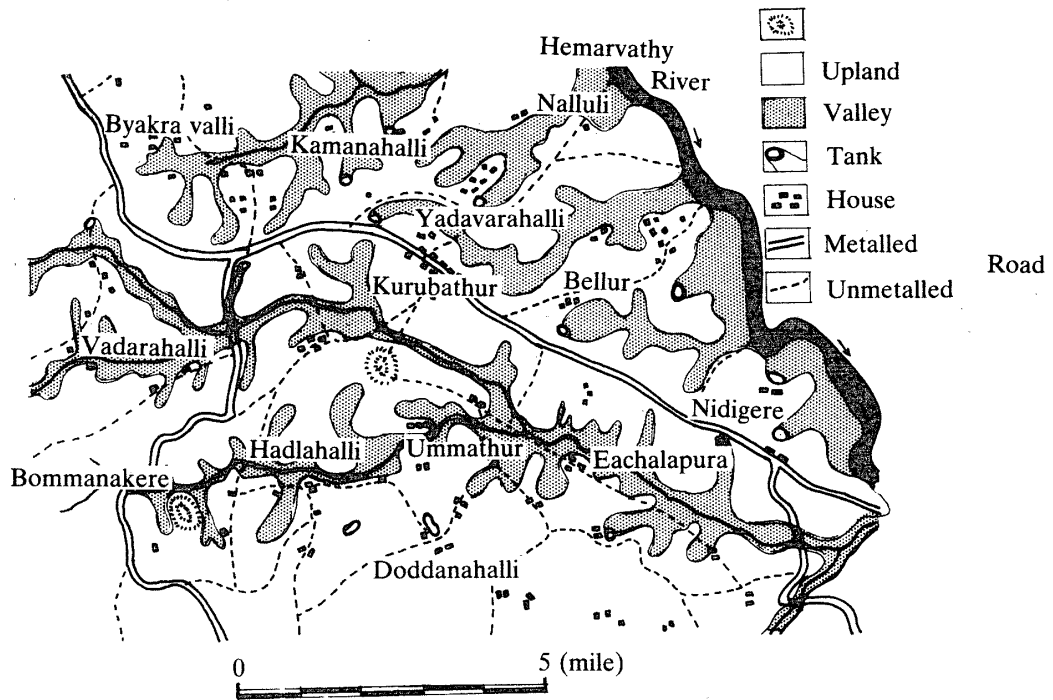


Figure 1. Location of Kurubathur and Yadavarahalli

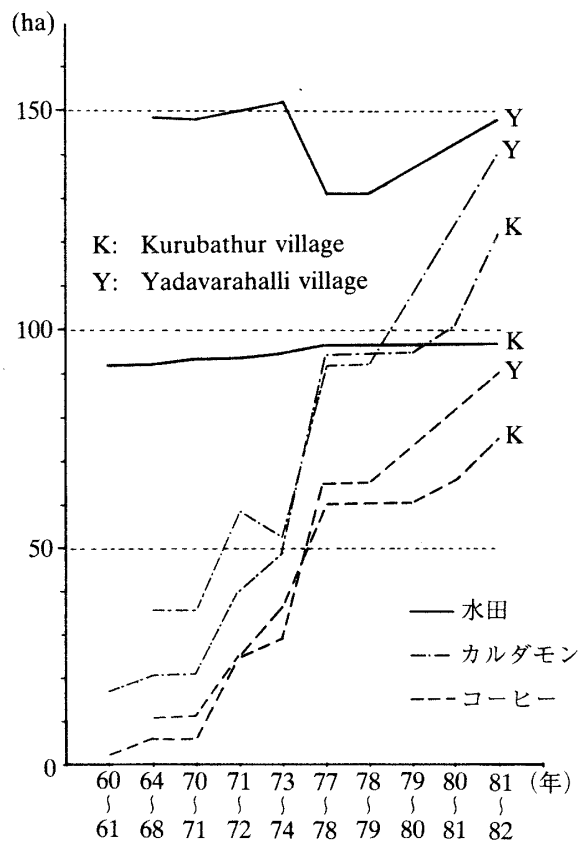


図2 水田・カルダモン・コーヒー栽培面積の推移
Figure 2. Increase of Plantation crops by village

落を形成するにいたり、村落の長 (Patel) が任命されて一つの徴税村 (Revenue Village) として組み込まれた。1878年には村役場 (Village Panchayat office) が小高い丘陵地にたてられた。第3期には、カルダモン栽培など商品作物の導入がみられ、1920年代には、アラビア海沿岸地域よりモスリム教徒を中心とした商人・職人もしくはヒンドゥー教徒や未開部落民などの農業労働者が来住し、幹線道路沿いまたは、地主・プランテーション経営者の屋敷に住んだ。とりわけ、幹線道路沿いには、簡易診療所・病棟をはじめ郵便局・巡視官宿泊所さらに小学校が設置されたことにより、商業及び行政機能など中心機能が付加された核集落としての性格を有するに至った。ついで、第4期の独立以降、とりわけ1960年代後半より1970年代にかけては、零細農民や農業労働者・職人などが政府の土地の払い下げを受け、幹線道路沿いや近くの丘陵地に住居を構えたことや食堂・食料雑貨・衣類仕立てなどの商店の増加及び中学校・高等学校の開校をみるなど、その核としての成長は著しいものがあった。1978年の農村総合開発計画 (Integrated Rural Development Programme, 略称 IRDP) の施行は、発展から取り残されたこのマルナードゥ地域の農村においても農民や商人の生産・営業活動に資金的援助を与えることにより地域経済の活性化に一定の役割を演じている。かくして、K地区の核集落としての影響力は、単にクルバドゥール行政村域のみならず周辺農村に及んでいる。

(3) 人口の推移と農業的土地利用

第2表は、クルバドゥール行政村に含まれる9地区の概況を示す。この表より人口規模は、K地区が平均以上の規模であるが、Y地区は平均以下であり、また人口推移をみると前者が微増であるのに対し、後者は平均以上の増加 (44.3%) を示していることが知れる。なお、他の地区についても、人口規模の小さい地区では人口増加率が大きい、人口規模の大きい地区では小さい傾向があるが、Hadarahelli 地区は例外的に人口増加率が148%と著しい増加を示している。

つぎに、就業人口について、1961年から1981年の間の変化をみると、①農業労働者の著しい増加、②農業就労者 (農業者と農業労働者の合計) の割合が67%から91%と高くなったこと、そして③K地区は、ひとり農業以外への就労割合が38%余りの高い割合を維持していることなどが知られる。まず、農業労働者の著しい増加は、全インド的傾向であるが、その原因を単なる人口の自然増に求めるだけでは不十分である。マルナードゥ地域では、プランテーション農園が土地改革の対象から外れたこと及び近年のコーヒーやカルダモン栽培の発展によって、在村地主や少数の意欲的農民が経営拡大に乗り出し、小作地の取り上げや零細農民の農地を買収することなどによって、小作農民や零細農民が農業労働者に転落したものと考えられる。²⁴⁾

ついで、農業就労者率の上昇は、このプランテーション農業の発展によって、これまで農業以外の雑業に就労していた人々が、新たにコーヒーやカルダモン栽培に就労したことによるものであり、またK地区の農業外就労の多さは、K地区の核集落としての機能集積の結果としてそれぞれ理解されよう。

つぎに、これら地区別の農業的土地利用について、同じく第2表よりみてみたい。クルバトゥール行政村での地区毎の特色は、次の通りである。水田面積の割合は、行政村平均で16.5%、地区毎の差異は小さい。一方、コーヒー栽培地や放牧地に関しては、地区毎の差異が大きい。すなわち、コーヒー栽培地は村の西部に卓越するのに対し、放牧地は東部に多くみられる。K地区と、Y地区のコーヒー栽培面積の割合は村平均（14.9%）を若干上回るに過ぎないが、放牧地面積は村平均（14.8%）を大きく上回っている。とりわけ、Y地区はその南隣のベルール（Bellur）地区について放牧地面積の割合が高くなっている。つぎに、水田面積については、K地区が村平均（16.4%）を僅かに上回るのに対し、Y地区は、村で最も高い割合（26.5%）を示している。

以上のように、コーヒー栽培地と水田及び放牧地とが農業的土地利用として最も主要なものであり、面積割合の大きい畑地（27.9%）や「その他」として一括されている土地（21.3%）は、荒地（4.7%）と同様カルダモンやオレンジ・バナナなどの樹木作物の栽培に僅かに供されているが、大部分は藪・雑木林地や裸地となり、雑穀などの耕種作物の植え付けは見られない。²⁵⁾ K地区を例に畑地の利用状況（1973-74年）をみると、175エーカーのうち、僅か23エーカーが樹木作物の栽培地となり、他の87%の畑地はまったく作付されておらず、ウシの放牧や燃料・飼料採取の対象となっている。また「その他」として分類された土地の大半は雑木林地であり、多くはカルダモン栽培の対象となっている。この地方では、野性種のカルダモン²⁶⁾が見られたが、今日の栽培種はコーヒー栽培と同様に木陰を必要とすることから、湿気の多い雑木林地や水田、コーヒー園にも栽培されるなど、一般にその面積確定は困難を伴うので、第2表の通りセンサス調査では土地利用分類には出てこない場合がある。K・Y両地区における水田・コーヒー・カルダモンの栽培の栽培面積の推移第2図に示した。コーヒーは、1970年代半ばから、栽培面積の著しい増加が認められ、最も重要な換金作物としてクローズアップされてきたことがわかる。これに対し、“香料の女王”²⁷⁾と称されるカルダモンは、70年代前半に一時的に減少をみるが、80年代に入り再びその面積を拡大させている。一方、水田は谷頭部に溜池のある細長い谷底底部に限定され、面積の増減はほとんどないが、近年、栽培管理技術の向上により、単収が増えている。²⁸⁾ また、一部の農家による二期作の導入が行われ、単なる飯米確保から換金作物として作付する傾向がみられる。

Figure 2 Area, Population, Occupational structural and land use by revenue village
 表2 クルバトウール行政村の地区別人口・就業者数の推移と土地利用

地区名	面積	人口数		就業人口数(上段1961, 下段1981年)										土地利用()内は百分率(1981年)							
		(a. 1961年)	(b. 1981年)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	就学者	未就学者	水田	G a	C o	畑	牧地	荒地	その他
Kurubathur	544.1	a	387 + 7.5	34	4	17	21	5	25	23	-	23	152	235	97.1	0.1	80.1	185.2	119.4	4.3	57.9
		b	416	26	74	62	162	254	17.8	0.0	14.7	34.0	21.9	0.8	10.6	18.9	18.9	106.1	140.2	2.4	57.9
Yadavarahalli	561.0	a	201 + 44.3	75	4	8	1	2	1	4	-	3	98	103	148.4	-	106.0	106.1	140.2	2.4	57.9
		b	290	47	72	2	121	169	26.5	-	18.9	18.9	25.0	0.4	69.2	-	69.2	90.4	304.1	35.2	347.6
Bellur	947.9	a	464 - 0.9	173	5	54	-	-	-	-	-	7	239	225	101.4	-	7.3	9.5	32.1	3.7	36.7
		b	460	80	121	15	216	244	10.7	-	7.3	9.5	32.1	3.7	54.3	5.2	54.3	323.2	95.2	45.2	379.0
Nidigere	1,024.2	a	410 + 14.6	171	22	10	4	6	-	-	2	13	228	182	122.1	5.2	5.3	31.6	9.3	4.4	37.0
		b	470	31	142	12	185	285	11.9	0.5	5.3	9.3	31.6	4.4	227.3	-	227.3	411.1	198.0	134.2	194.5
Ummathur	1,420.3	a	330 + 15.5	38	46	23	2	-	4	-	1	114	216	255.2	-	16.0	16.0	28.9	13.9	9.4	13.7
		b	381	67	99	6	172	107	18.0	-	16.0	28.9	13.9	9.4	29.1	-	29.1	174.4	62.2	-	51.4
Echalapura	404.1	a	131 + 16.0	25	4	-	3	-	-	-	-	1	33	98	87.0	-	7.2	43.2	15.4	-	12.7
		b	152	26	28	3	57	67	21.5	-	7.2	43.2	15.4	-	140.2	-	140.2	254.2	62.4	81.1	320.1
Hadarahalli	1,033.3	a	403 + 148.4	148	3	28	6	-	-	-	-	11	196	465	175.1	0.2	13.6	24.6	6.0	7.8	31.0
		b	1,001	172	149	20	341	448	16.9	0.0	13.6	24.6	6.0	7.8	281.4	1.2	281.4	285.2	71.2	9.2	112.6
Bonmanakere	879.1	a	389 + 6.2	72	-	11	1	1	1	4	-	70	160	229	118.3	1.2	32.0	32.4	8.1	1.1	12.8
		b	413	127	-	6	133	161	13.5	0.1	32.0	32.4	8.1	1.1	94.4	-	94.4	195.0	20.1	27.1	26.7
Voddarahalli	453.4	a	29 + 37.9	6	-	1	-	-	-	-	5	12	17	17	90.2	-	20.8	43.0	4.4	6.0	5.9
		b	40	8	-	0	8	22	19.9	-	20.8	43.0	4.4	6.0	1082	6.7	1082	2024.8	1072.8	338.7	1547.7
Total	7,267.4	a	2,744 + 32.0	742	88	152	38	14	31	31	-	133	1,232	1,770	1994.8	6.7	14.9	27.9	14.8	4.7	21.3
		b	3,623	584	685	126	1,395	1,757	16.4	0.1	14.9	27.9	14.8	4.7	2024.8	1072.8	338.7	1547.7	338.7	1547.7	

注1) 就業人口数のI: 農業者, II: 農業労働者, III: 鉱山等その他第一次産業, IV: 家内工業, V: 家内工業以外の工業, VI: 建設業者, VII: 商業
 III: 運輸業その他, IV: その他サービス業
 注2) 土地利用 G a: 園地, C o: コーヒー園

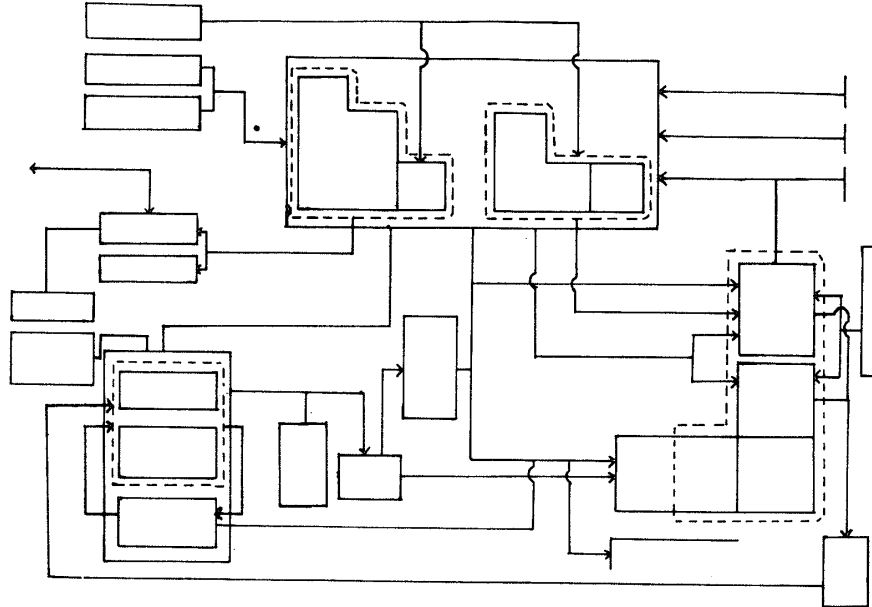


図3 調査村落のウシ飼育からみた農村経済の再生産システム
 Figure 3. Flow chart of livestock reproduction and land use in Kurubathur and Yadavarahalli, 1982.

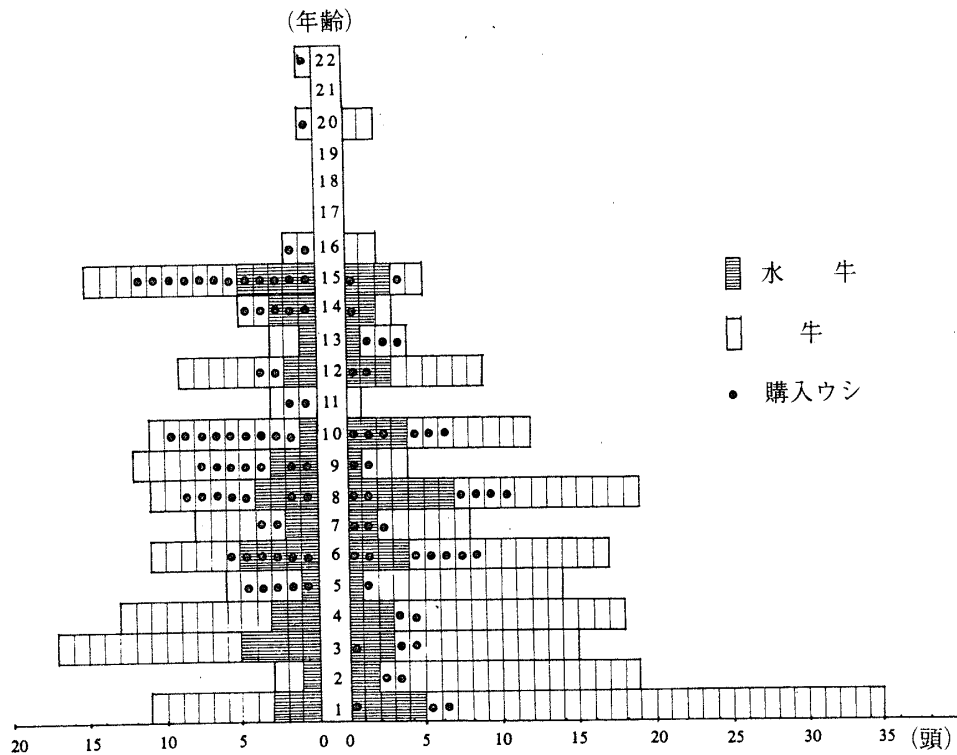


図4 ウシの年齢分布
 Figure 4. Age distribution of bovine in Kurubathur and Yadavarahalli, 1982.

いずれにしても、このマルナードゥ地域の農業的發展は、未開拓の広大な丘陵地の多面的な利用、特に高温多雨の気候条件下では、コーヒー・カルダモンなど樹木作物を中心としたプランテーション農業の發展にかかっている。

(4) 放牧地利用のウシ飼育

広大な丘陵地の放牧地や雑木林・荒地を利用してのウシ飼育は、クルバトゥール行政村のみならずマルナード地方の農民にとっては、極めて重要である。農民であれ商人であれ、一般に村人の多くは、ウシ飼育に強い関心と熱意を有している。金のかからない入会放牧地の利用によって、ウシの繁殖・育成を行い、搾乳や使役のみならず、❖肥やウシの販売によって有形・無形の利益を得ている。各ウシ飼育世帯は、❖屋を有し、モンスーン時期の強い風雨や低温などのストレスからウシを守っている。²⁹⁾

第3表は、調査地区の家畜・家禽頭羽数の推移を示している。この表により、ウシ飼育に著しく偏っていることとウシ飼育頭数が近年増加していることが、中家畜の羊・山羊や豚は、その絶対頭数が少ない上に、しかも減少していることが、知れる。この原因には、住民が粗飼料基盤が広大な放牧地により保証されていることから中家畜よりも大家畜のウシを選択することと同時に、多雨気候に羊や山羊は生理的に不適應を示すことなどが挙げられる。調査時においては、これら中家畜は、総家畜単位数³⁰⁾の僅か1.2%を占めるに過ぎない。

さて、総家畜単位数の98%余りを占めるウシについて、K地区を例にしてその推移をみよう。1961年より調査時点までの間で、ウシは、115頭（牛-95頭、水牛-20頭）増加しており、そのうち牛（ゼヴ牛）が著増している。とりわけ、牝牛頭数は著しく増加し、この20年間余りで倍増している。また、水牛については、1961年より66年までは牝水牛の増加が顕著である。これらウシ飼育頭数の変化は、搾乳及び繁殖目的のウシ飼育への傾斜を物語っている。核集落としてのK地区においては、調査時点で147頭の牝牛のうち、その31%に当たる46頭が搾乳中であり、これを1961年に較べると10%以上も高くなっている。

これに対して、純農村的性格のY地区は、1966年以降において、水牛頭数が著しく増加している。とりわけ水田耕起用の牝水牛の増加が目立っている。つまり、ゼヴ牛の牝牛を減じ、その代替として牝水牛を導入している。この変化は、何を意味しているのか興味ある問題である。

ついで、家禽類については、両地区とも鶏が飼育されており、いずれの地区ともにその羽数を増やしている。この地域では、一般にカーストや零細農民によって放し飼いでこれらの鶏は飼われ、採卵及び食肉用として売買もされている。このマルナードゥ地方での在来種の鶏の増加は、近年マイダン地方の都市近郊農村での白色レグホン飼育と著しい対照

をなし興味深い。

いずれにしても、この両地区にみる家畜・家禽飼育は、広大な放牧地の存在を背景にして、いわばコーヒー栽培を主軸にした地域経済のもとで、選択的に展開していると理解されよう。

三. 村落社会とウシ飼育

マルナードゥ地域での広大な放牧地を利用するウシ飼育に関しては、まず村落社会のあり方との関連から明らかにすることが必要である。つまり、調査村落のK地区やY地区においては、水田やコーヒー園などの耕地と集落とがいずれも木柵や生垣で囲い込まれており、放牧をめぐる社会的規制が個人レベルでのウシ飼育の在り方に大きな影響を与えている。ここでは、個人レベルのウシ飼育の在り方に村落社会として影響を与えていると考えられる(1)農業生産の再生産システム、(2)入会放牧地の存在形態、(3)限定放牧としての牧童放牧などの3点について、その実態を明らかにしておきたい。なお、近年の入会放牧地の個人放牧場化は、村落社会としての放牧規制を弛緩させる大きな要因であり注目すべき現象である。

1. 農業生産の再生産システム

調査村落における農業生産は、作物栽培の展開過程からみると、ウシ飼育と結合した水田農業から、水田農業プラス、コーヒー・カルダモンなどプランテーション作物栽培の農業へと変化し、近年ではプランテーション作物の生産が農業経済の中核を占めるまでに至った。つまり、現在の調査めんらくの農業は、コーヒー・カルダモン栽培農家によって担われており、彼らの言動は村落社会の運営に大きな影響を与えている。第3日は、ウシ飼育に焦点を当てた農業の再生産システムを表したものである。この図のうち、農業生産の担い手としての①上層農家群、ついで熱帯湿潤サバンナ気候下の山間地における②ウシ飼育と結合した水田農業、そして、近年のプランテーション作物の栽培とも密接に関わっている③ウシの一生について検討したい。

(1) 上層農家群の影響力

調査村落では、30エーカー以上の土地所有農家を上層農家と規定できる。この上層農家は、K地区で6戸、Y地区で3戸の合計9戸である。K地区を例にとり上層農家群の土地保有及びウシ飼育についてみてみよう。K地区の農家（農地所有世帯）の総数34戸のうちの6戸の上層農家が、第4表の通り、個人所有地面積の70.0%を占めている。とりわけ、近年水田価格に肉薄してきたコーヒー栽培地面積の80.7%を上層農家群が占めていること

Figure 3
表3 家畜・家禽頭羽数の推移

年次	地区名	Bovine (ウシ)												
		Cattle (牛)				Buffalo (水牛)								
		飼育世帯数	飼育頭数	飼育頭数	家畜単位数	飼育世帯数	飼育頭数	飼育頭数	家畜単位数	飼育世帯数	飼育頭数	飼育頭数	家畜単位数	
1961	K	72	—	162	182.09	—	129	76	16	53	42	33	9	7
1966	K	93	30	245	287.00	23	184	97	19	87	51	20	34	25
	Y	37	20	208	236.75	19	174	81	14	93	68	13	14	2
	計	130	50	453	523.75	42	358	178	33	180	119	33	48	49
1982	K	79	37	277	314.00	36	224	147	46	77	43	15	29	24
	Y	51	31	238	285.20	31	178	107	28	71	46	14	25	35
	計	130	68	515	599.20	67	402	254	74	148	89	29	54	59

注) ① Aは、調査時点での搾乳中の頭数、Bは、使役中の頭数。
 ② Kは、クルバトウール小村地区、Yはヤダワラハリ小村地区
 ③ a)は、「Village Survey Monographs, No. 15 (Kurubathur Village), 1961年4月調査。
 b)は、「Livestock census」1966年4月調査。
 c)は、1982年9月調査。
 d)は、R.O. Whyte (1964, p. 409)の次の算定基準にもとづいている。
 。 使役中の牝水牛と搾乳中の牝水牛
 。 その他の牝牛、搾乳中の牝牛とその他の水牛(成牛)
 。 牝成牛(水牛)
 。 育成牛(牛)
 。 羊と山羊(含豚)
 ④ $\alpha + \beta = 7$

飼育世帯数	Sheep (羊)		Goat (山羊)		Pig (豚)		Poultry (鶏)	
	飼育頭数	飼育頭数	飼育頭数	飼育頭数	飼育頭数	飼育頭数	雄鶏数	雌鶏数
2	2	3	5	0	184.42	11	22	
0	0	7	11	0	290.67	46	94	
0	0	4	18	13	260.75	20	27	
0	0	11	29	13	551.42	66	121	
1	2	1	3	0	315.67	61	132	
1	3	3	8	4	290.53	39	85	
2	5	4	11	4	606.20	100	217	

Table 4 land price and landholdings in Kurubathur

kind	estimated land price ^①		Kurubathar village			landholdings of the upper class farms (Hhs)	
	1972	1982	acres	No. of	average acres	ratio (6/34)	average (Hhs)
Paddy	Rs. 4,000	Rs. 10,000	151.25	30	5.04	59.5 ^(%)	15.00 ^{acres}
Coffee	1,000	5,000	141.48	15	9.43	80.7	19.03
Cardamom	300	2,000	59.93	17	3.53	68.9	6.88
Grass land	50	2,000	135.70	15	9.05	78.5	17.75
Total	—	—	503.20	34	14.80	70.0	58.67

note: ① Rupees/acre

Table 6 Land use by geographical features in Kurubathur and Yadavarahalli (1982. 8)

	Valley (V)	Hill (H)					Ground	Ratio	
	Paddy (acres)	Grassland	Coffee	Cardamom	Other	Total	Total	Ⓐ	Ⓑ
Kurubathur	151.25	135.70	141.48	59.93	14.84	351.95	503.20	0.9/1	2.3/1
Yadavarahalli	114.25	106.45	68.60	31.50	2.80	209.35	323.60	0.9/1	1.8/1
Total	265.50	242.15	210.08	91.43	17.64	561.30	826.80	0.9/1	2.1/1

note: Alphavets in the column of "Ratio" refer to as follow; Ⓐ for $\frac{\text{Grassland}}{\text{Paddy}}$, Ⓑ for $\frac{\text{Valley}}{\text{Hill}}$

が注目される。また、10年前までは低い価格であった放牧地は、近年著しい地価上昇をみているが、³¹⁾戸の個人所有放牧地面積の78.5%はやはり上層農家群のものである。さらに、ウシに関して、総頭数277頭の52.0%に相当する144頭を上層農家6戸が飼育しており、そのうち最も価格の高い牝水牛に関してはその58.6%を飼育している。このように、上層農家群は、高い収益性を期待できる農地やウシを選択的に所有し、その所有状況は、いずれもそれぞれの過半を占めるに至っている。

このような少数の上層農家の土地所有規模とウシ飼育規模は、他の中・下層農家群と較べてみると余りにもその格差が大きい。調査地区のうち、前述したK地区は申すに及ばずY地区においても、その状況は同じである。つまり、Y地区の農家35戸のうち、上層農家は僅か3戸であるが、これら3戸の農地所有面積は、1,345エーカーに達し、それはY地区の41.6%を占めている。とりわけ、K地区と同様に、コーヒー栽培地面積の57.6%を3戸の上層農家が占め、同じく個人所有放牧地面積の48.4%を占めている。ウシ飼育についても、総頭数では24.3%を占めるに過ぎないが、価格の高い牝水牛については、地区の52%に当たる13頭を3戸の上層農家が飼育している。

以上の通り、僅かの上層農家が農地所有にしてもウシ飼育に関してもその規模は群を抜いて大きく、中・下層農家群の追随は不可能である。この上層農家群の農牧業経営の動向が地域の農牧業のあり方を大きく規定しているといえよう。

(2) ウシ飼育による地力維持の農業

熱帯湿潤サバンナの高温多雨気候下における山頂部付近に位置する調査地区の水田農業は基本的に草肥農業的性格を帯びる。つまり、南西モンスーン期の多量な降雨は、その活発な洗脱・侵食作用によって農地に大きなマイナスの影響を及ぼす。つまり、開発された農地の多くは、土壌の流出と酸性化によって地力の低下が進行する。そのために、この地区の農業は、まず土壌流出の少ない場所での農業方式、つまり谷底地での水田農業が選択されることになる。これら開発された水田は、稲の栽培と多量の降雨とによる地力低下を余儀なくされるため、草肥・❖肥の投入と❖耕による土壌攪拌とが低下した地力を回復させる最良の技術としてこの地区に取り入れられ、一定の生産力を保持できることになる。この地区の集落成立の過程は、まさしくこの水田の地力維持技術の確立過程と表裏一体をなすものである。このいわば、マルナードゥ農法といえる草肥・❖肥の多量投入による水田農業は、降雨の少ないマイダン地域の水田農業とは明らかに異なっている。マイダン地域の水田農業は、稲の作期における灌漑水の安定供給のかめの技術が要求される。

調査村落のK地区とY地区における水田農業は、このような意味においてウシ飼育との結合こそが、再生産のための必要条件となる。つまり、前掲第3図の通り、放牧調査村落

とウシ飼育及び水田農業とが安定した循環システムとして成立しており、強い結合関係ができあがっている。この循環システムに割り込んだのが、近年のコーヒー・カルダモン栽培である。この最も重要な現金収入源として登場したコーヒー・カルダモン栽培は、前掲第2図の通り、1970年より盛んとなり、著しくその栽培面積は増加した。その結果は、水田のみならずコーヒー・カルダモン栽培に対し草肥・❖肥を施すことから、草肥・❖肥に対する需要は高まり、そのために❖肥の一部は売買取り引きされている。つまり、コーヒー栽培の有力上層農家の中には、自家生産の❖肥だけでは足りず、他のウシ飼育世帯より現金もしくは稲藁との交換によって積極的に❖肥を入手し、特にコーヒー栽培調査村落に施肥している。この傾向は、ウシ飼育の経済的価値を高めることとなり、前掲第3表の通り、調査地区におけるウシ飼育頭数の増加をもたらした。そのために、ウシの飼育基盤としての放牧調査村落や稲藁に対する要求も高まり、放牧調査村落に対する放牧強度の高まりや稲藁の現金取引が進行しつつある。

以上の通り、近年のコーヒー・カルダモン栽培の発展が、水田とウシ飼育との結合関係に割り込むかたちで進行した為に、❖肥需要が一段と高まり、結果として増加したウシ飼育頭数により、入会放牧地の過放牧現象がもたらされ、放牧調査村落の草生力が低下し、そのことが上層農家の所有する個人放牧地の囲い込み（木柵・生垣・土塁・溝）による放牧地の集約的利用への転換原因となっている。

(3) “ウシの一生”と村落社会

調査村落のウシ（Bovine）は、ゼブ牛（Zebu Cattle）と水牛（Buffalo）とである。1960年代までは、一般にマルナードゥ地方のゼブ牛や水牛は多雨気候などに影響されて病死や死産が多く広大な丘陵地に恵まれながらも、この地で繁殖生産されることは少なく、多くはより乾燥したサバナ気候下のマイダン地方から流入していたといわれてきた。³²⁾しかしながら、今日、在来種で、耐病性に勝れた小型のマルナード・ギダス（Malnad Gidsas）牛が、³³⁾少なからずこの地で繁殖、育成されている。

調査村落では、この小型の在来種とマイダン地方から購入された大型のハリカール種（Halikar）³⁴⁾とが明瞭に識別される。また水牛の多くは、やはりマイダン地方から移入される。つまり、今日なお調査村落のウシ飼育は、マイダン地方のウシ飼育に大きく依存していることは否定できない。

第4図は、調査村落のウシの年齢別頭数をサンプル農家の例でみたものである。この図より、①比較的年齢の高い牝ウシ（8～15才）が多い、②年齢の低い牝ウシが増えていること、③年老いたウシ（20才以上）が飼育されていることなどが知られよう。

つまり、従来から飼育されてきたマルナードゥの在来種の牛は、多雨気候と優良な種牝

牛やカルシウムの不足により、小型ではあるが耐病性に優れているために、今日においても多くの牝牛は、体高の低い小型の在来種（ギイダス種）牛であり、自家繁殖用に飼育されている。これに対し、主に運搬用の牝牛には、大型のハリカール種が多く、購入され高齢になるまで使役されている。また、水牛については、ムラ（Murrah）種など、³⁵⁾優良水牛は少なく、デーシ（Deshi）種つまりマイダン地方の在来種である。

調査村落のウシの一生は、単純なものではない。多くの在来種の牝牛は、生まれて死ぬまで村落を出ることは少なく、14～15才で死ぬ。その間に、4～5頭の子牛を生み、僅かばかりの牛乳を生産する。これに対し、ハリカール種の牝牛は、マイダン地方で生まれ育成され、3～4才で牽引・耕牛向きに仕立てられ周辺部落に牛市や❖先取引きで買い取られ、数ヶ月間使役されたのち、8～9才でマルナード地域の調査村落等に移入している例をよくみる。そして、その後は、高齢まで働き、在来種牝牛同様に飼育殺しにされるか、ほとんど無料に近い値段で人の目に触れないように商人により屠殺業者・皮革処理業者に引き取られているものと判断せざるを得ない。また、在来種の牝牛は、多くは❖肥生産用として飼育されており、一部は❖先での売買で村落を出て、さらに降水量の多いマチバル海岸地域の村落に仕向けられている。

つぎに、水牛については、搾乳用の牝水牛は、4～5才の繁殖可能のものが多く、耕起用の牝水牛は3～4才と若干若いものが主である。そして、多くは14～15才まで飼育され、ゼヴ牛同様に処理される。村人の多くは、死ぬまで飼うと云い、死んだウシは土に埋めると言うが、実際には、皮革やウシの売買をするイスラム教徒等が調査地区及び近辺に定住していることから、村人の建前の回答とは別に、自らのウシを梗村人の存在を推定せざるを得ない。ただ、1981年にK地区のバス道路沿いに農村家畜診療所（Rural Dispensary）が開設し、日常の診療活動や飼育管理の指導などが不十分ではあるが実施されるようになり、伝染病等によるウシの大量病死が防げるものと期待されるだけに、今後マルナード地方の“ウシの一生”にかなりの変化が予想される。

つぎに、ウシ飼育に関して、村落社会つまり行政村の行政機能としてどのような関わりをもっているのかをみてみよう。

第5表は、カルナータカ州の法律にみる行政村レベルにおける行政機能とウシ飼育との関連をまとめてみたものである。このうち、調査村落では、ウシの囲い場（Doddly, cattle pound）の問題が、前掲第3図に示されているように最も重要なものである。このドッドリは、放牧中のウシが、他人の水田やコーヒー園などに損害を与えた場合に、そのウシは発見者の手でドッドリに繋がれ留め置かれる建物で、村パンチャートによって管理運営されている。このドッドリに留置されたウシの所有者は、罰金及び飼料代金やパンチャー

トに支払い、ウシを引き出す。従って、パンチャートにとっては、その罰金や飼料代金は村財政の収入源として位置づけられている。つまり、このドッドリの設置は、自由放牧から限定放牧への転換と村落制の成立過程との両側面から検討される問題であり、マルナードゥ地方の放牧の盛んな村落では、このドッドリをめぐる問題は、村落の社会経済的問題を解く鍵となろう。

2. 入会放牧地の存在形態

放牧地（Gomal）には、①村入会地と②個人所有地との2種類がある。多雨気候下の放牧地であるが、近年の過放牧による草生力の低下は著しく、放牧地だけに依存するウシ飼育は、まさしく曲がり角にきている。村落レベルでの入会放牧地における過放牧による草生力低下や土壌侵食などに対する共通認識とそれらに対する早急な防止対策が望まれる。

(1) 地形と植生状況

丘陵地と谷底地とにより2分されるマルナードゥ地方は、さらにミクロにみると第5図のような地形断面に模式的に描くことが出来る。調査村落では、水田に利用されている谷底地と放牧地などに利用される高燥の丘陵地（比高は、約20m程度）は、第5図の通りいずれも凸状斜面で、傾斜は頂上付近で3°前後で、下部になると30°前後と急になる。地質的には花崗片麻岩を母岩とし、厚さ10m前後の風化層は赤色粘土よりなり、斜面末端部には一部崖錐体積物がみられる。

この崖錐体積物の発達した場所は、肥沃であることからコーヒーやカルダモン栽培の適地となっている。谷底地の幅は、一般に50～100m前後とせまいが、谷頭からヘマバティー川に達するまでには、前掲第2図の通り10～20km余りあり、この緩傾斜の谷底地が水田となっている。谷頭には、溜池があり、かけ流しの灌漑水が、ヘマバティー川まで展開する棚田を潤す。丘陵地の過半を占める放牧地は、南西モンスーンの始まりと共に1年生のイネ科のスズメノカタビラなどが成長し、高くてもその背丈は20cm程度で、多くは浅根性のシバ型草地となっている。3～5月の酷暑寡雨期には、まったく草らしき緑は見いだすのは困難となる。

この放牧地のうちで、入会放牧地での裸地化が近年顕著になってきている。とりわけ、K地区の学校周辺や定期市の開市される場所附近、つまり丘陵地の頂上附近にあたる場所は、裸地化が進み、放牧地としての草生力は著しく低くなっている。その一部はユーカリなど植林のために掘り返され、その周辺に排水溝を掘るなどの工事がなされている。K地区では、1980年前後からB・D・Oの援助により既に入会放牧地のうち、14エーカー余りが植林化されている。その他、放牧地の土壌侵食を防ぐための等高線土堤（コンターバ

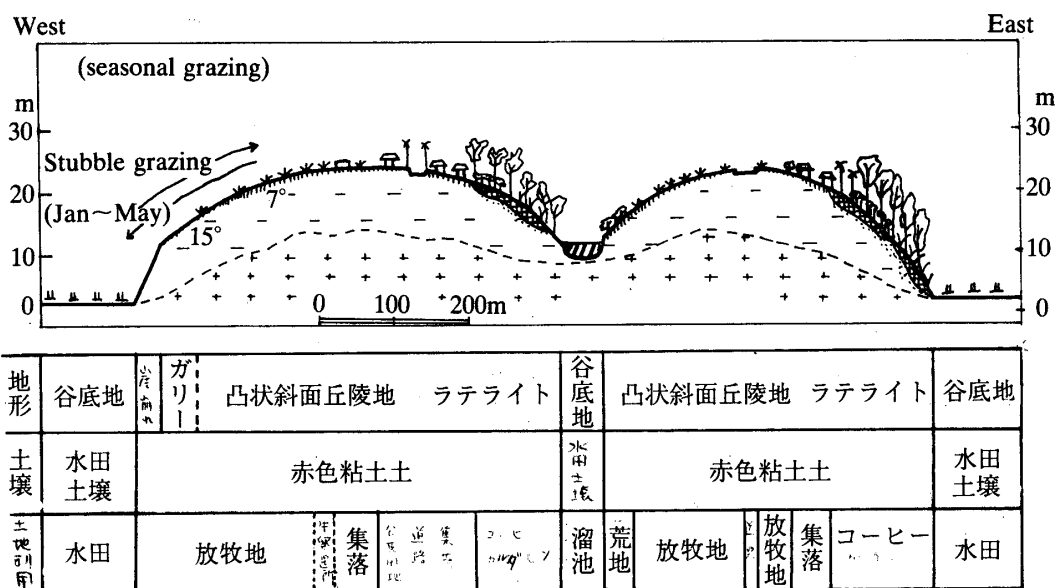


図5 調査村落の模式的地形と土地利用 (貞方昇, 1984)

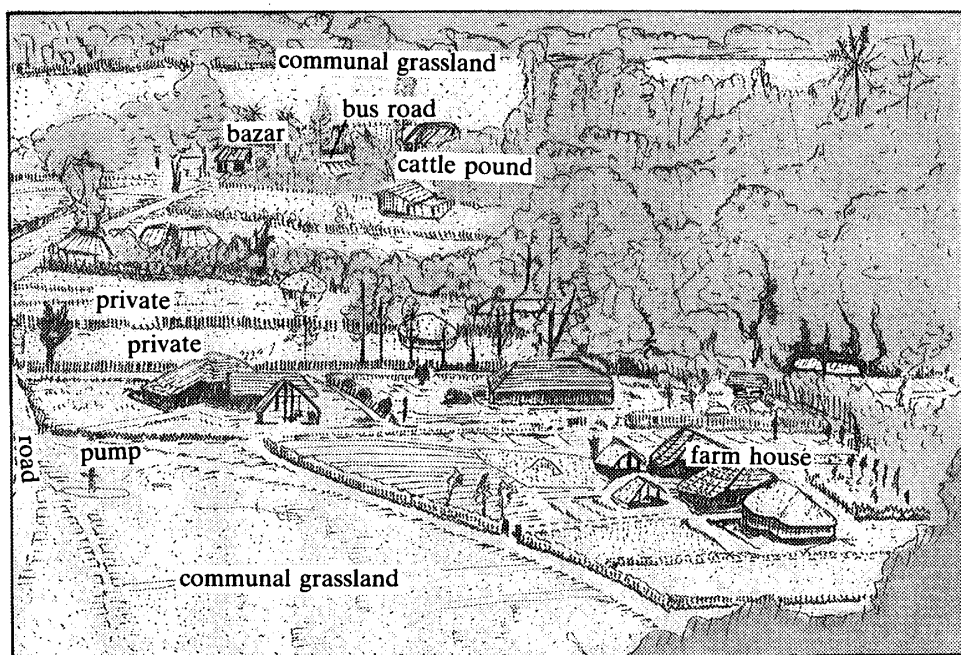


Figure 6.

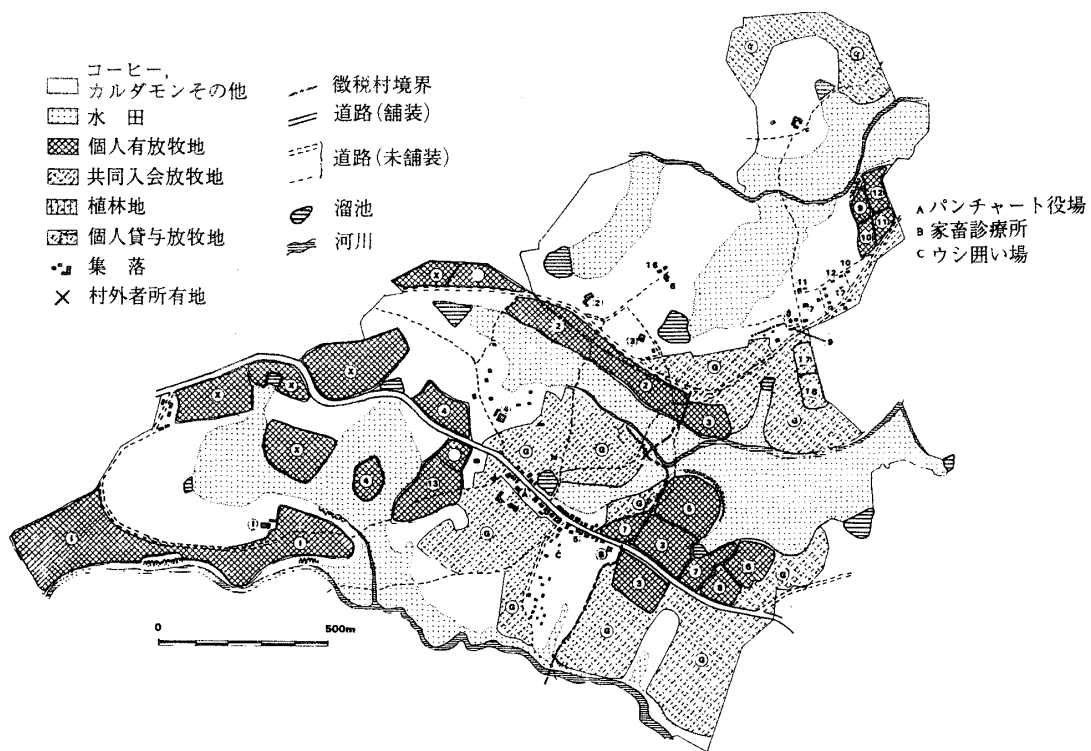
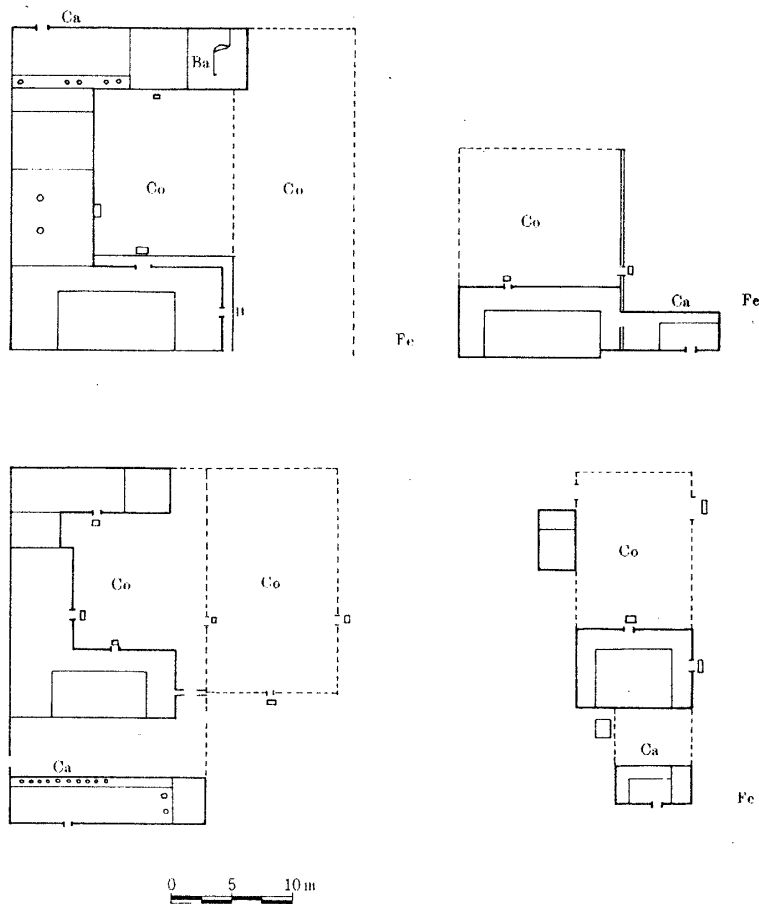


図7 K地区とY地区の共同入会放牧地と個人有放牧地の分布 (1982)



ンド)を設置するなどの工夫がこれまでなされているが、丘陵地の主に西斜面の脚部に近い急斜面では、ガリー(雨裂)や小規模な土砂崩れなどの崩壊地形がみられる。

このような丘陵入会放牧地の生産力低下に対し、管理主体の村パンチャヤートは、この草生力の低下に対する有効な対策を取るよう期待されている。農民のいう“ここ10年で放牧地の草丈は半分になった”という証言に対して、村パンチャヤートは入会放牧地の望ましい新たな管理とその利用秩序の具体的提示でもって答えなければならないが、それにしでは余りにも行政機能は非力であり、その財源は小さいのである。

(2) 放牧期間と牧養力 (Carring Capacity)

マルナードゥ地方でのウシの放牧は、近年では、ほぼ1年中行われていると言える。調査村落では、一般的には南西モンスーン期間中の6~7月の2カ月間は、牝牛や牝水牛が水田耕起に使役されることや、強い風と激しい降雨を避ける意味において、休牧し舎飼れる傾向³⁶⁾がある。しかしながらこの期間でさえ、降雨を避けて、集落近くの放牧地に牝牛や使役に使わないウシを放牧する例も多い。また、農家によっては、3~5月の酷暑期にも牝牛を休牧する例があるのは、主にコーヒーやカルダモン栽培調査村落への❖肥などの運搬に使役するためである。前掲第5図で示されるように、丘陵調査村落の放牧と水田跡地での放牧とを組み合わせると周年放牧の形態をとっていると言えよう。

1月から5月初旬までの5カ月余りは、ゴーマルには草はなく、そのため水田刈跡地の放牧強度は高まる。Y地区では、水田の二期作を行う農家があり、水田刈跡地での放牧面積が狭くなったこととウシ飼育頭数が増えてきたことにより、この時期の放牧環境は特に悪くなっている。ついで、南西モンスーン期とポストモンスーン期は、いずれも丘陵地の放牧地を利用しての放牧である。

このような周年放牧形態をとるウシ飼育法は、マルナードゥ地方の一般的傾向なのではあるが、ウシの種類・用途に応じて多様な飼いが工夫されている。つまり、ウシの繁殖・生産は、多くは南西モンスーン期の始まる前後からで、生まれた子ウシにとって7~8月の激しい風雨は、最大の障害となる。また、この時期は、日中の気温変化が激しいためにウシの病死が多くなる。ウシの病死に関する具体的資料は作成されていないので、病名や病死頭数の把握は出来ないが、³⁷⁾サクレスプールにある家畜保健所 (Vetarinary Hospital) の予防注射の種類からみると、敗血症がワクチン注射の過半を占めている。そして、下痢 (Diarrhola), 赤痢 (Dysentry) の他に、モンスーンの初期と晩期には、出血性敗血症 (Haemorrhagic Septicaemic) が突発するなど、マルナードゥ地方の激しい気候に起因する病死が少なくない。ちなみに、風雨の激しいモンスーン期には、ウシの種類や年齢などに応じての放牧、強い風雨の日は昼間でも舎飼いをし、生草や腹を冷やさない為にお湯な

どを適時与えるなど工夫がなされたり、また、この時期に水田耕起などに使役するウシに対しては、米糠・豆腐など濃厚資料を与え体力回復を図るように努力している農家がみられる。しかしながら、依然として周年放牧形態による粗放的飼育管理の域を脱していない。

放牧時間については、季節や天候、放牧地の草生状態や放牧地までの距離など、さらに牧童・牧夫の雇用条件、個人所有の放牧地の有無などにより異なるものの、一般には、1日8時間程度の昼間放牧であり、午前8時過ぎから午後5時頃までである。しかし、放牧地の草生状況が悪くなると、放牧時間はやや延長される傾向にある。

広大な放牧地に依存してのウシ飼育ではあるが、“放牧地に草が生えなくなった”という嘆きに関し、現状での放牧地の牧養力について検討してみたい。ただし、ここで言う放牧地の牧養力は、厳密な意味でのそれではなく、水田からの一定の稲藁生産を前提としての話であることをことわっておく。

個人放牧地を有する上層農家群の農民は、“放牧地1エーカー当たり2頭のウシ”という。しかし、村落レベルでの放牧地の牧養力を計算すると、K地区では1エーカー当たり2.30頭、Y地区では1.70頭と計算され、ほぼ前述の証言と一致した数値となる。しかし、現実には、ウシ飼育農民は“放牧地が足りない、草が生えない”などと、粗資料確保の困難性をウシ飼育の最大の問題としている。ところで、上層農家の言う1エーカーの放牧地で2頭のウシ飼育ができるとする背景には、草生力の比較的高い個人有放牧地に対応した水田面積を所有し、干草生産のないこの地域では、水田の稲藁が重要な資料源で、この稲藁と放牧地の生草とによってウシの年間消費資料が賄われているのである。³⁸⁾

また、Y地区の中層農家は、“水田4エーカーで、最大限10頭のウシが飼える”と言う。この農家は、個人有放牧地10エーカー、そして水田3エーカーのうち2エーカーは二期作をしているという条件を考慮すると、この中層農家は水田1エーカーに約2.0頭のウシと言うことになる。

さらに、1961年当時に遡って村落レベルで放牧地の牧養力をK地区でみると、放牧地175エーカー、ウシ飼育は169頭であり、1エーカー当たり0.97頭となる。“放牧地が明らかに多すぎるので、放牧地をコーヒー園にする”とある。既述したようにK地区では、過去20年間で水田面積に、大きな変化はない。しかし、放牧地面積は約60エーカーの減少をみているのに対し、ウシ飼育は115頭増加している。このK地区の例で明らかのように、近年ウシ飼育は、ますます水田の稲藁生産に依存する傾向を強めていると考える。

それだけに、中下層農家群等の水田所有の零細もしくは皆無のウシ飼育農家にとっては、無料で、唯一の粗飼料源である入会放牧地の牧養力の低下は切実な問題となっている。

(3) 放牧地の個人所有化と囲い込み

丘陵地の放牧地には、①共同（入会）利用放牧地と②個人利用放牧地とがあり、後者の一部が近年では個人的な囲い込み（Beli）がみられる。

ここで問題とする個人放牧地に関して、調査村落においては、①20世紀初頭の検地の際に区画され個人の利用が可能になったものと、②独立後において“土地なし家なし住民（Landless People）”に、政府が入会放牧地を安価に分割譲与したものの2つのタイプがある。放牧地を個人所有する農家は38戸あるが、うち6エーカー以上の放牧を有する農家が11戸で、いずれも20世紀初頭の検地で入手したものである。その他1～2エーカーの零細所有農家は、独立後に入手したものと推察される。

一般には、西ガーツ山地の西方山麓のサウスカナラ（South Kanara）県下の水田農村では、水田面積の2倍を越えない限りで、いわゆるゴーマル（放牧地と雑木林地）を個人的に利用できる権利、つまりクムキ権（Kumuki right）⁴⁰が認められている。このゴーマルは、単に放牧利用だけでなく採草や緑肥、特に水田地力に草肥を施すことの必要性から水田面積に対応して認められたものである。本調査村落でもこの慣行がおこなわれていたかどうか、明らかでないが、もしそれが実施されていたものと仮定して、現在の個人所有の水田と放牧地の面積の比を計算する、第6表の通りK地区で1：23、Y地区で1：18となる。そして、両地区を平均すると、くしくも1：21となり、クムキ権の比とほぼ一致する。

これに対し、独立後の対策にもとづいて、丘陵地の共同放牧地の一画を、ウシ飼育農民に分割譲与する例がY地区の中層農家に対して多くみられる。その多くは、2～3エーカーの放牧地を個人的に利用することが可能となった。また、近年では、政府からの放牧地の借地の例もみられる。さらに注目すべきは、とりわけK地区において顕著であるが、土地なし住民（多くは職人）に対する共同放牧地の安価での分割譲与の件である。その多くは、1960年以降において、政策にもとづいて1戸当たり1～2エーカー単位で屋敷地・耕地として分け与えている。第6図は、職人や農業労働者に分割譲与された、K地区南部のかつての共同放牧地を示す。1戸当たりの面積は1～2エーカーであり、同地区に現在14世帯が住んでいる。

以上のように、共同放牧地の個人分割が進展すると共に、今日の状況では、さらに個人化された放牧地が、木柵や生垣で漸次囲い込まれていることが注目される。これまでも、集落・耕地は放牧ウシからの被害を避けるために、大垣（集落）や柴垣（個人の屋敷・耕地を囲む垣）などがつくられていたが、これに加えて最近では、個人利用の放牧地も囲い込まれるようになってきた。Y地区では、第7図⑦の地図に番号⑨～⑫や⑬、⑭など生垣、竹垣さらに木柵によって明白に囲い込まれ、③、⑤、⑥などは溝を掘ることによって境界

をもうけている。

3. 村落社会と牧童型放牧

調査村落の社会経済的性格は、谷底地の水田耕作にその基盤を置きながらも、広大な丘陵地のプランテーション・放牧等の利用およびその分割をめぐって歴史的に形成されたものである。とりわけ、この丘陵地の利用をめぐって、ウシ飼育とコーヒー・カルダモン栽培との間に、また共同社会としての利用もしくは個人的利用との矛盾を孕みながらも、パンチャートを中心に村役場は丘陵地の利用に一定の役割を演じてきた。

この地方のウシ飼育は、既述の通りこの丘陵地利用による昼間放牧・夜間舎飼の飼育形態をとっている。ここでは、ウシ飼育と村落との関わりを、(1)放牧方式の変化、(2)牧童(牧夫)型放牧および、(3)村営ウシ囲い場(ドッドリ)の機能についてみてゆきたい。

(1) 自由放牧から限定放牧への転換

既述したように、K地区の集落発達は4期に分けられ、第3期の1920年代において、K地区の幹線道路沿いに商店や商家が並び、小さなバザールが形成されたとされる。この1920年代には、KとY両地区において(1)修正検地(revisional settlement)1924-25年の実施⁴¹⁾、(2)ドッドリの設置および(3)コーヒーやカルダモン栽培の本格化への時期である。

ここでは、この時期の自由放牧から限定放牧への転換についてみてゆきたい。ただし、K・Y地区での依然に行われていた自由放牧の実態を明らかにできる資料を得られなかったため、ここでは、著者等のもう一つの調査であるサウスカナラ(South Kanara)県ベルタンガンディ(Belthangady)郡ナラビ(Naravi)村⁴²⁾における自由放牧の例を取り上げ、K・Y地区の限定放牧との比較および転換要因を考えてみたい。

西ガーツ山地西麓の海拔100mに位置するナラビ村では、今日なお自由放牧によるウシ飼育が行われている。水田を主とする耕地や集落が木❖や土壁などで囲まれ、放牧地となる広大な林野は、豊かな雨林景観を呈している。第8図で見られるように、ウシ❖屋には、2つのタイプがみられるが、いずれもその出入口にはすべて入会林野の側、つまりアウトフィールド(Out Field)に向けられており、ウシは、牧童の手を借りることなく、自由に放牧地に行ける。放牧地までの道は、主に人道・バス道でもあるがウシ専用の道もみられる。所有者が、早朝に❖屋の木戸を開けると、ウシは隣家のウシなどを連れ立ち、一群をつくって放牧地へ行き暗くなるはまた連れ添って帰宅する。村人は、“ゼウ牛は賢いから手がいらんが、水牛は迷って家に帰らない場合がある”など、ウシの放牧には、全く手をかけない。

自由放牧のために、村人は各自の耕地に木柵や土壁をつくり、ウシの侵入を防ぐことに

意を注いでいる。村落の耕地は、主として水田でありそこでは用水確保の容易なところでは、2～3期作がなされ飯米確保に力が注がれ、またわずかばかりの畑地は、豆類やカシューナッツ園の他、近年ではアレカナッツやココナッツ栽培が導入され、村人の農業収入は米作とナッツ類に依存している。放牧期間は南西モンスーン期の激しい降雨時は避けるものの、ほぼ周年放牧で、各耕地での刈跡放牧は、近年の水田の2～3期作や、商品作物としてのナッツ類の栽培など農業の集約化の進展によって制限されている。今日では、その放牧は漸次周辺林野に及んでいる。

これに対し、個人的に耕地に何かの事情で柵を作れない農家の水田や畑地は村人の放牧するウシの格好の餌場であり、終日、ウシの姿が絶えないのである。

一方、牧童による限定放牧の行われているK・Y地区のウシ❖屋の形態は、ナラビ村と同様に2タイプあるものの、ウシは、自由放牧でなく牧童によって❖屋と放牧地との間を毎日往復するのである。

一般的には、この自由放牧から限定放牧への転換は、伝統的な自然経済から産業経済への転換、つまり、自給経済から商品経済への発展として考えるべき性格のものである。しかし、K・Y地区とナラビ村との両地域間での顕著な経済格差は、見出し得ない。いずれの地域においても、水田農業を基軸とし、近年樹木作物 (tree crops) の栽培が顕著に伸びている地域である。ただ、この放牧形態の差は、前者が丘陵地でのコーヒー等樹木作物に重点を置き、後者は水田での稲作に経営の主眼が置かれている点に相違がある。

K・Y地区での自由放牧から限定放牧への転換要因は、マクロ的に言えば、地域経済の発展という一言で片付けられなくもないが、ミクロ的にみると次の諸点が考えられる。第1は、広大な丘陵地は、本来的にウシの共同利用に委ねられていたものが、コーヒー・カルダモンなど樹木作物の栽培地としても個人的に耕地化され始めたこと、第2は、政府が、修正検地によって実質的な地稅収入増を図るため、納稅者の個人的經濟援助を保障する必要性から、あの村営ウシ囲い場を設置したこと、そして第3に近くのマイダン地方の村落におけるウシの放牧規制を容易に学び得たことなどの理由が考えられよう。

つまり、現在のK・Y地区をミクロ的にみると、丘陵地にある疎塊村形態をとる集落とその周辺に散在する個人耕地との関連を経済的にみると、自由放牧による村人の利益は既に望めない。つまり、ウシの飼育管理がやや集約化し、家計としてウシ飼育に経済的期待を持つようになってきているのである。

(2) 牧畜型放牧と牧童

マルナードゥ村落では、広大な放牧地のいたるところで、ウシの一群を連れた牧童の姿をみる。10～20頭の一群を、ナイロン袋 (または麻袋) と山刀を小脇に抱え、手に細長い

木棒を持った牧童が追う。日除け用の帽子や頭巾が、その牧童・牧夫の年齢を推定させる。

調査村落でのサンプル調査世帯23戸について、牧夫調査をし第7表に示した。23戸のうち10戸は、年雇または日雇いの牧童がいて、ウシの牧童のみに専念するが、残る13戸のうちの5戸はY地区にあって、口述する放牧輪番グループに加わっている。最後の8戸では、世帯主がウシを放牧する例は1戸のみで、他は世帯構成員の誰か、その多くは12~16才の少年、1戸は12才の少女が放牧労働に携わっている。

いずれにしても、放牧地でのウシは、繋牧ではなく、牧童による限定放牧である。このいわば牧童型放牧方式の成立については、次のように考える。つまり後述するドッドリの存在とも関連するが、第1に、放牧中のウシが他人の農作物に被害を与え、ドッドリに留め置かれた場合、その罰金や飼料代などの支払いがウシの所有者にとって大きな負担となる。第2に、調査地域では、青少年労働が容易にしかも安価に入手できることや、第3に、牧童によって、より目の届く効率的な放牧の要請があったことなどが考えられる。

牧童を雇っている10世帯の雇用主については、10戸のうち8戸が水田と放牧地を有するコーヒー栽培者であり、他に職人（大工、衣服仕立て業）2戸がいる。一般に、1人の牧童を雇用する例が多いが、2人を雇っているのが2例ある。牧童の年齢は、12名のうち10才代が7名、20才代が2名、10才代と50才代そして10才未満の者が各々1名いる。そして、12名中11名が男性で、いずれも3食付きで年間2~3回ほど衣服を与えられ、いわゆる食扶持減らしの奉公人がその過半を占める。これら年雇または日雇いの牧童は、雇用主の住む地区と同一かまたは、隣村出身者が多く、午前8時にはウシを連れ放牧地へ向かい、午後5時過ぎには❖舎に連れ帰る。ウシを放牧する範囲は、Y地区の例をみると、ナルリ（Nalluli）地区やベルール（Bellur）地区など、せいぜい隣接する半径4~5kmの範囲の地区である。

次にY地区に於いて、慣習的に行われてきた放牧輪番制についてみてゆきたい。地区には、2つのグループがあり、第8表はそのうちの1つのグループの構成農家一覧である。グループを構成する農家の共通性は、屋敷地が近接し、水牛を飼育しておらず、そして④農家を除くと、いずれも使役用の牝牛・去勢牛飼育を中心とする農家である。しかし、グループを構成する7戸の農家は、いずれも土地所有や牛飼育規模およびジャティー等を異にする点が多い。

この放牧輪番制は、7戸の農家で1つのグループをつくり、その構成農家の全ての放牧牛を、一週間のうち曜日を決めて、それぞれ1戸の農家が世話をする近隣集団内互助制度である。この制度は、少なくとも牧童型放牧が始まった以降にみられるようになったものと推察されるが、その詳細は知れない。この制度は、構成員の平等義務を前提にして成立

Table 7 Herdboys and headmen by each of sampled households

(1982. 8)

No. of household	Cattle		Buffalo		Land-holding	village	Herdoys & Headmen							Remarks (3)
	Cow	Ox	she	he			(1)	Age	(2)	Wages	Meal	Cloth	Lodging	
①	34	13	6	6	115.0	K	18	E	5(Day)	-	-	○	Kamanahalli	-
							12	E	5(Day)	-	-	○	Kamanahalli	
②	10	15	2	-	78.0	K	9	E	300(year)	○	○	○	Nidigere	-
③	8	3	4	2	35.8	K	15	E	2.5(Day)	○	○	○	Yadavarahalli	-
④	10	4	1	2	38.7	K	45	E	5(Day)	○	○	○	Kurbathur	-
⑤	5	3	2	3	42.0	K	-	F	-	-	-	-	-	-
⑥	2	2	5	2	0.6	K	10	E	1(Day)	○	-	-	Yadavarahalli	-
⑦	6	8	-	-	7.0	K	15	F	-	-	-	-	-	-
⑧	7	1	1	-	-	K	16	E	275(year)	○	○	-	Hummalore	-
⑨	-	4	-	-	2.5	K	-	F	-	-	-	-	-	-
⑩	-	4	-	-	2.5	K	-	F	-	-	-	-	-	-
⑪	10	5	3	6	70.0	Y	13	E	600(year)	○	○	-	Yadavarahalli	-
⑫	14	4	3	4	25.0	Y	20	E	300(year)	○	○	-	Yadavarahalli	-
⑬	5	3	7	3	33.0	Y	28	E	400(year)	○	○	-	Bellur	-
⑭	5	7	3	1	31.5	Y	18	E	40(month)	○	-	-	Yadavarahalli	-
							50	E	200kg(year)	○	-	-	Nadahalli	
⑮	7	10	-	-	10.5	Y	15	F	-	-	-	-	-	-
⑯	1	3	2	3	3.0	Y	-	F	-	-	-	-	-	-
⑰	6	5	-	-	8.0	Y	12	F	-	-	-	-	-	-
⑱	-	1	-	4	4.0	Y	16	F	-	-	-	-	-	G
⑲	5	-	-	2	0.5	Y	12	F	-	-	-	-	-	G
⑳	2	-	-	4	2.0	Y	29	F	-	-	-	-	-	G
㉑	4	-	-	3	7.8	Y	60	F	-	-	-	-	-	G
㉒	1	-	-	3	7.8	Y	24	F	-	-	-	-	-	G
㉓	2	-	-	-	16.0	Y	12	F	-	-	-	-	-	-

Notes: (1) K=Kurubathur, Y=Yadavarahalli

(2) F=family, E=Employee

(3) G=a member of helping system group to graze

Figure 8 A case of helping system to graze bovine in Yadavarahalli

表8 放牧輪番組の構成農家一覽

農家番号	Jati	世帯人員数	分担日	職業	土地保有				総数	牛		備考	
					水田	コ-ヒ-	放牧地	その他		牝	牝		
①	Lingayat	5	日	農業	9.0	2.0	4.0	3.0	18.0	6	4	-	-
②	Bestru	5	月	農・農労	1.0	-	-	-	1.0	-	2	-	-
③	Lingayat	5	火	農業	3.2	0.1	4.0	-	7.3	2	2	-	-
④	S-C	3	水	農・農労	-	-	-	-	-	1	-	-	-
													長男(17才) 年雇の牛飼い
⑤	Billava	14	木	請負業	-	-	-	-	-	-	2	-	-
⑥	Bestru	10	金	農・農労	2.0	1.0	-	2.0	5.0	7	2	-	-
⑦	Lingayata	6	土	郵便・農	1.2	-	-	-	1.2	6	4	-	-

する民主的なものと解されなくもないが、現実には各構成員の受ける効用には著しい差がある。つまり7戸の農家間に牛飼育頭数に格差がかなりあることから、社会・経済的上下関係がある程度影響しているのではないかと解される。つまり、前掲第8表の②、④、⑤農家などは、牛飼育頭数が少なく、この放牧輪番制により牛放牧の直接的利益は少ないものと思われる。

村落社会に於て、ウシの入会放牧に関する地縁関係を重視した“生産と労働”の互助的結合がみられることは、興味深い。今後の詳細な研究が必要である。この放牧輪番制をとるグループの放牧では、主に世帯主が当番日に放牧労働に就いていることの意味も興味深い。このように、有力農家などのウシ放牧には、雇いの牧童による放牧が中心であるが、放牧輪番制の場合には世帯主（牧夫）により、またその他の零細飼育世帯の場合には世帯員のなかの少年・少女による例が多く見られる。

(3) 村営ウシ囲い場の設置とその機能

現在、マルナードゥ地域には、行政村レベルに村営ウシ囲い場が（Doddly, Village cattle pound）が設置され、放牧ウシに対する罰金制度が施行されている。つまり、個人の飼育するウシが、村営ウシ囲い場に発見者の手で留置され、その宿泊期間に応じて、ウシ飼育者は、罰金として宿泊・飼育代として現金でパンチャートに納入しなければならない。この罰金は、行政村の数少ない財源として重視されている。今日、この制度は西ガーツ山地西麓のサウスカナラ県にも認められる。

調査村落では、1920年代に、パンチャート事務所のある地区に初めてドッドリが設置されたといわれる。この設置時期は、ウシの自由放牧から限定放牧への転換期であると共に、県下のコーヒー・カルダモン等プランテーション作物の栽培がマルナードゥ地域で本格化した時期である。つまり、1878年にパンチャートの建物が村落内のやや小高い一角に建てられ、それがイギリス植民地支配の末端行政機関として機能することが要請された。地域農村の変化に対応する型でDoddlyの設置を財源として位置づけていたのではないかと考える。それでは、このドッドリからの収入が村の歳入にどの程度の割合を占めているか。1969-70年度についてみると、総歳入19,527ルピーお7.5%に当たる1,465ルピーが計上され、恒常的財源としては地稅収入につぐ第2位の地位にあることが示されている。⁴³⁾年度により多少の変化はみられようが、現在パンチャートの恒常的役人4名のうちの1人がこのドッドリの世話係であり、このことからパンチャートの重要な仕事であるといえよう。

第9図は、調査時点の過去1年間における旬別のドッドリ収容頭数の宿泊飼料代としてパンチャートが受け取った金額である。1981年10月から82年9月までの1年間の収容頭数の内訳は、ウシ70頭、子ウシ14頭、山羊19頭である。ウシ70頭の内訳は、ゼヴ牝牛が46頭

で最も多く、ついで牝水牛15頭、ゼヴ牝ウシと種牝ウシが各4頭、最も少ないのが牝水牛1頭である。子ウシは、2頭を除く12頭はゼヴウシであり、羊はいない。つぎに、パンチャートに支払われる罰金についてみると、水牛が3ルピー、ゼヴ牛2ルピー、子ウシと山羊が各々1ルピーであり、これに飼料代が加算される。飼料代は、1日水牛3ルピー、ゼヴ牛2ルピー、子ウシと山羊各々1ルピーで、宿泊日数に応じて加算される。

次に、収容頭数またはパンチャートに支払われた金額を旬別にみると、6月の下旬に最も多く、ついで8月上旬、9月上旬、2月下旬に多い。反対に、ポスト・モンスーン期の11月下旬から12月下旬にかけての1カ月間、全く収容されておらず、その他、1月下旬から2月上旬や7月上・中旬も収容されていない。年間を通して収容頭数をみると、南西モンスーン期に比較的多く、モンスーン期直前やポスト・モンスーン期後半が少ないようである。これをさらに家畜種類別にみると、収容頭数のもっとも多いインド牝牛は、1、2月の冬季間に18頭（年間の約40%）を数えるのに比べ、11、12月は全くなく、また5～7月の3カ月間は僅か2頭である。これは、11、12月が米やコーヒーの収穫期であり、放牧中の牛に十分な注意を払うこと、また4～7月には、牝牛や牝水牛の多くが耕起・運搬などに使役されるため、放牧される数が少ないことなどが関係していると思われる。さて、このドッドリの設置についても、もう少し突っ込んで考えてみよう。設置の時期や意図からみると、この制度はインド人自らの発案ではなく、イギリス統治の影響、とりわけイギリス人によるカルダモン・コーヒー農園の開設が関係したのではないかと考えられる。例えば現在のラージャスターン州のジャイプール県でも、ドッドりに似た村営囲い場（ここでは Kyne と呼ぶ）制度が1956年の Gram Panchayat Act によって定められているが、実際は自分の作物や耕地が他人の牛によって被害を受けているとしても、多めにみており、とりわけ所有者のいない迷い牛（stray cattle）に対しては寛大である。筆者が1987年に調査したアバネリ（abhaneri）村でも、村人たちは“せいぜい声をかけて追うだけで、叩かない”とか、“腹が太れば他所へいく”という。また、自分の願いがかなえられると、神への感謝の気持ちを、放牧牛の飲み水場などを自己資金でつくり、村の共用に委ねることによって表す場合もある。つまり、ヒンドゥー教徒には、本来、牛の自由な放牧行為を制限するような発想は生まれにくかったように思われる。一方、イギリスにおいては17世紀頃より、家畜のオープンフィールドへの侵入が大きな問題となり、耕地をさまよう家畜を収容する村営の家畜囲い場（Pound）がつくられ、檻（Pinfold）に追い込むのは村役人のパインダー野木六として一図蹴られ、それが彼らの収入の一部にもなっていたといわれる。⁴⁴⁾このことについては今後さらに検討する必要があるが、マルナードゥ地域におけるドッドリ制度について、現段階ではプランテーション開設を直接の契機とし、その発想を

Table 9 Numbers of bovine and landholding by each keeping size and village
(1982. 9)

		No. of households	Bovine				Total	landholding				Total	
			Cattle		Buffalo			Paddy	Coffee	Cardamom	others		(acres)
			Cow	Ox	She	He	(heads)						
Not Bovine	K	42	—	—	—	—	—	0.3	0.1	0.1	0.2	0.7	
	Y	20	—	—	—	—	—	0.4	0.1	0.2	0.3	1.0	
	T	62	—	—	—	—	—	0.3	0.1	0.1	0.2	0.7	
Keeping Bovine	K	37	4.0	2.1	0.8	0.7	7.5	3.8	3.7	1.5	3.9	12.9	
	Y	31	3.5	2.3	0.8	1.1	7.7	3.5	2.1	0.9	3.3	9.8	
	T	68	3.7	2.2	0.8	0.9	7.6	3.6	2.6	1.2	3.5	11.0	
By keeping size	零細 (1~2)	K	13	1.3	0.2	—	0.2	1.7	0.8	0.4	0.2	1.1	2.5
		Y	7	1.0	0.6	—	0.1	1.7	1.4	1.6	0.4	1.1	4.6
		T	20	1.2	0.3	—	0.2	1.7	1.0	0.8	0.3	1.1	3.2
	Small (3~8)	K	14	2.9	1.5	0.2	0.4	4.9	2.1	1.2	0.8	1.4	5.4
		Y	13	2.2	1.6	0.1	1.0	4.9	2.5	0.2	0.5	1.6	4.6
		T	27	2.6	1.6	0.2	0.7	4.9	2.3	0.7	0.6	1.5	5.0
	Medium (9~29)	K	9	6.2	4.6	2.2	1.2	14.2	7.3	9.4	3.5	7.9	28.1
		Y	11	6.5	4.2	2.2	1.9	14.7	5.9	4.8	1.8	6.8	19.3
		T	20	6.4	4.4	2.2	1.6	14.5	6.5	6.8	2.6	7.3	23.2
	Large (30~60)	K	1	34.0	13.0	6.0	6.0	59.0	35.0	30.0	10.0	40.0	115.0
		Y	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		T	1	34.0	13.0	6.0	6.0	59.0	35.0	30.0	10.0	40.0	115.0

note:

Table 10 Type of bovine combination by household

Type	year	1966 (1)			1982 (2)		
		total	(K)	(Y)	total	(K)	(Y)
cow		0	0	0	20	15	5
cow·ox		16	9	7	14	4	10
cow·she		1	1	0	1	1	0
cow·he		1	1	0	4	0	4
ox		1	1	0	4	2	2
ox·she		—	—	—	—	—	—
ox·he		—	—	—	1	0	1
she·he		2	2	0	—	—	—
she		3	3	0	—	—	—
he		3	2	1	1	1	0
cow·ox·she		8	5	3	6	4	2
cow·ox·he		6	1	5	2	2	0
cow·she·he		1	1	0	—	—	—
ox·she·he		1	1	0	1	1	0
cow·ox·she·he		7	3	4	14	7	7
households		50	30	20	68	37	31

Sources: (1) Livestock Census 1961.

(2) Our Survey 1983.

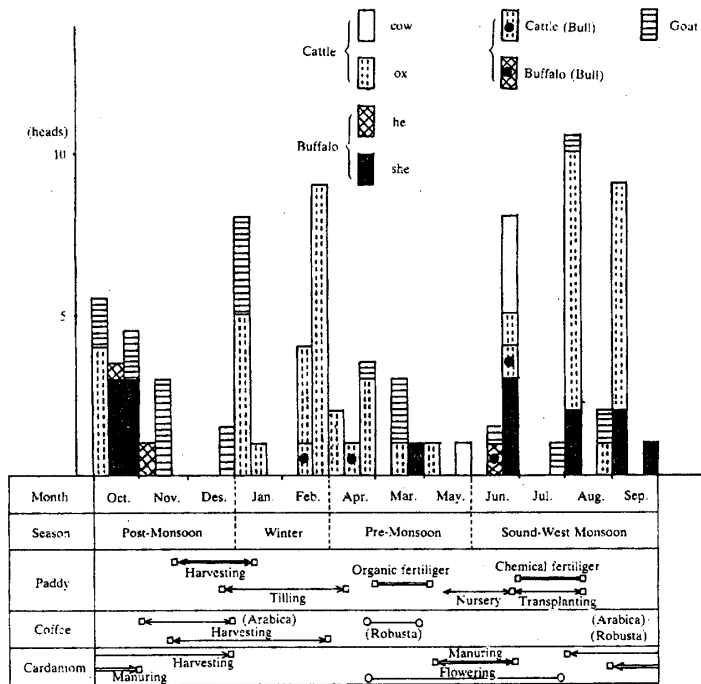


Figure 9. Number of livestock interned in Cattle Pound and Agricultural calender in Kurubathur (1981. 10-1982. 9)

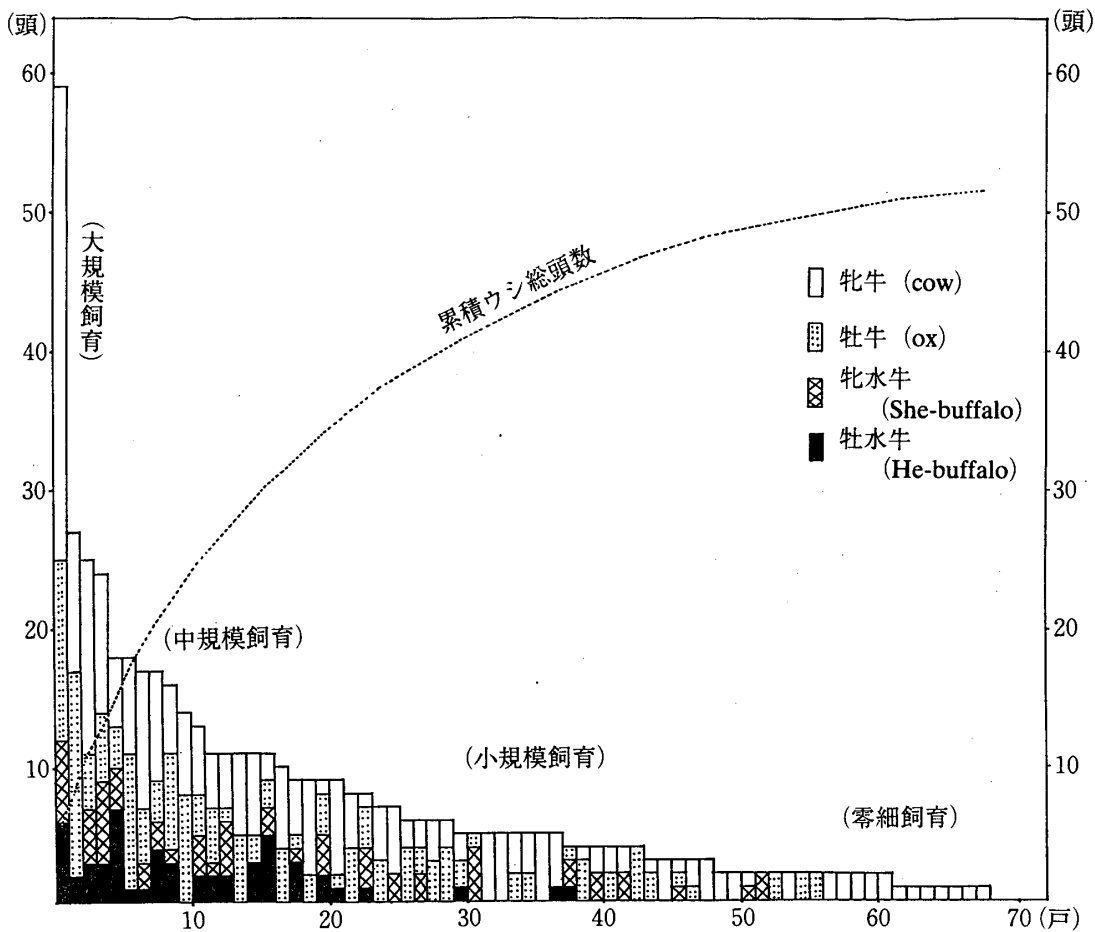


図10 ウシ飼育頭数別農家順位図

イギリス人に求めるという仮説を提出しておくにとどめたい。

四. 農家レベルでのウシ飼育

広大な丘陵地にある入会放牧地の利用を巡って、現在村人の間には静かながら、しかし底の深い競争が展開しているようである。ウシ飼育においては、近年、個別の農業経営や家計に似合った個人的飼育や管理を発展させる傾向がある。それは、村人が、飼育頭数、種類、牝牡別などウシの個体毎の能力に強い関心を向けているからである。次に、まず、ウシ飼育農家の悉皆調査によって飼育規模と飼育構成のタイプを明らかにし、これから類型化された飼育農家をサンプル調査し、その個別経営内におけるウシ飼育の意義を検討することにする。

1. ウシ飼育農家¹⁾と飼育規模

K地区79世帯、Y地区51世帯のうち、ウシを飼育する農家は、前者が37世帯(46.8%)、後者が31世帯(60.8%)である。調査村落の総世帯数130世帯の52.3%の68世帯がウシ飼育農家である。核集落としてのK地区のウシ飼育農家率が過半に達しないのは、それなりに首肯出来るが、純農業集落であるY地区も比較的低率である点が注目される。

第10図は、上記の68飼育農家を飼育頭数によって順位づけたものであり、この図及び第9表の通り、ウシ飼育農家は(1)零細規模(1~2頭)、(2)小規模(3~8頭)、(3)中規模(9~29頭)、(4)大規模(30頭以上)の4タイプに分けられる。なお、表よりウシ飼育の68世帯と飼育していない世帯の土地所有状況をみると、前者が1世帯平均にして僅か11.0エーカーであるが、後者は●エーカーにすぎず、両者の間に大きな相違がある。

(1) 零細規模階層は飼育総世帯の30%近くを占めるが、ウシ総頭数では僅か全体の6.4%、土地所有面積においても8.4%を占めるに過ぎない。1世帯当たり1.7頭で、その平均の内訳は、牝ウシが1頭を越え、他に牝ウシと牝水牛が飼育されているが、牝水牛飼育がみられない。土地所有に関しては、Y地区での平均が4.6エーカーと大きく、両地区平均すると、水田、コーヒー、放牧地とが各々1エーカーという組合せで、合計3.2エーカーとなっている。

(2) 小規模階層世帯は27世帯と最も多く、両地区の平均飼育頭数は、4.9頭、土地所有面積は5.0エーカーである。零細規模階層に較べると、ウシ飼育頭数の増加は主として牝牛と牝牛に、土地所有面積の増加は水田面積の増加に大きく負っている。これを地区別にみると、K地区は牝牛飼育、Y地区では牝水牛飼育が増加し、土地に関してはY地区での水田と放牧地面積、K地区はむしろコーヒー栽培やカルダモン栽培の比重が相対的に増し

ている。いずれにしても、牝牛や牝水牛など耕起・運搬用の牝ウシ飼育と水田面積との各々の比重が高くなったことが、この階層の注目すべき特色である。

(3) 中規模階層は両地区で20世帯、ウシ飼育世帯数の30%を占めるが、ウシ総頭数の56%、土地所有面積も同じく56%を所有し、調査村落の中核的存在と言える。人世帯平均のウシ飼育頭数は、4.5頭に達しており、その平均の内訳は牝ウシ6.4頭、牝水牛2.2頭に対し、役用の牝ウシ4.4頭、牝水牛1.6頭となっている。土地所有面積は世帯平均で14.5エーカーで、その内訳はコーヒー栽培面積(6.8エーカー)が水田面積(6.5エーカー)を上回っている。また、Y地区に較べてK地区の世帯が、土地所有面積において平均で10エーカー近くも大きいのはおもにコーヒー・カルダモンの栽培面積の差によるものである。

(4) 大規模階層はK地区の1世帯のみである。ウシ飼育頭数は59頭、土地所有面積は水田35エーカー、コーヒー園30エーカー、そして放牧地40エーカーなど合計115エーカーである。クルバドゥール行政村のみならずこの地方でも有数の大規模農家である。⁴⁵⁾

このようなウシ飼育規模を1966年統治のそれと較べると、次の点に変化の特徴として指摘できる。つまり第11図のように、小規模階層と大規模階層においてほとんど変化がないのに対し、零細規模と中規模階層において大幅な増加が認められる。ちなみに、1966年統治、両地区には総計453頭(ウシ358頭、水牛180頭)のウシが50世帯によって飼育され、1世帯当たり9頭余りであり、1982年の7.6頭を上回っている。しかし、このあいだウシ飼育世帯率は、38%余りから58%強に著しく伸びている。ウシ飼育の中規模階層の肥大は、コーヒーなど樹木作物(tree crops)栽培の盛行に伴う❖堆肥の必要性と関連があるようで、また零細規模ウシ飼育は農村弱者層への政府開発資金、特に1970年代後半からの諸補助金により新規にウシを飼育するようになったことによる。

2. ウシ(牛・水牛)飼育型

育の態様は、ウシ飼育頭数や農業経営の規模により、またヒンドゥー教徒のなかには水牛飼育を嫌悪する世帯がみられるなど、さまざまである。いま、ウシをインド・ゼヴ牛(牝牛 cow, 牝牛 ox)と水牛(牝水牛 she-buffalo, 牝水牛 he-buffalo)の4種類に分け、それらの組合せによってウシ飼育型を考えると、15の組合せタイプをあげることが出来る。このうち調査村落においては第10表の通り、11タイプ検出された。一般的傾向として、[cow]は搾乳と繁殖のために、[ox]すなわち[bullock](去勢牛で役用)は運搬・耕起用の役牛として、[she-buffalo]は搾乳量の多い乳牛として、[he-buffalo]は主に水田耕起用の役牛⁴⁶⁾として飼育されている。調査村落における4種類のウシ飼育について、世帯別にその種類別飼育頭数規模順位を第12図に示す。この図より、①ゼヴ牛(cow, ox)

Figure 11 A list of households belonging to [cow, ox, she, he] type in Kurubathur and Yadavarahalli

表11 [cow・ox・she・he] 型農家一覽

農家番号	Jati	世帯員数	牛		水牛		ウシ総数	
			牝	牡	牝	牡		
クルバトウール村	①	Lingayat	10	34 (6)	13 (6)	6 (2)	6 (6)	59 (20)
	②	Vokkaliga	6	10 (4)	4 (2)	1 (-)	2 (1)	17 (7)
	③	Lingayat	8	8 (3)	3 (1)	4 (1)	2 (1)	17 (6)
	④	〃	9	5 (-)	3 (2)	2 (-)	3 (2)	13 (4)
	⑤	〃	3	4 (3)	4 (4)	2 (1)	1 (1)	11 (10)
	⑥	Achar	7	2 (1)	2 (-)	5 (2)	2 (-)	11 (3)
	⑦	Lingayat	8	4 (1)	1 (-)	3 (1)	1 (-)	9 (2)
	計 平均	7.3	9.6(2.6)	4.3(2.1)	3.3(1.0)	2.4(1.6)	19.6 (7.4)	
ヤダワラハリ村	⑧	Vokkaliga	9	14 (4)	4 (4)	3 (2)	4 (-)	25 (10)
	⑨	Lingayat	10	10 (3)	5 (-)	3 (1)	6 (4)	24 (8)
	⑩	〃	7	5 (2)	3 (2)	7 (3)	3 (2)	18 (10)
	⑪	〃	14	5 (2)	7 (6)	3 (1)	1 (1)	16 (10)
	⑫	〃	11	4 (1)	1 (-)	2 (1)	4 (4)	11 (6)
	⑬	Gangamatha	5	1 (-)	3 (2)	2 (-)	3 (2)	9 (4)
	⑭	〃	8	1 (-)	3 (2)	1 (-)	3 (2)	8 (4)
	計 平均	9.1	5.7(1.7)	3.7(2.3)	3 (1.1)	3.4(2.1)	15.9 (7.4)	
総 平均		8.2	7.6(2.1)	4 (2.2)	3.1(1.1)	2.9(1.9)	17.7 (7.4)	

(1982.8)

ウシ総数	土地保有面積				総面積	職業	
	水田	コーヒー	カルダモン	放牧地その他		主	従
59 (20)	35.0	30.0	10.0	40.0	115.0	農業	—
17 (7)	7.0	27.4	1.3	3.0	38.7	農業	—
17 (6)	7.0	8.8	6.0	14.0	35.8	農業	—
13 (4)	10.0	8.0	12.0	12.0	42.0	農業	—
11 (10)	16.0	15.0	4.0	7.2	42.2	農業	—
11 (3)	—	—	0.6	—	0.6	大工	農業
9 (2)	7.0	—	1.0	—	8.0	農業	服仕立業
19.6 (7.4)	11.7	12.7	5.0	10.9	40.3		
25 (10)	10.0	6.0	3.0	6.0	25.0	農業	—
24 (8)	15.0	20.0	3.0	32.0	70.0	農業	—
18 (10)	12.0	15.0	3.0	5.0	33.0	農業	—
16 (10)	7.2	4.2	3.0	16.2	30.6	農業	—
11 (6)	2.0	—	1.0	5.0	8.0	農業	日雇い
9 (4)	3.0	—	—	—	3.0	農業	日雇い
8 (4)	1.5	—	4.0	4.0	9.5	農業	日雇い
15.9 (7.4)	7.2	6.5	2.4	9.5	25.6		
17.7 (7.4)	9.5	9.6	3.6	10.2	33.0		

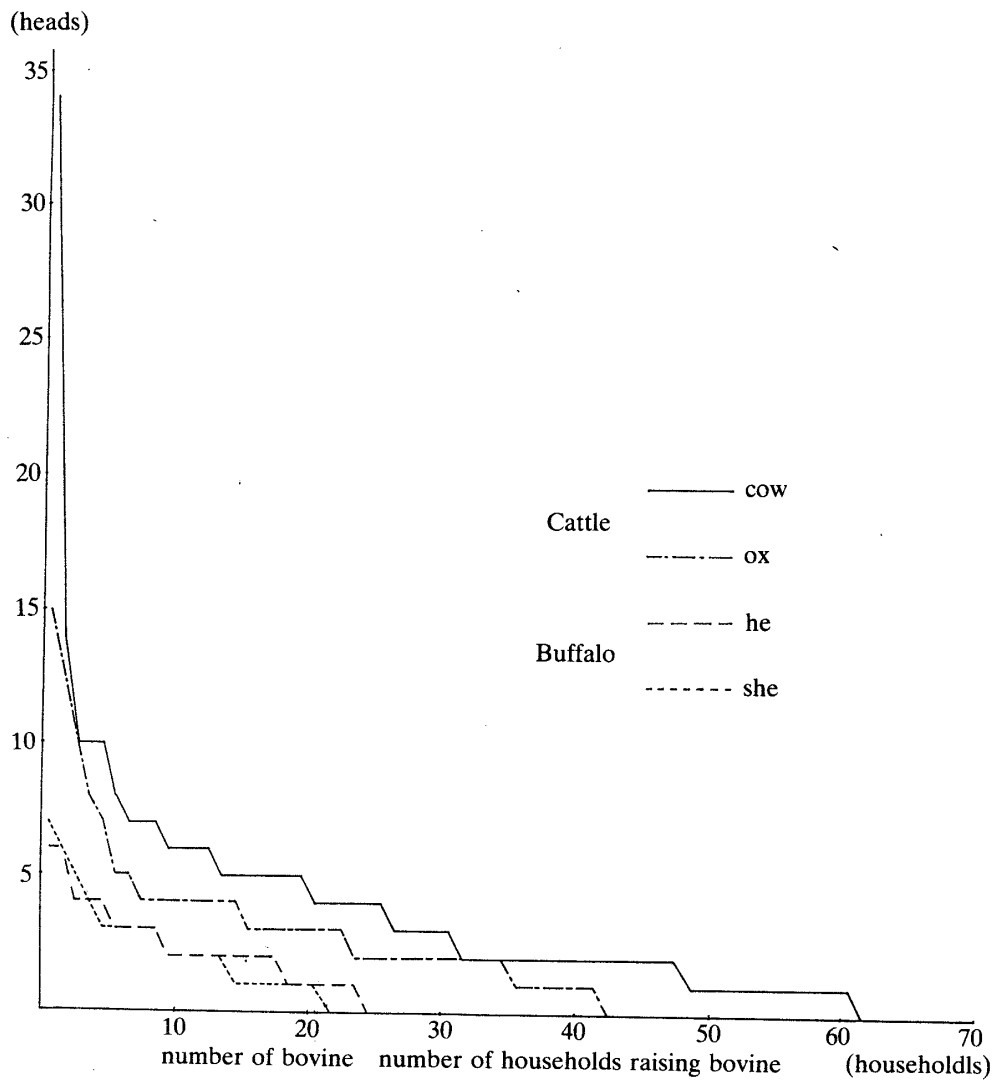
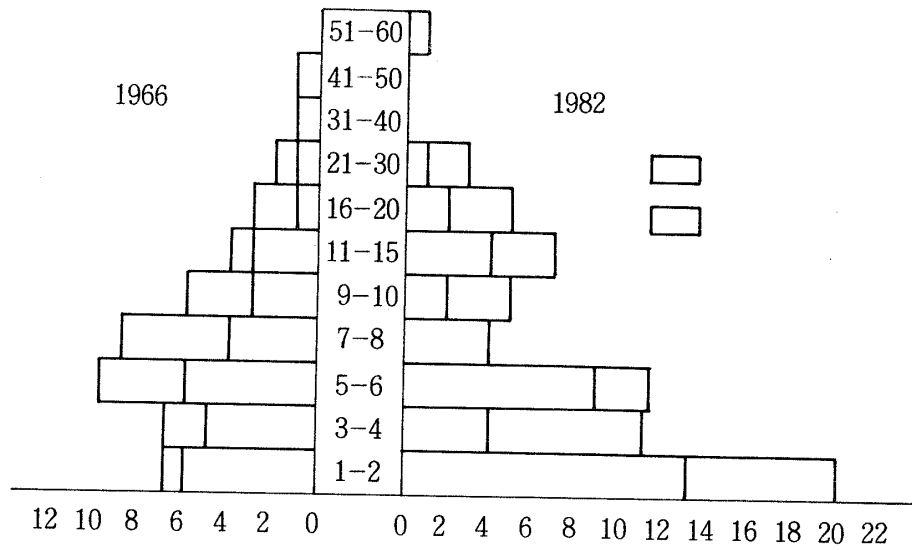


Fig. 12. ウシの種類別飼育頭数規模順位

は、ほぼ双曲線カーブを描く。つまり飼育頭数規模の大きい少数の世帯と、飼育規模の小さい多数の世帯がみられる。これに対して、②水牛 (she, he) は飼育頭数の多い世帯と少ない世帯とが一次関数の関係を示し、ゼブ牛の場合ほど階層格差は明瞭ではない。一般的に言えば、調査村落におけるウシ飼育の基本は [cow] 飼育であり、これに [ox] 飼育が加わる。水牛飼育をする世帯はウシ飼育総世帯の3割に満たない。

この4種類のウシを、どのような組合せで飼育しているのかを前掲表により、調査時と1966年家畜センサスとによって比較してみると、次のような特徴が指摘できる。

- ① [cow] 型飼育世帯の著しい増加
- ② [cow] ・ [ox] ・ [she] ・ [he] 型のいわゆる“拡大再生産”飼育型世帯の倍増
- ③ 水牛のみの組合せ、つまり [she] ・ [he] 型, [she] 型, [he] 型飼育世帯の著減
- ④ K地区での [cow] ・ [ox] 型飼育世帯の減少に対し、Y地域では増加

つぎに、調査村落で検出された11タイプについて各々検討する。

(1) [cow] ・ [ox] ・ [she] ・ [he] 型飼育

このタイプに属するK地区7世帯、Y地区7世帯の合計14世帯は、ウシ総数の48.3%、水田、放牧地、コーヒー・カルダモン栽培地など各々過半を所有し、とりわけコーヒー園に関しては総コーヒー面積の64.1%を占めている。つまり、第11表に示された14世帯は、まさしく調査村落における有力農家・上層農家である。注目すべき第1点は、この14世帯で水牛の75.2%を占め、なかでも搾乳用の高価な [she-buffalo] に関してはその81.5%を占めている。第2点は、例外的に、K地区では⑥と⑦の2世帯が耕起・運搬用に押す牛や牝水牛を使役しておらず、逆にY地区には、搾乳中の牝牛や牝水牛が飼育されていない⑬と⑭の2例がある。第3点は、リングヤット (Lingayat, 農業カースト) が14世帯中の9世帯を占めていることである。

(2) [cow] ・ [ox] ・ [she] 型飼育

これは [he-buffalo] を欠く型で、6世帯がある。1世帯当たり所有耕地面積は17.8エーカーと、[cow] ・ [ox] ・ [she] ・ [he] 型飼育世帯平均の54%に過ぎない。とりわけ水田面積は僅か3.6エーカーで、第13図の通り [cow] ・ [ox] ・ [she] ・ [he] 型飼育世帯のその38%しか所有していない。5世帯の全てに搾乳中の [cow] もしくは [she-buffalo] が飼育され、そのうち3世帯には使役牛の飼育がみられる。この3世帯のうちの2世帯はモスリムと指定部族 (scheduld tribe: S.t) で、いずれも土地を所有せず、この使役牛を連れての農業日雇いで何がしかの収入を得ている。

(3) [cow] ・ [ox] ・ [he] 型飼育

K地区の2世帯がこの方で、平均飼育規模は4.5頭と少なく、水田耕起や運搬用の〔ox〕と〔he〕飼育が中心であるが、いずれも個人放牧地を持たないために飼料基盤を入会放牧地と稲藁に依存せざるを得ない。

(4) 〔ox〕・〔she〕・〔he〕型飼育

K地区に1世帯あり、耕起・運搬用の使役ウシ飼育を基本にしながらも、搾乳中の牝水牛飼育もみられ、労働などの他の条件からみると容易に〔cow〕・〔ox〕・〔she〕・〔he〕型飼育への移行が可能である。

(5) 〔cow〕・〔ox〕型飼育

K地区に5世帯、Y地区で10世帯の合計15世帯がこの型である。後述する〔cow〕型飼育の20世帯について多いタイプである。この型は、最も普遍的なヒンドゥー教徒の農家にみられ、まさしく“聖なる牛”飼育型である。この世帯の平均土地所有面積は7.4エーカーであり、そのうち水田面積は3.3エーカーで、土地所有規模などからみる限り、前述した(2)~(4)のタイプと差はみられない。第12表のうち、これら15世帯は、モスリムの2世帯を除くとリンガヤットやボカリガの他にクムバラ (Kumbara) など7つのジャティに属している。〔cow〕や〔ox〕は牝水牛に較べ、比較的安価で飼育の容易であり、これら中規模農家群のウシ飼育の基本となっている。

(6) 〔cow〕〔he〕型飼育

この型の4世帯はいずれもY地区にある。1世帯平均でみれば、ウシ飼育の規模が、(5)〔cow〕・〔ox〕型を上回っているものの、土地所有面積は僅か2.5エーカーと約半分である。4世帯のうち3世帯は、1組の〔he-buffalo〕を連れ、水田耕起の時期には日雇い労働にでて収入を得ている。一般に、耕起に使役する牝水牛は、水田仕事の要領を覚えるのが遅く、しかもその作業は遅速ではあるが、多雨地でしかも谷底地の水田という条件から、その耕起に際し、牝牛しか飼育していない農家にとっては、この牝水牛飼育農家の手助けを必要とする例が多い。

(7) 〔cow〕・〔she〕型飼育

K地区のバザールに居を構えるモスリム教徒の1世帯のみである。世帯主は、カルダモンを中心に扱う産地仲買商であり、耕地は所有していない。

(8) 〔ox〕・〔he〕型飼育

Y地区の1世帯のみで、4組の牝水牛を飼育し、これら牝水牛を連れての日雇い労働により収入を得ている。水田耕起に使役する日数は、75日間としている。移植前の水田は、6~7回耕起されている。

(9) 〔cow〕型飼育

Table 12 A list of households belonging to cow-ox type in Kurubathur and Yadavarahalli

Village	Jati	No. of families	Cattle			Occupation		Landholding (Acres)				
			Cow	Ox	Total	Main	Sub	Pa	Co	Ca	G & O	Total
Kurubathur	① Muslim	12	6	8	14	Agriculture	—	3.5	—	—	3.5	7.0
	② Vaishnava	5	4	4	8	Agriculture	—	8.0	6.0	8.0	4.0	26.0
	③ Muslim	7	3	3	6	Business	Agriculture	2.0	—	—	3.0	5.0
	④ Lingayat	2	3	2	5	Coolie	—	—	—	—	2.0	2.0
	⑤ Dobby	3	3	2	5	Dry Cleaning	Agriculture	1.0	—	—	—	1.0
	Average	5.8	3.8	3.8	7.6	—	—	2.9	1.2	1.6	2.5	8.2
Yadavarahalli	⑥ Vokkaliga	6	6	5	11	Agriculture	—	1.5	4.0	—	2.5	8.0
	⑦ Lingayat	5	6	4	10	Agriculture	—	9.0	2.0	3.0	4.0	18.0
	⑧ Bostur	10	7	2	9	Agriculture	Coolie	2.0	1.0	2.0	—	5.0
	⑨ Lingayat	5	4	3	7	Agriculture	—	3.5	0.3	—	4.0	7.8
	⑩ Lingayat	5	4	2	6	Agriculture	—	8.0	—	—	4.0	12.0
	⑪ Kumbara	7	2	4	6	Pot Maker	Agriculture	1.5	0.3	0.2	—	2.0
	⑫ Gamgamatha	6	1	3	4	Agriculture	—	3.0	—	—	0.8	3.8
	⑬ Kumbara	7	2	2	4	Pot Maker	Agriculture	1.5	0.3	—	1.5	3.3
	⑭ Vokkaliga	8	1	2	3	Agriculture	—	2.0	—	1.0	3.0	6.0
	⑮ Lingayat	4	2	1	3	Agriculture	—	2.0	—	—	—	2.0
Average	6.3	3.5	2.8	6.3	—	—	3.4	0.8	0.6	2.0	6.8	
Average in two villages		6.1	3.6	3.1	6.7	—	—	3.3	0.9	1.0	2.2	7.4

Table 13

Village	Jati	No. of families	No. of cows	Occupation		Landholdings* (Acres)				
				Main	Sub	Pa	Co	Ca	G & D	Total
Kurubathur	① Vokkaliga	5	5	Coolie	Agriculture	1.0	—	—	2.0	3.0
	② Lingayat	5	5	Agriculture	Tailer	2.0	—	—	—	2.0
	③ Muslim	6	5	Merchant	—	—	—	—	—	—
	④ Lingayat	6	3	Coolie	Agriculture	1.0	—	—	—	1.0
	⑤ Lingayat	5	2	Agriculture	Coolie	4.0	1.0	1.0	13.0	19.0
	⑥ Raj Setty	6	2	Hotel	—	—	—	—	—	—
	⑦ Billaba	6	2	Coolie	Toddy	—	—	—	—	—
	⑧ Billaba	5	2	Tailor	—	—	—	—	—	—
	⑨ Adikarnate	5	2	Coolie	—	—	—	—	—	—
	⑩ Muslim	3	2	Teacher	—	—	—	—	—	—
	⑪ Raj Setty	6	1	Hotel	Agriculture	4.0	4.0	1.0	—	9.0
	⑫ Lingayat	6	1	Coolie	Agriculture	1.0	—	—	—	1.0
	⑬ Muslim	8	1	Wood cutter	—	—	—	—	—	—
	⑭ Bandari	5	1	Barber	—	—	—	—	—	—
	⑮ Muslim	4	1	Merchant	Coolie	—	—	—	—	—
Average	5.4	2.3	—	—	0.8	0.3	0.2	1.0	2.3	
Yadavarahalli	⑯ Gangamath	4	3	Agriculture	Merchant	2.3	—	0.3	0.7	3.3
	⑰ Vokkaliga	7	2	Agriculture	—	4.0	10.0	1.0	1.0	16.0
	⑱ Lingayat	6	2	Postman	Agriculture	1.5	—	—	—	1.5
	⑲ Vokkaliga	4	1	Agriculture	—	1.0	—	—	1.5	2.5
	⑳ Lingayat	3	1	Agriculture	Coolie	0.5	0.5	—	2.0	3.0
Average	4.8	1.8	—	—	1.9	2.1	0.3	1.0	5.3	
Average in K and Y		5.3	2.2	—	—	1.1	0.8	0.1	1.1	3.1

* Pa; Paddy, Co; Coffee, Ca; Cardamom G & D; Garden and Dry land

この型は、最も多い20世帯を数え、特にK地区に多い。

第13表の通り、K地区の15世帯のうち、9世帯は耕地を所有しておらず、主な職業は仲買人、日雇い労働、服仕立て業、樵夫、食堂経営、散髪、教師（アラビア語）などである。入会放牧地を利用したの〔cow〕飼育で、生草の絶えるプレ・モンスーン期には粗飼料として稲藁を購入したり、牛糞（cow dung）との交換を行って確保している。また、耕地を多少なりとも所有する世帯に於いても、その過半は日雇い労働や仲買、郵便業務などに収入源を求めている。詳しい資料を得ていないが、近年の農業制度資金（Agricultural Loan）を得て〔cow〕を購入したものが多と思われる。とりわけ、K地区にこのタイプが多いのは、入会放牧地の分割譲与によって敷地を得た職人や日雇い労働者が、この農業ローンを得て〔cow〕を購入したためである。表中のK地区のビラバ（billaba）の⑦と⑧の2世帯は、いずれも敷地を政府より安価に入手し、1世帯は5年前に両親より〔cow〕を、贈与され、他の1世帯は3年前に農業ローンにより購入したとされている。この2世帯は、日雇い労働の他に、ココナッツからの地酒造りと服仕立てにより収入を得ている。

以上のように、調査村落では1980年以降、低所得階層を中心に〔cow〕飼育が著しく浸透している。そしてこのことが、入会放牧地の過放牧商況を一層進めているという指摘をよく耳にした。この型の飼育世帯が、将来どの様に変化して行くか、この地域における階層格差の是正の面から興味あるところである。

(10) 〔ox〕型飼育

この型はK・Y両地区それぞれ2世帯、計4世帯がみられる。Y地区の1世帯を除く他の3世帯は、いずれも水田を所有しているが、使役用〔ox〕を連れての日雇い労働の他、服仕立てなどにより家計を賄っている。残りのY地区の1世帯は、コーヒー園への季節労働者の斡旋を始め各種の周旋を職業としており、飼育している〔ox〕をどの様に利用しているか定かではない。

(11) 〔he〕型飼育

この型はK地区に1世帯みられる。水田と放牧地を各々1エーカー所有するが、この牝水牛を連れての日雇い労働（水田耕起）によって生計を立てている。

以上、11のタイプが調査村落において検出された。このうち注目すべき飼育型としては、数の多い(1)〔cow〕・〔ox〕・〔she〕・〔he〕型飼育、(5)〔cow〕・〔ox〕型飼育、そして(9)〔cow〕型飼育の3つということになる。

3. サンプル調査世帯のウシ飼育事例

調査村落におけるウシ飼育世帯数68戸について、既述した①飼育規模と②飼育タイプを

指標にして3つのグループに分け、各グループ毎にサンプル調査世帯を選定してインタビュー調査をした。サンプル調査世帯数は23頭数である。

(1) 拡大再生産型 (A型)

A型は、ウシの飼育規模が中規模階層以上で、飼育型は〔cow〕・〔ox〕・〔she〕・〔he〕型に入る。第14図で明示されるように、自家牛の生産・繁殖が十分可能な、いわばウシ飼育の拡大再生産の段階に到着している農家と見なし得るグループである。このグループはさらに、A1 (搾乳重視) 型とA2 (使役重視) 型とに二分される。A1型およびA2型に属する世帯はそれぞれ4世帯である。

(a) A1型—搾乳重視型

A1型4世帯は、農地所有面積がいずれも30エーカー以上、ウシ飼育頭数17頭以上の上層農家で、ウシ飼育のためにいずれも第14表の通り牧童を雇用している。また、近代的農用機械を所有する唯一のグループで、いずれも農業カースト (Lingayat) に属している。トラクターや運搬用のトローリーなど高価な機械を、銀行やバンガロールの農工協同組合などからの資金を借用して購入している。世帯主の年齢は、30才台で他のグループと較べ最も若い。ウシ飼育規模に最も関係すると思われる1家畜単位当たりの水田及び放牧地面積は、それぞれ0.50エーカーと0.64エーカーと広い。このグループの最大の特徴は、近代的農用機械の導入によりウシの使役日数を減じ、耕牛飼育よりも搾乳飼育に重点をおき、搾乳と子ウシ生産に興味を持っていることである。

世帯番号①は、K地区に住む最大の土地所有 (3人兄弟で分割) 農家で、借金によるトローリーなどの近代農用機械を有するものの、従来通りの安い雇用労働とウシ飼育にも大きく依存している。しかも、①農家は、借金による近代的農用機械の購入よりも、〔cow〕や〔buffalo〕を増頭することによる子ウシ生産と搾乳の方に強い関心を示している。つまり、広大な放牧地や水田を飼料基盤にして、ウシ飼育頭数の増加を積極的に進め、近年のウシ価格の上昇に期待し、その販売を企んでいる。ちなみに、1966年統治と比較すると総数で12頭の増加になっている。とりわけ搾乳と子牛生産を目的とする〔cow〕頭数は、18頭から36頭に倍増させている。しかも、3年前の1979年のモンスーン期に40頭前後のウシを病死させている。つまり、1966年のウシ47頭が、主に自家繁殖によって1979年には100頭前後にまで増加させていたのである。この大量病死事件は、この農家にとっての一代転機となり、世帯主からは、これまでの資産所有の意味を含んだウシ飼育の消極的増頭から、ウシの販売による現金収入を意図した積極的増頭へと、ウシ飼育に対する考え方の変更が開陳された。

また、②農家は、Y地区のなかで農地所有規模の最も翁農家で、ウシ飼育頭数も24頭で

Kurubathur & Yadavarahalli

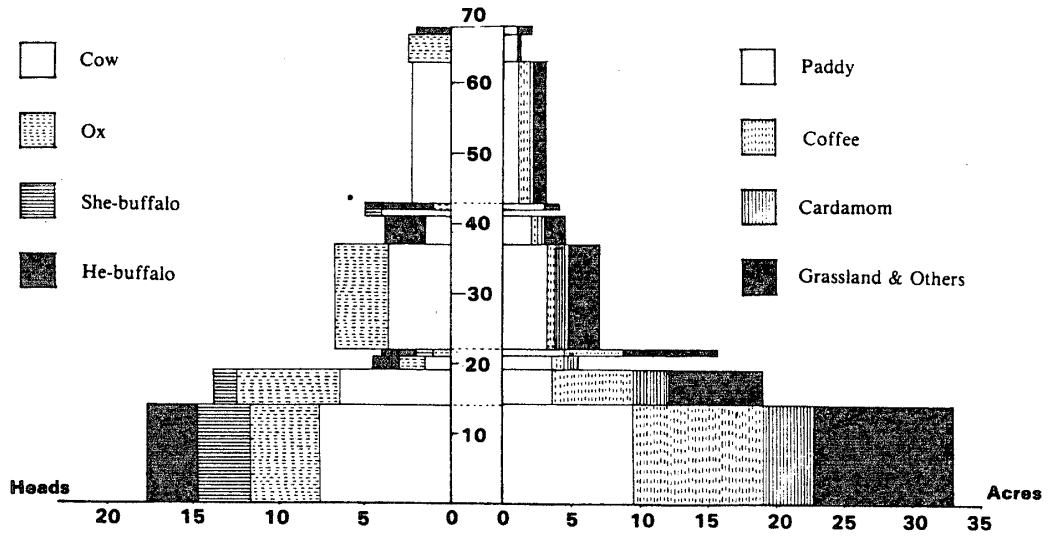


図13 ウシ飼育型と土地所有

Figure 13. Distribution of bovine population and landholdings by each type of bovine combination

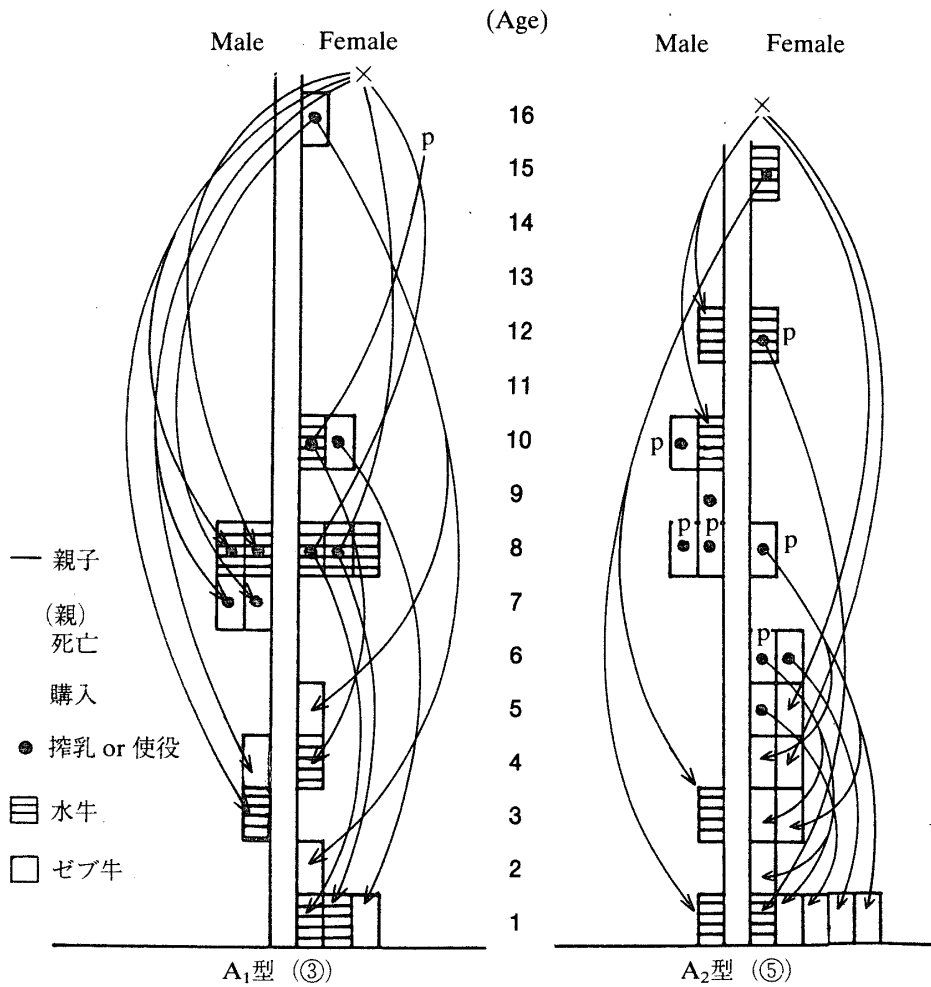


図14 拡大再生産型 (A型) の例

Figure 14.

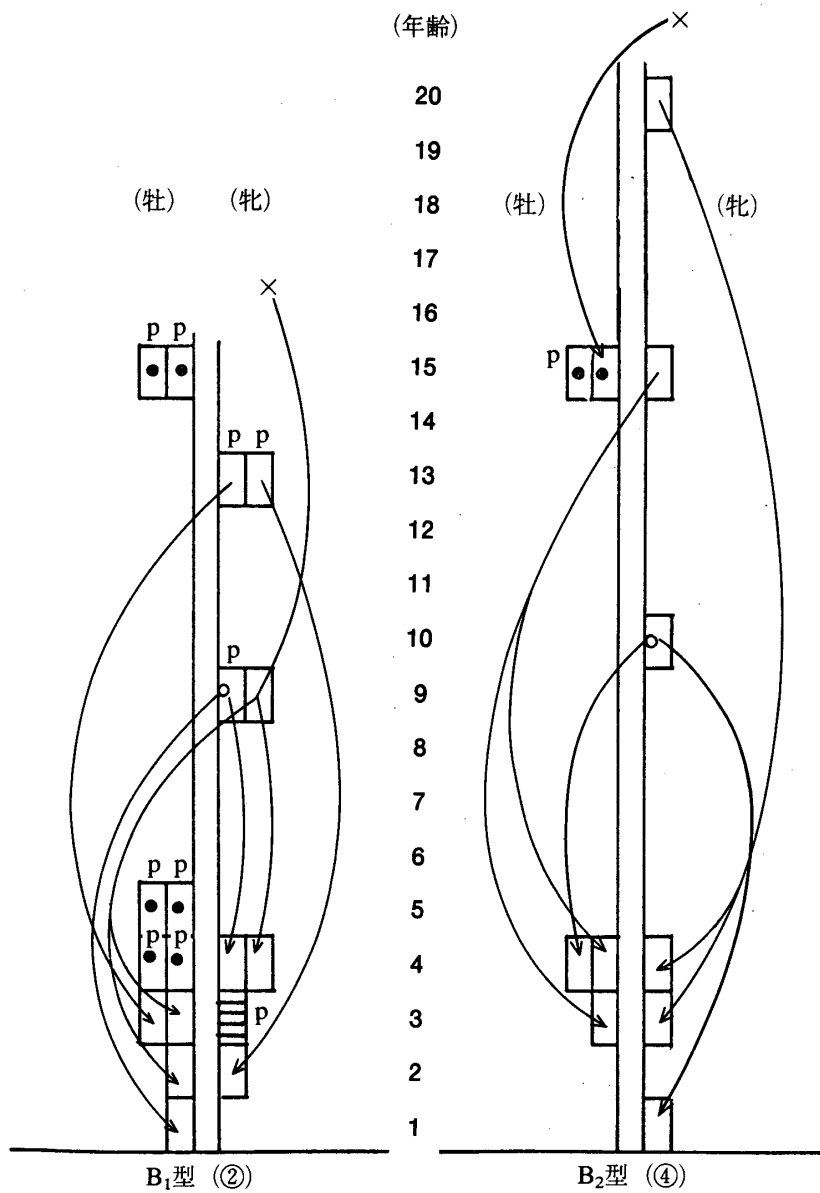


図15 単純再生産型 (B型) の例
 Figure 15. A simple reproduction of bovine keeping
 凡例は図14に同じ

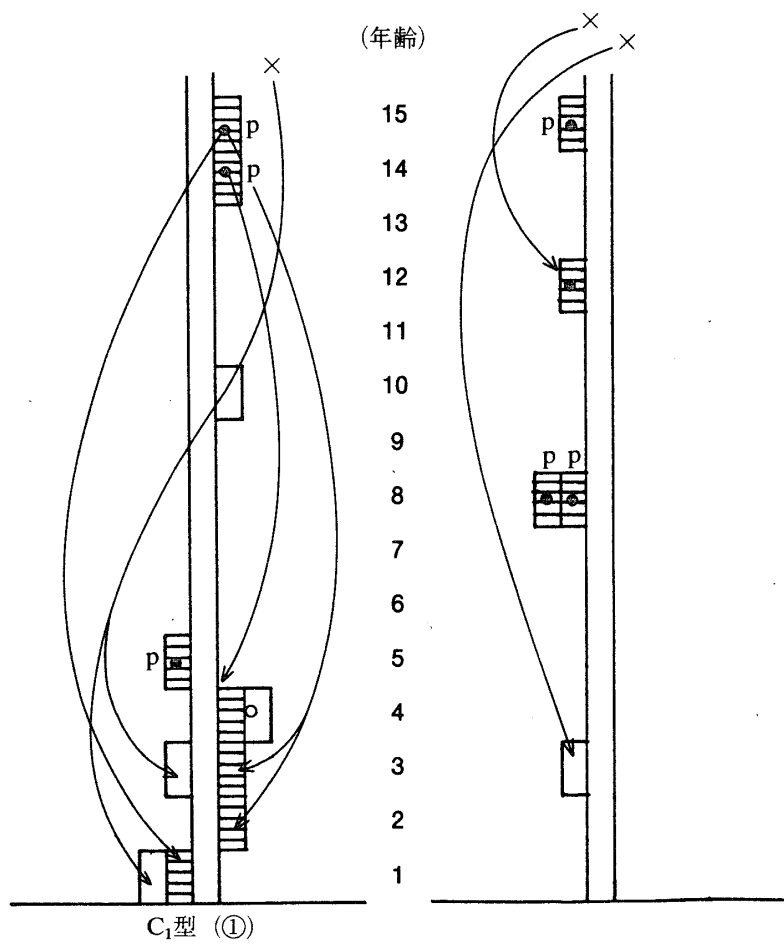


図16 購入ウシ飼育型 (C型) の例

凡例は図14に同じ
○贈与

⑤農家に次ぐ規模である。現住地には、60余年前に同じクルバトゥール行政村を構成する西端の bommankere 村より移り住んだ農家である。Y 地区で最も広いコーヒー栽培地の経営は、雇用労働とトラクターをはじめとする近代的農用機械の稼働によって行い、とりわけ使役牛の飼育頭数を著しく減少させている。1966年当時には、牝牛15頭のうち、12頭を使役に利用していたが、現在では僅か牝牛5頭で、しかも使役には使用していない。僅かに牝水牛4頭を水田耕起用に利用しているに過ぎない。この農家の所有する放牧地や水田面積から考えると、現在のウシ飼育頭数24頭を60余り頭にまで増頭することは可能であるが、世帯主は、ウシの頭数を増やすことに興味を示さない。その理由は、ウシ飼育の第1目的である使役は、トラクターやトローリーにより代替され、重要な肥料としての牛糞は、比較的安価に付近のウシ飼育世帯より購入できることなどである。そのために、ウシ飼育の目的は、主として、搾乳に向かうことになる。

また③農家においても、搾乳用として牝水牛の増頭が顕著であり、④農家においても搾乳用の牝牛や牝水牛飼育がウシ飼育の主たる目的となりつつある。

(b) A 2 型—使役重視型

4 世帯は、A 1 型に較べるとそのうち所有面積はほぼ半減するが、ウシ飼育頭数に関しては4割減少である。このA 2 型世帯が、A 1 世帯と明白に異なるのは、近代的農用機械の導入が未だなされておらず、水田・コーヒー園の耕起をはじめとする作業が、使役ウシに大きく依存せざるを得ない状況にあることである。ちなみに、1年間における水田1エーカー当たりの耕起・把耕に使役する延べ頭数は、A 1 型の平均19.0頭に対し、A 2 型のそれは37.7頭とほぼ2倍になっている。さらに、運搬用にウシを利用する日数についてみると、A 2 型グループの年間平均日数16日余りであるのに対し、A 1 型グループのそれは11日余りに短くなっている。このように、A 2 型グループのウシ飼育は、飼育ウシによる自家繁殖によつての拡大再生産を有する点ではA 1 型と共通するも、近代的農用機械の導入がなされていないことにより、いきおい使役重視型の飼育形態となっている。

⑦農家はK地区のバス道路沿いに位置し、製粉業や貸家（3棟長屋など）、による収入を得る一方で、K地区では①農家に次ぐコーヒー園の大経営者でもある。

1966年当時は、牝牛5頭と牝水牛1頭を飼育し、使役牛は飼育していなかったが、現在は、コーヒー園の拡大により放牧地を僅か3エーカーしか所有していないにもかかわらず、17頭のウシを飼育している。この農家の場合、ウシの増頭はおもに購入によっており、いずれも安価に水田を耕起・把耕用に求め、高い価格の牽引用のハリカール種は購入していない。そのため、3月の❖肥運搬には他人のトローリーを賃借している。

これとは逆に⑥農家では、1966年当時よりウシ飼育頭数を全体として減少させたがその

Table 14 A list of households

		Jati	村落	世帯員数	職 業		飼育規模	家畜単位 (Cow Units)	飼育目的			ウシ 飼育				計
					世帯主(年令)	長男(年令)			1	2	3	cow	ox	she	he	
A ₁	1	Lingayat	K	10	農業(35)	学生(15)	大	63.0	M ₁ M ₂ W	36(6)	13(6)	6(2)	6(6)	59		
	②	Lingayat	Y	10	農業(37)	学生(16)	中	29.4	W M ₂ M ₁	10(3)	5(-)	3(1)	6(4)	24		
	3	Lingayat	Y	7	農業(26)	- (4)	中	26.2	W M ₂ M ₁	5(2)	3(2)	7(3)	3(2)	18		
	④	Lingayat	K	8	農業(33)	- (9)	中	19.6	W M ₂ M ₁	8(3)	3(1)	4(1)	2(1)	17		
A	平均	-	-	8.5	- (32.8)	- (10.8)	-	34.6	- - -	14.8(3.5)	6.0(2.3)	5.0(2.8)	4.3(3.3)	29.5		
A ₂	5	Vokkaliga	Y	9	農業(45)	学生(22)	中	27.0	W M ₁ M ₂	14(4)	4(4)	3(2)	4(-)	25		
	6	Lingayat	Y	14	農業(80)	農業(32)	中	22.2	W M ₁ M ₂	5(2)	7(6)	3(1)	1(1)	16		
	7	Vokkaliga	K	6	農業(50)	農業(22)	中	17.6	W M ₁ M ₂	10(4)	4(2)	1(-)	2(1)	17		
	⑧	Lingayat	K	9	農業(44)	新聞配達(20)	中	16.0	W M ₁ M ₂	5(-)	3(2)	2(-)	3(2)	13		
A	平均	-	-	9.5	- (54.8)	- (24.0)	-	20.7	- - -	8.5(2.5)	4.5(3.5)	2.3(0.8)	2.5(1.0)	17.8		
総平均	-	-	-	9	農業(44.8)	- (18.3)	-	27.6	W M ₂ M ₁	11.7(3.0)	5.3(3.0)	3.7(1.3)	3.4(2.2)	23.7		

注) ①= 水田 Cow Units ②= 放牧地 Cow Units • 農用機械については、① tractor ② trolley ③ sprayer ④ cultivator
 • 購入ウシ頭数は1976年8月以降のもの • ②、④と⑧は兄弟で、⑧が長男である。

Table 15

		Jati	村落	世帯員数	職 業		飼育規模	家畜単位 (Cow Units)	飼育目的		
					世帯主(年令)	長男(年令)			1	2	3
B ₁	1	Lingayat	K	9	農業(61)	農業(28)	中	30.6	W	M ₁	M ₂
	2	Lingayat	Y	7	農業(36)	- (10)		18.6	M ₁	W	M ₂
B	平均	-	-	8	農業(49)	- (19)		24.6	-	-	M ₂
B ₂	3	Muslim	K	12	農業(75)	農業(28)		12.8	M ₂	W	M ₁
	4	Vokkaliga	Y	6	農業(45)	農業(12)		11.8	W	M ₂	M ₁
	5	Kumbara	Y	7	壺作り(65)	農業(29)		7.2	W	M ₁	M ₂
	6	Lingayat	Y	5	農業(60)	会社員(28)		6.4	M ₁	M ₂	W
	7	Muslim	K	11	商業(58)	給仕(28)		5.8	W	M ₁	M ₂
	8	Gangamatha	Y	6	農業(48)	農業(25)		5.0	W	M ₁	M ₂
B	平均	-	-	8	- (59)	- (25)		18.2	W	M ₁	M ₂
総平均	-	-	-	8	- (56)	- (24)		12.3	W	M ₁	M ₂

Table 16

		Jati	村落	世帯員数	職 業		飼育規模	家畜単位 (Cow Units)	飼育目的		
					世帯主(年令)	長男(年令)			1	2	3
C ₁	1	Achar	K	7	大工(46)	大工(25)		13.4	M ₂	M ₁	-
	2	Muslim	K	10	服仕立て(68)	会社員(28)		8.2	M ₂	M ₁	-
	3	Vokkaliga	Y	7	農業(50)	学生(15)		1.6	M ₂	M ₁	-
C	平均	-	-								
C ₂	4	Gangamatha	Y	5	農業(50)	農業(21)		13.2	W	M ₁	M ₂
	5	Gangamatha	Y	7	農業(50)	農業()		9.2	W	M ₁	-
	6	Gangamatha	Y	7	農業(50)	農業(9)		7.8	W	M ₁	-
	7	Vokkaliga	K	12	無(70)	石工(33)		6.4	W	M ₁	-
C	平均	-	-								
総平均	-	-	-								

農地保有面積					①	②	雇 用 牧畜数	購入ウシ頭数		農 用 機 械				ウシ使 役日数	ロ ー ン 借金総額			
水田	放牧地	コーヒ	その他	計				乳用	役用	①	②	③	④			借金額	1,020	29.14
35	40	30	10	115.0	0.56	0.63	②	2	12	-	1	1	1	85	30,000	24.0	1,020	29.14
15	32	20	3	70.0	0.51	0.68	①	2	4	1	1	2	1	70	60,000	18.7	280	18.66
12	3	15	3	33.0	0.46	0.12	①	-	-	-	1	-	1	70	25,000	13.3	280	23.33
7	14	8.8	6	35.8	0.36	0.71	①	2	2	1	-	-	-	70	不明	20.0	140	20.00
17.3	22.3	18.5	5.5	63.5	0.50	0.64	-	-	-	-	-	-	-	73.8		19.0		
10	6	6	3	25.0	0.37	0.22	①	3	3	-	-	-	-	85	不明	28.0	340	34.00
7.5	16.5	4.5	3	31.5	0.34	0.74	②	1	3	-	-	-	-	100	27,000	65.3	700	93.33
7	3	27.4	1.3	38.7	0.40	0.17	①	1	3	-	-	-	-	70	25,000	29.6	210	80.00
10	12	8	12	42	0.63	0.75	-	-	-	-	-	-	-	90	不明	28.0	360	36.00
8.6	9.4	11.5	4.8	34.3	0.41	0.45	-	-	-	-	-	-	-	86.3	-	37.7		
12.9	15.8	15.0	5.0	56.2	0.47	0.57	1.1	1.3	3.4	-	-	-	-	80.0	-			

ウシ飼育頭数					土地保有面積					①	②	雇 用 牧畜数	購入ウシ頭数	
cow	ox	she	he	計	水田	放牧地	コーヒ	その他	計				乳用	役用
10(2)	14(9)	2(1)	-	26	15	30	25	8	78	0.49	0.98	①	1	5
7(1)	10(6)	1(-)	-	18	2	6	-	2	10	0.11	0.32	-	4	6
9(2)	12(8)	2(1)	-	22	8.5	18	13.5	5	44	0.35	0.73	-	3	6
6(1)	8(2)	-	-	14	3.5	3.5	-	-	7.0			-	-	-
6(1)	5(2)	-	-	11	1.5	2.5	4	-	8.0	0.13	0.21	㊦	2	3
2(-)	4(4)	-	-	6	1.5	-	0.3	0.3	2.1	0.21	-	㊦	2	3
4(2)	3(2)	-	-	7	3.5	4	0.3	-	7.8	0.55	0.63	㊦	1	-
3(1)	5(2)	-	-	8	2	3	-	-	5.0	0.34	0.52	-	-	2
1(-)	3(2)	-	-	4	3	0.8	-	-	3.8	0.60	0.16	㊦	-	2
4(1)	5(2)	-	-	8	3.4	3.2	0.8	-	7.4	0.41	0.39	-	1	2
5(1)	7(4)	-	-	12	4.7	6.9	3.7	1.3	16.6	0.38	0.56	-		

ウシ飼育頭数					土地保有面積					①	②	雇 用 牧畜数	購入ウシ頭数	
cow	ox	she	he	計	水田	放牧地	コーヒ	その他	計				乳用	役用
2(1)	2(-)	5(2)	2(-)	11	-	-	-	0.6	0.6	-	-	①	2	1
7(3)	1(-)	1(-)	-	9	-	-	-	-	-	-	-	①	5	0
2(-)	-	-	-	2	4	1	10	1	15	-	-	-	-	-
1(-)	3(2)	2(-)	3(2)	9	3	-	-	-	3	0.23	-	-	2	3
-	1(-)	-	4(4)	5	3	1	-	-	4	0.33	0.11	㊦	0	3
-	1(-)	-	4(4)	5	0.5	-	-	-	0.5	0.06	-	㊦	1	2
-	4(4)	-	-	4	1	-	-	1.5	2.5	0.16	-	-	0	4
										-	-			
										-	-			

内容をハリカール種に代えることによって作業能力を向上させようとしている。ちなみに、この世帯では、運搬用に使役する日数は30日間に及んでいる。

(2) 単純再生産型 (B型)

このBグループは、牝水牛飼育の有無によってB1型とB2型とに細分できる。調査村落においては、近年、水田・コーヒー園等の価格が、急上昇し農地の新たな入手は容易ではなくなった。とりわけ、B型農家が農業活動を通じて経済的上昇を実現するためには、①農地の高度利用や②政府からの入会放牧地の払い下げによる農地拡大、及び③入会放牧地を利用してのウシ飼育頭数を増頭させること以外にはない。しかしながら、このマルナードゥ地方の気候や交通条件から考えると、資本不足や作物選択が限られることにより農地の高度利用は容易ではないし入会放牧地の払い下げもきわめて困難である。そのため、さしあたりウシを増頭することによって、資産の拡張を図ることが、B型農家にとって最も手軽な現実的選択である(第15図参照)。

このような意味において、ゼヴ牛の他に新たに牝水牛を飼育することになるが、しかしこの選択も、牝水牛の購入価格が1,000ルピーを超えるので、自己資金であれ借金であれB型農家にとって大きな負担である。以上から、この牝水牛の飼育を指標にしてB型農家はB1型とB2型とに細分することが出来る。

(a) B1型—A型類似飼育型

この2世帯は、第15表の通り、B型農家群のなかでは比較的広い放牧地を所有する農家で、しかも、質の高い労働力を有している。1966年当時に比べ、①農家は7頭、②農家は4頭程ウシ飼育頭数を増やしている。前者はK地区の世襲村長をつとめていた有力農家であり、土地は78エーカーも所有してB型農家群にあっては例外的存在である。土地所有規模からみると、この①農家は上農層に相当するが、その年間農業粗収入は、A1型農家の6~12万ルピーに対して3万ルピーにも達していない。その最大の理由はコーヒー栽培への経営転換が遅れるためだといわれる。つまり、この農家のコーヒー栽培面積は、K地区第3位の25エーカーであるが、その4分の3は植え付け手間もないので、収穫が望めないからである。しかし最近、この①農家でもコーヒー園経営を本格化すると共に、牝水牛の他ハリカール種の使役牛を購入するなど、これまでの稲作を中心とした伝統的経営から、稲作プラスコーヒー栽培を軸とした近代的経営への転換を図っている。

また②農家は、僅か水田3エーカーではあるが、そのうち2エーカーは調査村落にあっては例の少ない米の2期作を行い、また放牧地・畑地の一部にチリー・ラギのほうカルダモンを栽培し、抱負な家族労働を投下して多角的農業を展開させている。さらに、ウシ頭数を増やすために、去年政府から入会放牧地を4エーカーほど借地し、20日間かけて底に

溝を掘り囲いつけている。この②農家の牝水牛飼育は、1年前に未經産牛（3才）を直接取引により450ルピーで購入したものであり、搾乳中の効果な牝水牛の購入によるものではない。いずれにしても、B1型農家にとってのウシ飼育は、農業経営の新たな転換や多角化の過程で、使役や❖肥生産などによる生産費抑制のため、また自給用であれ販売用であれ、生乳生産を家計上欠くことの出来ないものとして位置づけられている。なお、B1型農家のうちの①農家がA型農家に加わるのは、比較的容易なことである。

(b) B2型—伝統的ゼヴ牛飼育型

B型農家群の多くはB2型農家であり、サンプル調査対象農家のうちK地区2戸、Y地区4この計6戸をB2型農家とした。

このB2型農家の特色は、土地所有規模は10エーカー未満で、ウシ飼育頭数の増加に対してもさほど積極的ではなく、伝統的に牝牛と牡牛を飼育している点である。1966年当時と比較してウシ頭数に余り変化はなく、③、④、⑦農家などのようにむしろ減少している例もある。飼料基盤を入会放牧地に、飼育管理は放牧互助制に大きく依存している。K地区の③農家は他のムスリム教徒と同様、サウスカナラ県プットール（Puttur）郡下から独立後に商売目的で移住してきたものであるが、1966年時には既に農業を生業としており、ウシ飼育頭数8頭のうち、牝水牛2頭を使役用に飼育している。しかし現在は、ゼヴ牛のみ飼育し自家生産によって14頭になっている。バザールに住むことにより、飼育目的の第1位に搾乳と答えるが、調査時の搾乳中の牝牛は1頭のみで、他の2頭の成牝牛のうち、1頭は8才の年齢にも関わらず発情せずもう1頭も4才の未經産牛である。しかし、調査時でも搾乳量の多い牝水牛の購入の具体的計画はない。つまり、この③農家は一時的な賃稼ぎ労働にでることはあっても、基本的には水田農業を軸にした典型的な飯米農家であり、土地所有規模の零細性が規程条件となって、ウシ飼育頭数の増頭に期待を持ってないでいる。同時に、搾乳中の牝水牛や作業能力に優れたハリカール種などいわばウシの資質改善に対しても積極的でない。従って、B2型農家のうち、1966年当時よりウシ飼育頭数が減少している農家は、水田耕作に要する牝牛頭数の維持を購入に依存する傾向を強め、自家生産する使役牡牛を若干減らしている。このことは、B1型農家では入会放牧地のウシ飼育に期待できにくくなったことにより、賃稼ぎその他の兼業によって生計を立てるようになっている。それは従来からの飯米確保のための耕種（水田）農業のためのウシ飼育であるといえよう。

(3) 購入牛飼育型（C型）

C型に分類されたのは7世帯で、それらは搾乳目的のC1型と使役目的のC2型とに二分される（第16図参照）。

(a) C1型—副収入目的搾乳飼育型

C1型は第16表の通り3世帯で、そのうち2世帯はバザールのあるK地区に居住する。①農家は、30年前にアラビア海沿岸の港街マンガロール (Mangalore) より移住してきたAchar (伝統的生業は大工) で、1960年にパンチャートより入会放牧地の分譲譲与を得て現在地に住居を構えた。つまり、職人として身を立てていたが、5年前から搾乳用の牝水牛飼育をパンチャートや農業協同組合、さらに銀行からの借金により購入し、漸次自家生産により増やして、現在のウシ頭数は11頭である。そのうち水牛は7頭を占め、搾乳中の牝水牛は2頭である。毎日搾乳した6ℓの生乳の半分をバザール内のインド食堂に1ℓあたり2ルピーで販売している。ウシの管理は雇いの牧童に任せ、親子共々大工仕事を本業とし、搾乳業を副業としている。世帯主は、農地を入手し、さらにウシ飼育頭数を増やす意欲を持っている。また、②農家は農地を全く所有せず、服仕立て業を生業とするかたわら乳牛を飼育し、生乳をバザールで少々売ってはいるものの、牝水牛の飼育はみられない。③農家はY地区に居住し、水田とコーヒー園を経営するが、世帯主が病気で十分に働けないことと、長男が就学中であることから、同じ村落内の親戚関係のある農家に20日間余り耕起・運搬などの力仕事を依存している。現在乾乳中の7才の〔cow〕に妊娠を期待しているが、①や②の様に積極的に搾乳業を発展させようという意図は、③農家には低いようである。

(b) C2型—賃耕用牝ウシ飼育型

このC2型農家は、いずれも零細ながら農地を所有し、日雇いとして年に1カ月前後働き現金収入を得ている。彼らは1組の牝牛・牝水牛と鋤を携え、1日10ルピーの労賃を得るが、これは婦女子の単純農作業 (草取りなど) 労賃の2倍である。C2型にとって、この日雇いによる現金収入は最も重要な収入源となっている。④農家は牝牛と牝水牛の各1組を飼育し、世帯主と長男がウシを連れての日雇いに年間20日間余り従事するが、水田3エーカーの耕起・把耕のみならず稲の脱穀作業にもウシを利用している。また、⑤農家では2組の牝水牛を年間150日間使役し、⑥農家では世帯主のみが働き手であるために1組の牝牛を飼育し、年間30日間余り日雇いに出ている。⑦農家では世帯主が年老いたために働きには出ないが、長男・次男は石工職人として村外で働き、三男以下4人の息子は2組の牝牛を連れて日雇いに出ている。このように、C2型農家は家族内の男子労働に応じて使役用の牝牛・牝水牛を何組か飼育し、これらのウシを使役しての日雇い労働によって零細な農業経営を支えている。また、⑥や⑦の農家が1966年当時、ウシを飼育していなかったことを考えると、近年の農作業の日雇い労働のあり方が大きく変化してきたと考えることが出来る。つまり、雇主側の農家が人手だけではなく、使役用ウシと鋤を携えての作業

を求める傾向が増大している。従って、C2型農家にとって使役用ウシの更新は重要であるが、表14で明らかなように、平均でみれば5年おきに1組のウシを購入しなければならず、また病死などの危険もあるので、ウシの更新は、大きな負担となっている。現状では、農地所有面積の拡大も期待できないことから、C2型農家の調査村落での経済社会的地位の上昇は今のところ望めそうにない。

五. ウシの取引と地域間移動

調査村落のウシ飼育は、既述した通り、他地域からの購入により一定の更新が行われ今日に到っている。おもに更新される耕起・運搬用牝牛は、ハッサン市附近で生まれ育ったハリカール種が中心となっている。インドゼヴ種のなかでも優れた耕起・運搬用牝牛として評価の高いこの中型の、ハリカール種は、小型在来種のギイダス種中心のマルナードゥ地方の農民にとって、その購入資金のみならず飼料給餌や使役の上からも容易なことではない。それだけに、カルナータカ州の農民の誇りでもあるこのハリカール種牝牛を飼育することは、調査村落の村人にとっても自慢できることなのである。

調査村落での23戸のサンプル調査に基づいて、ウシの取引にみられる他地域間移動の実態を通じて、調査地区と他のマルナードゥ地方及びマイダン地方や西ガーツ山地西麓地方との関係を明らかにしたい。

1. 取引頭数と購入目的

調査地区のウシ取引はおもに購入であり、ウシの販売は稀少である。村人たちの多くは、“ウシは死ぬまで飼い、死んだら土に埋める”、“売ると殺されるかも知れない”などウシの販売に対しては否定的であり、その口は重くなる。つまり、調査を進めていく過程で、老廃ウシや自家生産されたウシの一部が売られているものと推察されたが、その具体的な回答は得られなかった。そのために、ここではウシの購入についてのみ述べることになる。

23戸のサンプル世帯には328頭のウシが飼育されているが、そのうちの31%に当たる103頭は他から購入したウシである。過去10年間のウシの種類別購入頭数とその平均価格を表17にまとめた。購入頭数が多いのは、牝牛の44頭を筆頭にして、牝水牛、牝牛そして牝水牛の順となる。しかし購入の割合をみると使役用の牝水牛（63%）と牝牛（43%）がともに高く、繁殖兼搾乳の牝牛（14%）と牝水牛（35%）はいずれも低い。

購入目的は、ウシの種類と購入時の年齢などから推察できるので、第17図より検討してみたい。前述の通り、購入ウシの66%は牝牛であり、購入時の年齢には牛と水牛で若干の相違はみられるものの、いずれも2つのピークがみられる。牝牛では2～4才（13頭）

と7～10才（22頭）が、牝水牛では3～5才（13頭）と8～9才（7頭）が多く購入されている。これら牝ウシは、いずれも耕起・運搬用に使役する目的で購入されるものの、水牛に比べ牛の方が年齢が高くなっている理由は、おもに荷車の牽引に使役されるために、水田耕起などに比べて熟練度の高い使いやすい牝牛を求めるためであり、しかも、その価格が後に詳述するように5～6才のいわば青壮年期の働き盛りの牝牛に比べて安く、入手し易いこともその大きな理由である。調査地域では、マイダン地方と同じように水牛を牽引用にほとんど使っていない。⁴⁷⁾

牝ウシでは、牛の購入時年齢は5才程度で、水牛のそれより1才ほど低い。一般に、牛の成長は水牛に比べ1年余り早いといわれているが、このことが調査地区における前期の年齢差の直接の理由ではなく、購入世帯の事情によるものであろう。そして、いずれの購入世帯においても、繁殖兼乳用として購入しており、牛に比べ水牛購入は搾乳用として購入されていることが明白である。つまり、水牛14頭の購入例のうち3例は親子連れでの購入であり、しかも、その子はすべて牝であるからである。

一方、牝牛に関しては親子連れでの購入は見あたらないが、初産を済ませた不妊牛ではないことが明らかな牛の購入例が比較的多いことから、繁殖用に購入する傾向が強いように推察される。ただ、村人によっては、水牛の乳よりも牛のそれをありがたがる傾向がある。その為には、単純にはいえないが、K地区のバザールの存在、具体的には茶店や食堂がある為、水牛の生乳は、容易に販売できる。近年では、そのためか、搾乳量の多い水牛を政府の酪農ローン（Dairy loan）を借りて購入する例が見られる。つまり、1980年の12件からはじまり、'81年5件、'82年10件の合計27件が見られる。

2. 取引方法と購入価格

ウシの購入には、二つの方法がある。一つは、買い手が自ら売り手を探し、ウシの価格を直接交渉によって決めて購入する方法と、他にウシの売買を業とする家畜商人⁴⁸⁾（ダラリ、Dalally）から購入するやり方である。一般にインドでは、前者の取引が支配的で、後者の例は、優良牝牛や搾乳量の多い牝水牛及び老廃ウシなどに限られるのが普通である。この地区の老人は、“ダラリは好かん……彼らは利益を得ようとする”，“イスラム教徒とは、ウシの取引をしたくない”といった声が多く聞かれ、ダラリ、とくにイスラム教徒との取引にはきわめて消極的である。なお、ダラリは調査村にはいないが、南隣のニデゲレ（Nidigere）徴税村に1人いる。ちなみに、サンプル調査で明らかとなった75件の取引のうち、酪農ローンで購入した牝水牛の2例を除いてすべて直接交渉による取引で、ダラリ取引はみられなかった。

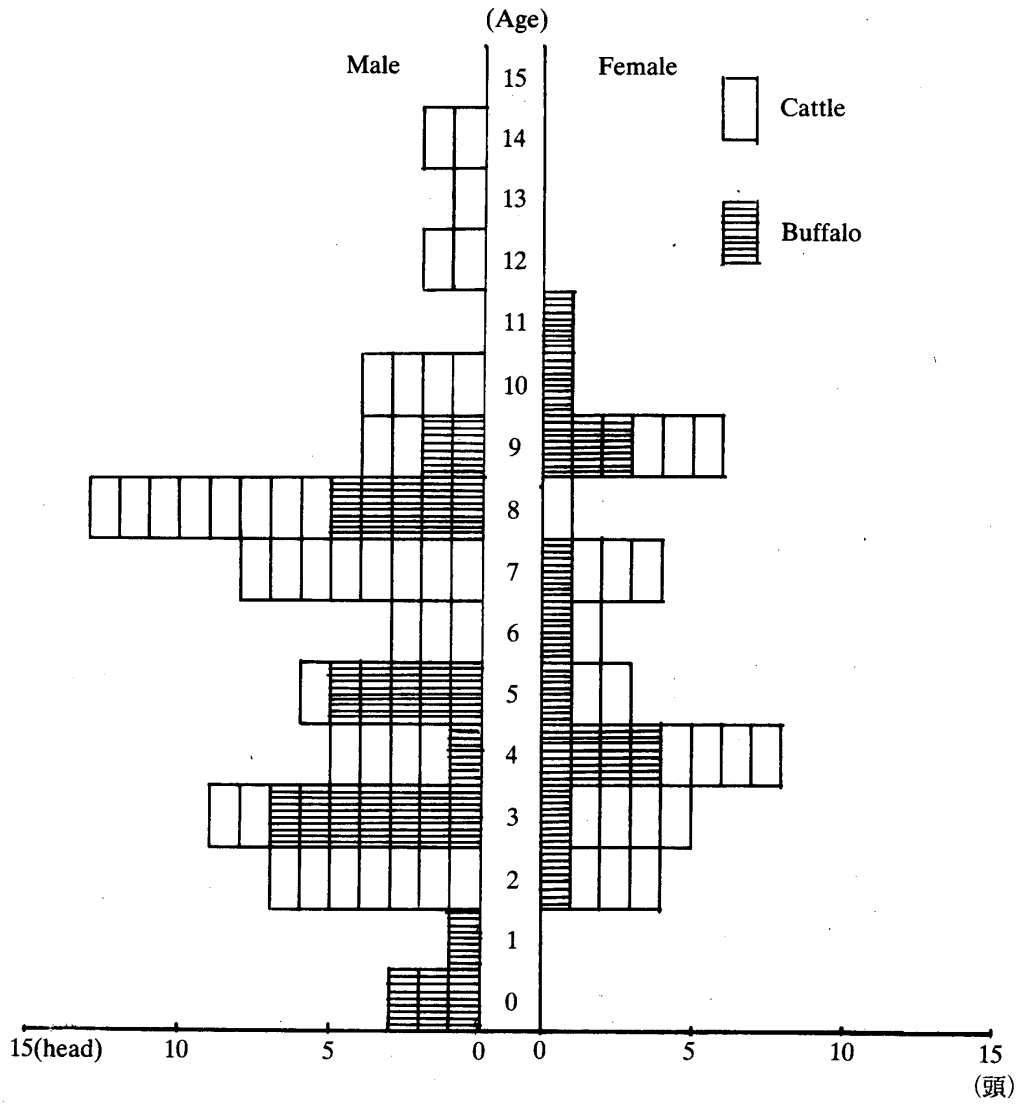


図17 ウシ購入時の年齢分布

Figure 17. Age distribution at the time of purchasing

Table 17 Number of bovine and purchasing price by each purchasing years

年	総計		牝牛		牡牛		牝水牛		牡水牛	
	頭数	価格	頭数	価格	頭数	価格	頭数	価格	頭数	価格
'72.7より前	1	400	0	0	1	400	0	0	0	0
'72.8-'73.7	2	93	0	0	1	75	0	0	1	110
'73.8-'74.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
'74.8-'75.7	3	318	2	315	0	0	0	0	1	325
'75.8-'76.7	4	335	0	0	2	520	0	0	2	150
'76.8-'77.7	7	496	2	238	0	0	0	0	5	600
'77.8-'78.7	13	635	0	0	7	614	3	1,133	3 ^(a)	183
'78.8-'79.7	14	625	5	400	3	533	4	1,163	2	250
'79.8-'80.7	19	576	3	280	12	667	1	1,100	3 ^(b)	500
'80.8-'81.7	15	612	2	313	9	572	2	1,500	2 ^(b)	400
'81.7-現在	25	611	7	446	9	644	4	1,263	5	325
計	103	582 ^(c)	21	366	44	599	14	1,229	24	340

注) (a) 親の牝水牛と子の牡水牛との親子購入で、子の牡水牛には値がついていない。

(b) 親の牝水牛と子の牡水牛との親子購入で、子の牡水牛には値がついている。

(c) 子の牡水牛2頭を除いて、平均価格を算出。

Figure 18 Number, age and price by the category of

圏域	世帯数	ウシ頭数	牛		水牛	
			牝	牡	牝	牡
0～3マイル圏	13	33	10	15	4	4
3～7 "	3	9	2	6	—	1
7～13 "	6	13	1	7	—	5

平均年齢				平均価格				購入年次 (年別)				
cow	ox	she	he	cow	ox	she	he	1年	2年	3年	4年	5年
5.4	5.5	7.5	5.0	329	373	1,163	350	13	4	6	7	3
6.0	10.0	—	2.0	625	770	—	325	1	0	3	0	4
4.0	5.2	—	5.4	400	496	—	282	0	4	4	1	4

直接取引の場合には、売り手の庭先であれ、近くの牛市 (Cattle market) であれ、仲介者を立てず売り手 (飼育者) と買い手の二者間で価格を決め取引する。ハッサン市で毎週火曜日に開かれる牛市での取引交渉では、売り手と買い手の2人を取り囲む数人が時にははやし立てることもあるが、全体として静かに見守られるなかで袖下取引⁴⁸⁾によって行われる。この牛市にも多くのダラリが参加し、売り手と買い手の仲介を業とする例を見るが、その仲介手数料が売買金額の5%であることもあって、このダラリに売買成立の仲介を求める人は少ない。また、最も一般的な売り手の庭先での取引は、知人や友人の紹介により、買い手が売り手の庭先まで赴いて交渉し、売買が成立すれば直ちにそのウシを連れ帰る。取引が成立したからといって、日本のように紹介してくれた友人などを交えて飲食を共にすることはない。また、売り手や買い手の選択は自分の所属するジャティーに限らず、同じヒンドゥー教徒であれば、ほとんど障害にはなっていないが、前述の証言にもあるように、ヒンドゥー教徒はイスラム教徒との取引は好まない。ただ、近年の傾向では、学校教育を通じての友人・知人関係が、徐々にではあるが、この宗教に絡む問題をほぐしつつあるように思われる。

サンプル調査では、ダラリ取引の例を、見い出せなかった。ただ、政府の酪農ローンを借りて牝水牛を導入した2世帯のケースでは、いずれも牝水牛を形式的には政府が購入し、ローン受給者に現物つまりそれらの牝水牛を与えている。その際、牝水牛の売り手が例のハッサン牛市に近いハンナパトナ (hannapatna) 徴税村のダラリであった。彼らは本来、ハリカール種の育成業者であり、ウシの育成とその商いを生業とする人々である。このような酪農ローンによるケースは、ダラリ取引と見なしても良いかも知れない。また、地区内の老廃ウシや一部の育成牛が一部の村人によって売られていると推察されるが、その場合の買い手の中にはダラリも含まれていると推察されることから、この調査地区では、いわば闇の部分としてのウシの取引、とりわけ屠殺場や皮革処理場に直行するウシの販売に関しては、ダラリの手腕による取引が行われていると考える。村人の口からも、“金に困るとウシを考える”とか、“ウシを売ってトラクターを購入したい”とかいった声が聞けるのである。

ついで、ウシの取引単位は、インド全体にいえることであるが、搾乳・繁殖用の牝ウシでは1頭ずつでの相対取引であるが、耕起・牽引用牝ウシの場合は2頭1組である。つまり、水田耕起や荷車の牽引はいずれも2頭で行うためであり、特に荷車牽引用の場合、体高や気性が合う牛同志に一定の訓練を施して売られる。1977年8月行こう、2頭1組で購入された牝牛は17頭、水牛は5組見られた。ただ例外的に、1頭だけの購入例が牛で6頭水牛で2頭だけある。これは牛の場合、種牛、使役牛の予備牛や自家牛の牝牛と組ませる

ために購入したものであり、水牛については母親と一緒に使役牛の予備として購入したものである。なお、村人数人による共同購入やウシ小作の形態をとる購入などは、調査地域ではみられなかった。

次に、ウシの購入価格についてみてみよう。ウシの価格は、ギイダス種のような小型在来種からハリカール種のような優良牡牛など品種の違いはもちろんのこと、同一種でも年齢差や個体差などによって大きなバラツキがみられる。

第18図は、1977年8月以降の5年間に購入されたウシの購入時の年齢と価格を見たものである。全国的な動向について、この5年間のウシ価格の上昇率をグジャラート州バローダ市の小売価格（全国を代表する価格測定地）を見ると、搾乳用の牝牛が30%、牝水牛が10%も上昇し、牡牛はむしろ15%の低下をしている。つまり、この5年間は、1970年からの5年間にみられるような大幅（2並4倍）な上昇はなく、ほぼ安定した時期と考えて良い。それゆえに、第18図は購入年次にそれほど影響されることなく、年齢と価格との関係をほぼ正しく反映していると考えて良い。

第18図より、ウシの種類別に年齢別購入価格を見よう。牝水牛の価格は、初産前では、同一年齢の牝牛を若干上回るに過ぎないが、初産を済ませると急に上昇し、平均1,500ルピーと初産前の価格の4倍にも跳ね上がる。しかしその後は、年齢と共にその価格は低下し、10才前後で1,000ルピー近くになる。

一方、牝牛は初産前後でも価格差がほとんど見られず、年齢と共に上昇して8～9才で500ルピー前後になっている。この価格は、前述したバローダ市のその半額にも達していない。調査地区の牝牛が小型在来種のギイダス種でマルナードゥ地方にのみ飼育されるといったその販売市場の狭さや使役用牝牛の値下がり傾向を考えると、今後牝牛価格が急速に上昇することは考えられない。

使役用牝牛の価格を、全国的にみると、1977年をピークに低落傾向にある。調査地区においても、特に水田耕起用の牝牛は、それより価格の安い水牛に変えられる傾向があり、牝牛価格が1979年をピークに安くなっている。この牝牛については、ほとんど年齢に関係なく、500ルピーを下回るグループと、1,000ルピー前後から1,500ルピーを越えるグループとの二つに明瞭に分けられる。価格の高いグループがハリカール種であり、低いのがギイダス種であり、両者の価格差は2～3倍にも及ぶ。

牝水牛が仕事に使える3～4才になると、ほとんど年齢と関係なく200～500ルピーで取引されている。マイダン地方でほとんど価値のない牝水牛であってもこのマルナードゥ地区に耕起用に仕立てられて売られてくる。

以上のように、牝水牛と牽引用ハリカール牝牛を除くと、小型ギイダス種や牝水牛など

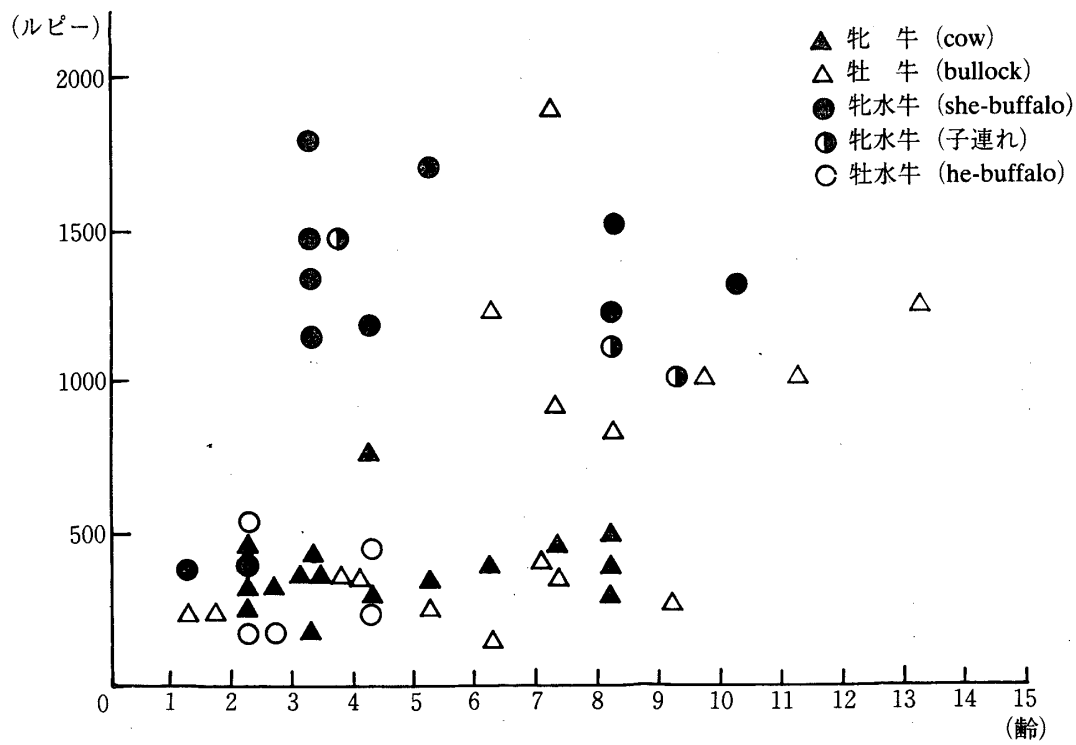


図18 ウシ購入時の年齢と購入価格

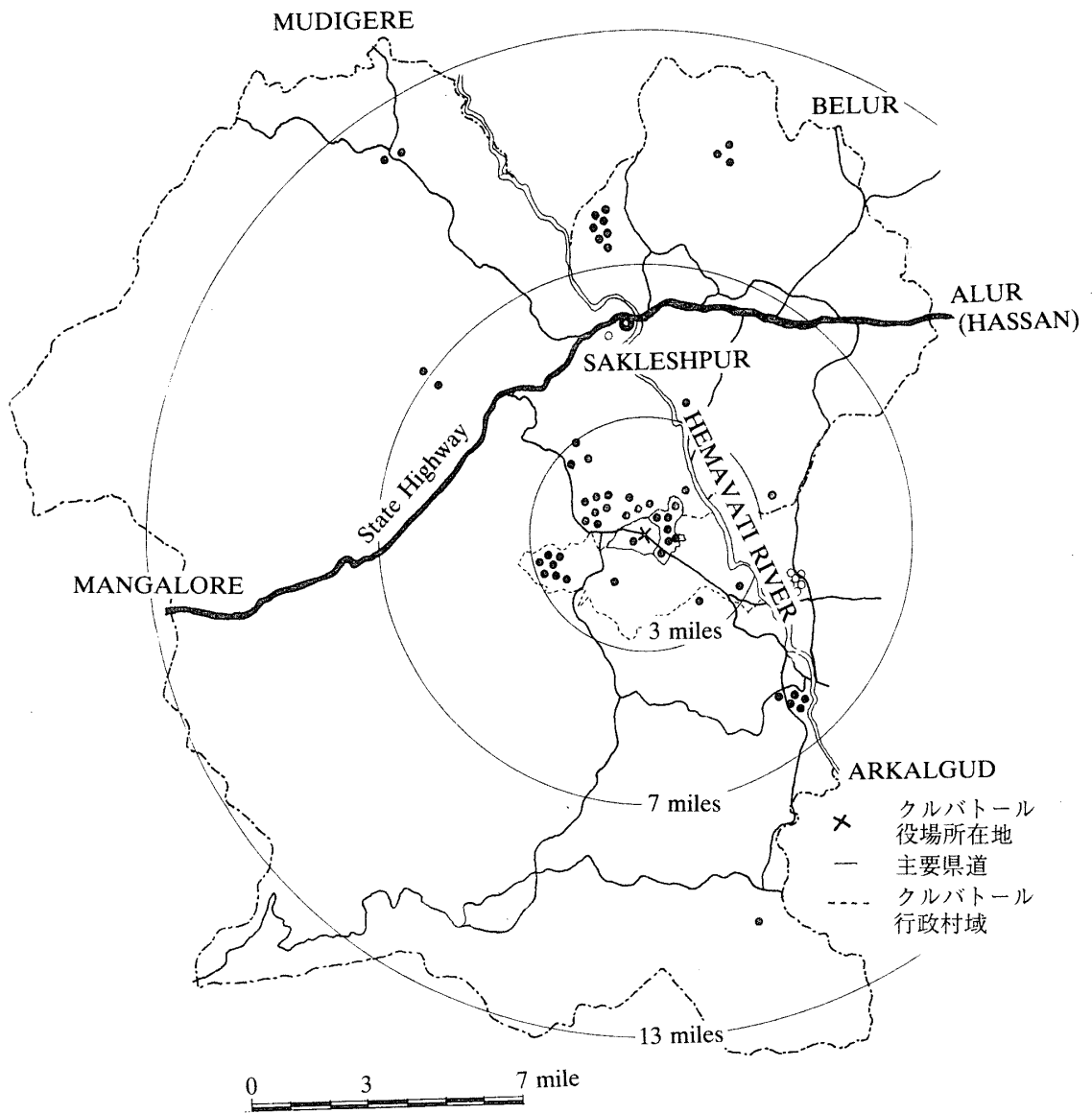


図19
Figure 19. Distribution of

を500ルピーという全国の標準価格の半額に満たない価格で、直接交渉によって購入されているのが実態である。

3. ウシの購入地と地域間移動

サンプル調査23頭がこの10年間に購入した103頭のウシは、(a)近隣の友人との庭先での取引か、(b)牛市での購入によるもので、前者が過半を占める。後者は4割を切るが、その取引は調査地区と他のマルナードゥ地方やマイダン地方、西ガーツ山地西麓地方といった広域的なウシの移動を成り立たせている。

(1) 庭先での購入

庭先での購入頭数は、64頭であるが、そのうち56頭の購入地別分布を第19図に示す。庭先購入頭数の52% (33頭) がK地区にあるパンチャート役場を中心にした3マイルの範囲で行われている。K行政村域の9地区でみると、Y地区 (7頭) とボンマナケレ (Bommanakeve) 地区に集中し、他では僅か3例を見るのみである。むしろ、調査地区の北隣の行政村域に属する、カンマナハリ (Kamanahalli) 地区 (4頭) やバクラバリ (Bykaravalli) 地区 (7頭) に多く、それらは片道30分程度の時間距離にある。以上の他では、南西6マイルのケロディ (Kerodi) 地区 (5頭)、北方7マイルのバイケレ (Baikere) 地区 (7頭) さらに北方10マイルのバラゴウデュダ (Balagodu) 地区 (3頭) などがあり、ループナラヤン川沿いの地域に偏在している。なお、庭先購入の8頭に関わる6地域について、その位置を具体的に特定できなかったが、それらもループナラヤン川沿いと推察される。

ついで、これらの庭先購入地とウシの種類や年齢、価格及び購入年について、前掲図の0～5km、5～12km、12～20kmの3圏別に第18表にまとめた。つまり、K地区から徒歩で1時間以内で到達可能な0～5km圏では、33頭のウシが購入され、なかでも牝牛購入の割合が高くなっている。また、この圏内での購入価格は他の圏に比べて低く、しかも、それらの購入は近年のものが多くなっている。また、サンプル調査23戸のうちの半数を上回る13戸が、この圏内での庭先購入をしており、調査地域における庭先購入の主なる舞台となっている。ついで、5～12km圏になると、購入世帯は僅か3戸となり、高年齢で高価格の牝牛購入例がみられるものの、この圏内での庭先購入は稀となる。特定農家による年次及びウシの種類を変えての購入であり、特定のいわゆる知人・友人関係による購入と推察される。最も遠くなる12～20km圏では、郡役場のあるサクレスプール町の北方のバイケレ (Baikere) 徴税村との関連が強く、ここだけで農家3戸が使役用ウシ7頭 (牝牛5頭、牝水牛2頭) を購入している。この圏内では、13頭のうち12頭はいずれも使役用のウシで、

搾乳・繁殖用ウシでは僅かに牝1頭の購入例があるだけである。

結論を出すには、些かサンプル数が足りないように思われるが、以上のことは次のように要約されよう。いわゆる知人・友人関係を基礎にする庭先取引は、主として購入者の居住する場所から徒歩でせいぜい1時間以内の人々との間で行われ、それより遠くなると減少する。そして、より遠くなる場合には、特定個人間同志の継続取引がみられる。

(2) 牛市での購入

購入ウシ103頭のうちの36% (37頭) は牛市で購入されている。それらを種類別でみると、牝牛の割合が低く、その分だけ牡水牛の割合が高く、牛市でのウシ購入の46%を占めている。なお搾乳用牝水牛の数もやや多い。次に、牛市で購入したウシの年齢及び平均価格を種類別にみると、前述した庭先取引に比較して牝水牛では、平均年齢では6.0才と1.5才低下し、平均価格は1,200ルピーと100ルピー余り高くなっている。また、牡水牛に関しては、平均年齢で5.7才と少し高くなるものの、平均価格では397ルピーである。これに対しゼヴ牛については庭先購入の場合とそれほど大きな差はみられない。

次に、サンプル23頭の村人が参加しウシを購入した牛市は、⁵⁰⁾第19表と第20図に占められる。また、購入頭数の多い牛市は、第19表に示されるように Gudugalale Jhatra で毎年1月第3週より10日間余り開かれる Cattle fair である。この市では、おもに耕起・運搬用の牡牛や牡水牛が購入されている。この牛市で購入した5戸のうち、K地区の最大の農園主は、牡水牛を2組と牡牛と牝水牛を各1組合計6頭の使役用ウシを購入している。次に多いのは、Hoskota Shandy であり、K地区からは距離的に最も近い牛市で、特に牝牛の購入が多くなっている。そのほか、隣のクルーグ県下の Nandish wara cattle fair や同じハッサン県の Hassan cattle fair, Subramanya suwamy などの牛市で、それぞれ5～6頭の購入がみられる。なかでも、ハッサン牛市は、年1回の大市 (fair) と毎週火曜日に開かれる週市 (Shandy) とが開かれており、とりわけ大市は、州でも有名な大市である。この市での購入例では、搾乳用水牛の購入がみられるが、これら3頭のうち2頭は、政府の酪農ローンを借りて、ハッサン市近郊に住むダラリよりの購入である。

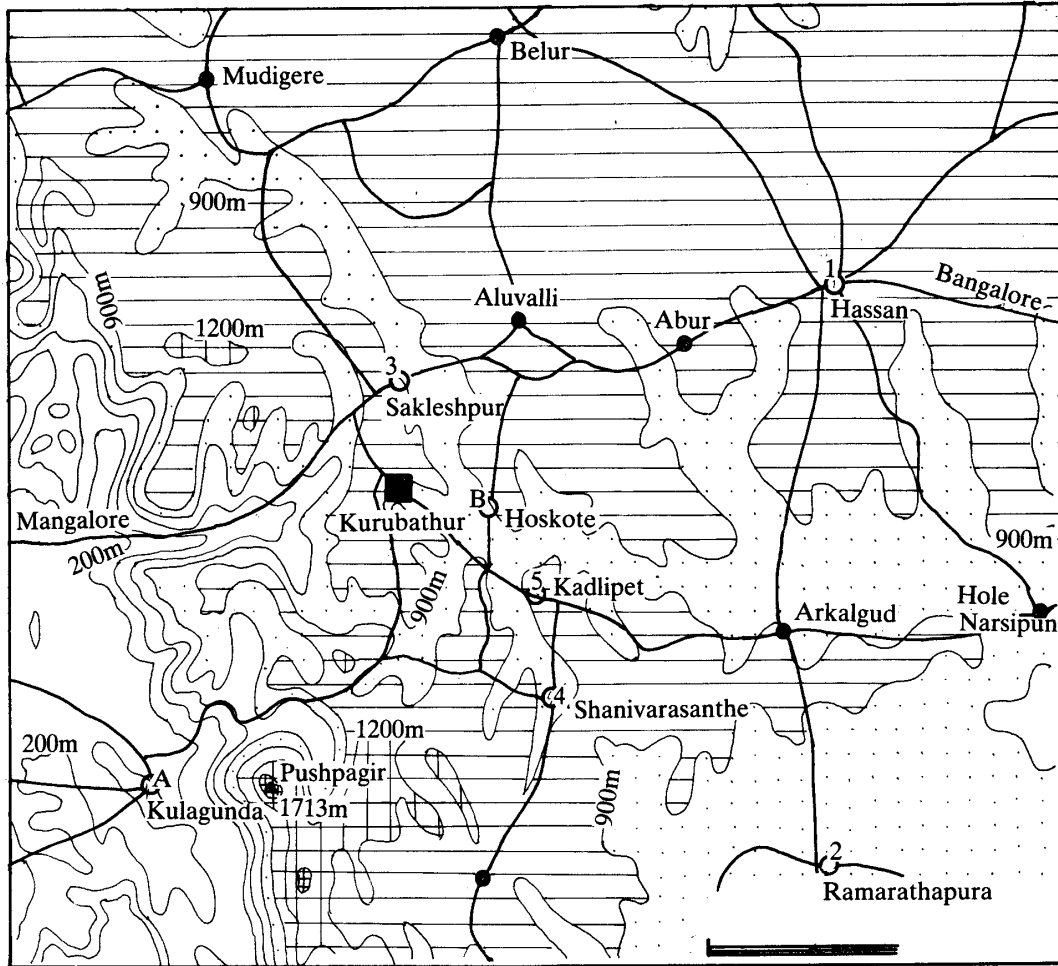
いずれにしても、牛市に出かけてのウシ購入は、23頭のうちの16頭においてみられ、この牛市購入が庭先購入同様に身近なものと理解され得る。

3. ウシの地域間移動

ここでは、牛市取引を通じてのウシの地域間移動を、調査地区との関連において、より広域的にみてゆきたい。

(1) 乾燥地域から湿潤地域へ

Figure 20. Cattle fairs and Cattle shandies in surrounding of the survey village



注) なお、地図番号は、第19表の牛市番号に一致する。

図20 調査村落周辺の牛市分布

Table 19 A list of Cattle markets in connection with the survey vilage

番号	name of cattle market	Place	Tashil		days	Cattle		Buffalo		Total	Remarks
						cow	ox	she	he		
①	Hassan Cattle Fair	Hassan	Hassan	1月上旬より	8	1	0	3	0	4	Shandy held on Tuesday
②	Subramanya Swamy	Ramanatapura	Arakalgudu		4	0	1	1	3	5	
③	Sukleshpur Swamy	Sakleshpur	Sakleshpur	2月第4週より	15	0	1	0	0	1	
④	Gudugulale	Shanivara-santhe	Somwarpet	1月第3週より	10	1	9	0	5	15	
⑤	Nandhishwara	Kodlipet	Somwarpet	1月第4週より	12	2	0	1	2	5	
Ⓐ	Subramanya Swamy	Kulagunda	Sullia		15	—	—	—	—	—	largest one in
Ⓑ	Hoskota Shandy	Mallapura	Alur		1	4	0	1	1	6	
Ⓒ	Gandasi Shandy	Gandasi	Arsikere	毎週木曜日	1	0	1	0	0	1	

note: ①~Ⓐ for cattle fair, Ⓑ and Ⓒ for cattle Shandy

Table 20

州名	牛+水牛の総頭数	(a)	Fairsの数		入場頭数	(%)	Bull	Bulloak	cows	calves	He- Buffal- o	She Buffal- o	fair 当 たりの平 均頭数	fair 当 たりの平 均入場 頭数
				%			%	%	%	%	%	%	千頭	
Uttar Pradesh	32,763 (28.2)	16.5	20	14.1	359,367	12.9	3.8	56.2	2.1	31.1	2.5	4.3	1,638	17,968
Madras	27,283 (28.8)	13.7	13	9.2	169,202	6.1	13.7	77.1	1.7	4.5	3.0		2,097	13,016
Bihar	18,613 (17.8)	9.4	12	8.5	239,989	8.6	0.0	86.9	3.7	5.2	2.4	1.8	1,551	19,999 (a)
Madhya Pradesh	17,458 (14.9)	8.8	3	2.1	58,397	2.1	19.2	59.0	5.6	3.5	7.8	4.9	5,819	19,466 (b)
Bombay	16,077 (25.9)	8.1	3	2.1	26,950	1.0	9.4	57.5	4.6	1.7	14.7	12.6	5,359	8,983
Rajasthan	13,411 (22.0)	6.7	4	2.8	113,250	4.1	0.1	90.9	0	6.3	2.7	0	3,353	28,313
Hyderalad	11,742 (21.5)	5.9	2	1.4	10,625	0.4	42.4	42.4	1.9	7.4	3.3	2.6	5,871	5,313
West Bengal	11,004 (5.6)	5.5	1	0.7	12,250	0.4	0.4	40.8	0.8	0.4	57.2	0.4	11,004	12,250
Orrisa	8,782 (10.2)	4.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Madhya Bharat	7,919 (23.4)	4.0	3	2.1	111,636	4.0	—	—	—	—	—	—	2,640	37,212
Panjal	6,844 (37.3)	3.4	12	8.5	436,091	15.7	0	52.9	1.0	14.7	1.0	30.4	570	36,341 (c)
Mysore	5,778 (18.8)	2.9	51	35.9	882,070	31.7	8.1	67.5	4.9	18.1	0.4	1.0	114	17,296 (d)
Assam	5,621 (8.5)	2.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Others	15,725 (16.4)	7.9	18	12.6	361,625	13.0	0	32.7	5.2	42.2	0	19.9	874	20,090 (e)
Total	199,020 (21.9)	100.0	142	100.0	2,781,452	100.0	4.5	62.2	3.1	18.6	1.9	9.7	1,402	19,588 (f)

注) (a) 152,202頭の内訳, (b) 20,489頭の内訳, (c) 420,470頭分, (d) 533,070頭分, (e) Delhi と PEPSU の235,567頭分の内訳, (f) 総計2,142,637頭の内訳

(資料) Report on the Marketing of Cattle in India (1956) より作成

インドのウシの移動は、北インドであれ南インドであれ、乾燥地域から湿潤地域への地域間移動が一般的である。⁵⁰⁾カルナータカ州においては、マイダン地方からマルナードゥ地方への、耕起・運搬用ウシの流れが主たるものである。つまり、第21図の通り、既に M.S. Kataria (1982) が指摘したように、ウシの代表的産地は、耕起・運搬用にしろ搾乳用牝牛にしろ、パンジャブ、ハリアナ、グジャラート、カルナータカといった半乾燥地帯の州である。既述した Halikar 種のカルナータカ州における主産地は、カルナータカ州のトムクール (Tumkur)、ハッサン、マイソールの諸県である。⁵¹⁾ハリカール種の牝牛は、外見は中型でこじんまりとしているが、筋肉質であり、3~4才で去勢され使役にならされている。数カ月の親切な忍耐強い訓練によって立派な耕起・運搬用牝牛として育成される。各村には、数代にわたってハリカール種を飼育し続けている家族が2、3戸はあるといわれる。調査地域には、年間降水量が800mm前後で少ないが、南西モンスーン期のみならず北東モンスーン期にも降雨がみられ、しかも最も降雨量の多いのは10月である。また3~4月の酷暑期にも西部海岸から吹き込む風を朝夕の薄い霧によって暑さが和らげられている。

この地方には、約180万頭のハリカール種のウシがいると推計されているが、牝牛は泌乳量が少なく、ほとんど搾乳されないために、搾乳用としての取引はみられない。州内の主要な牛市でのハリカール種の取引は、おもに牝牛に限られ、約22の牛市で年間22万頭余りが取り引きされるとしている。なお、アムリッツ・マハール種は、⁵²⁾18世紀に戦争用としてハリカール種をその源として改良されたもので、その驚くほどの強靱性と持久力に特色がある。そのため、ハリカール種と同様に、耕起・運搬用牝牛として利用されている。

このように、年間降水量800mm前後のマイダン地域で繁殖・育成されたハリカール種は、西ガーツ山地や東ガーツ山地を越えて、より降水量の多い湿潤地域へ引き取られ、その地方の貧弱な牝牛に代替される。調査地区では、年間降水量4,000mmを越える多雨地帯であるが、マイダン地域からきたハリカール種牝牛に対しては、たとえ高齢であろうと信頼が高い。その多くはクルーグ県メルカラ (Mercara) 町経由でくるが、さらに西ガーツ山地を下ってラバル海岸低地のサウスカナラ県へと売られていく。

(2) 牛市の分布と開市

牛市には、週市 (Shandy, weekly market) と大市 (Mela, fair) がある。州庁所在地バンガロールとサウスカナラ県庁所在地マンガロールとを結ぶ直線を中心とする南北100kmの地帯に分布する牛市の分布を第22図に示す。牛市密度はマイダン地域で著しく高く、マルナードゥ地域やマルバル海岸低地で疎であることがわかる。この図は、1961年家畜センサス飼料に基づくが、広域的なウシ流通には、今日と余り大きな変化はないものと推察さ

れる。

ウシの大手は53カ所あり、そのうち入場頭数が5万頭以上の最大規模のものは3カ所あり、ついで3～5万頭規模のものが4カ所、1～3万頭規模のものが15カ所、1万頭未満のものが31カ所である。平均すると一つの手で1.3万頭余りのウシが入場している。これを全国的視野でみるため、データは少々古いが、州別に主要なウシ大手を見たのが第20表である。問題にしている地域は、サウスカナラ県を除いてすべて当時のマイソール州に属していた。この表より、マイソール州が全国でも最も多くの大手が開かれ、入場頭数についても相当数の30%を上回る効率を示して、全国的に群を抜いていることが知られよう。また、Bullockの入場の割合が75%と全国平均を上回っているが、水牛の入場数の低さも注目されよう。当時に比べると、今日では水牛とりわけ牝水牛の入場は増加しているが、いわゆる公式な取引の場への水牛の入場が少ないということの意味は、聖なるゼヴ牛に対して、穢れた水牛というヒンドゥー教徒の伝統的意識⁵³⁾が大きく影響しているように思われる。また、ナンディー信仰⁵⁴⁾と結び付く Bull (去勢していない牝牛) が南インドで比較的高い割合を示すが、北西インドやヒンドスタン平原で、使役用としての Bullock の取引が圧倒的に高い割合を占めていることも興味を引く。

いずれにしても、牛市の分布は、ウシ商人や市開設者の存在によって多少影響されるものの、全体的にはウシの繁殖・育成に関係する気候条件の他、交通路の有無によって大きく限定されているといえる。つまり、ウシの運搬が、徒歩・トラックや鉄道いずれであれ、交通的位置の重要性は大なるものがあり、主要な大規模牛市（3万頭以上）はいずれも幹線道路沿いに分布している。とりわけ、バンガロール～ハッサン～マンガロール、バンガロール～チャンナパトナ～マイソール、マイソール～ハッサンなどの主要道沿いには大小の牛市が並んでいる。また、気候・地形条件についてみると、年降水量800mm以下のマイダン地域に牛市の大半が立地するが、2,000mm前後の多雨域であるマルナードゥ地域ではクールグ県下に4つの大手と1つの週市があるほか、他ではみられない。さらに、高温多雨のマルバル海岸平野でも大手2、週市1が開設されているに過ぎない。

次に、開市期についてみよう。ヒンドゥー歴で開市期間を明示している40カ所の大手のうち、Pushya (12～1) 月から Chitra (3～4) 月までの冬季に開市するのは36カ所であり、残り4カ所は Kartika (10～11) 月に開かれる。南西モンスーン期には、大手は全く開市されていない。ただし、この期間ハッサン市とその周辺では、週市においてウシの取引が行われる。ハッサン市の週市は火曜日であり、そこでは雨期でも2,000頭余りのウシが参集する。

第21表は大手の規模と開市期との関連を示す。1市当たりでみると、Pausa 月から

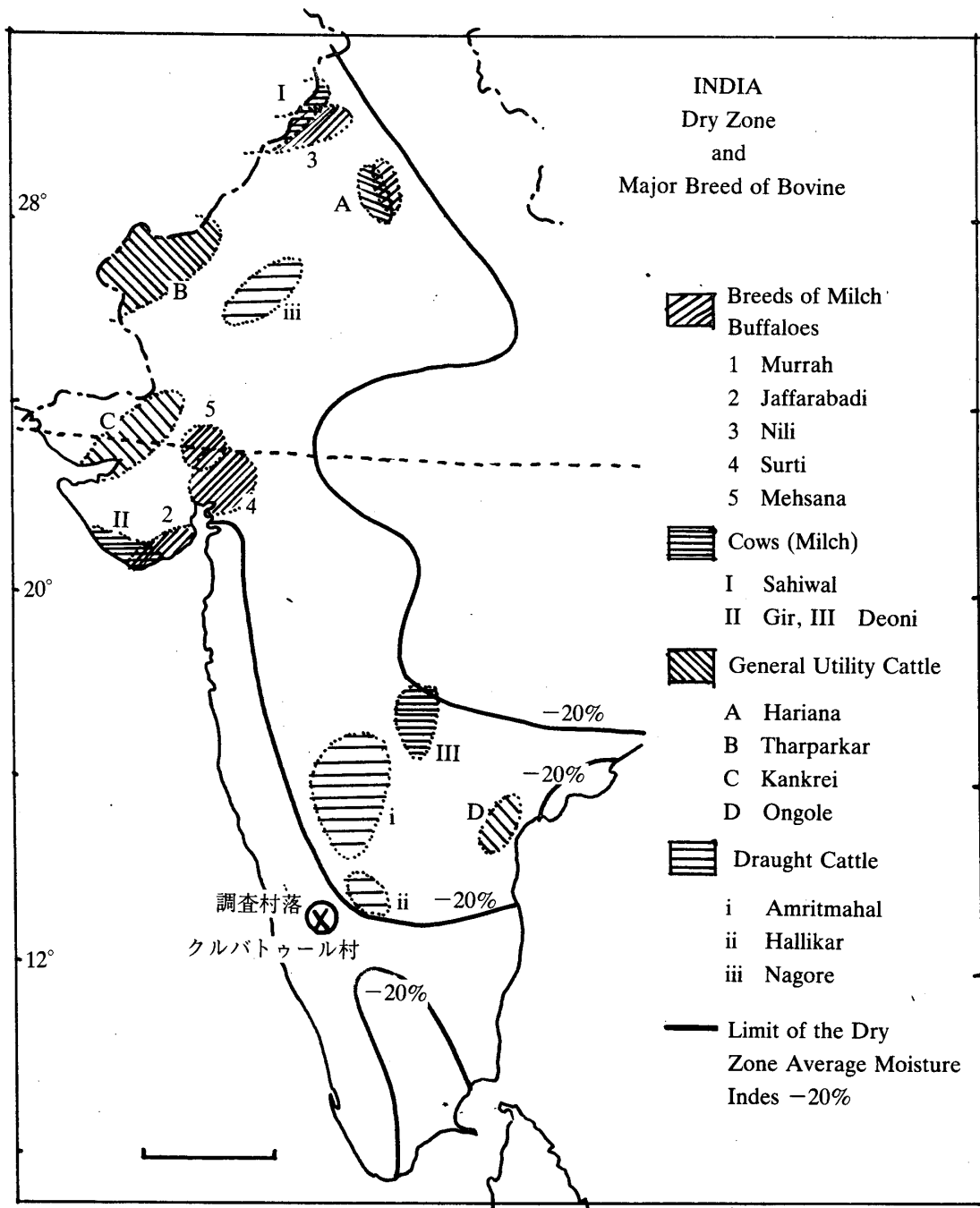


図21 乾燥ゾーンと主要ウシ種の分布
Figure 21. Dry Zone and Major Breed of Bovine.

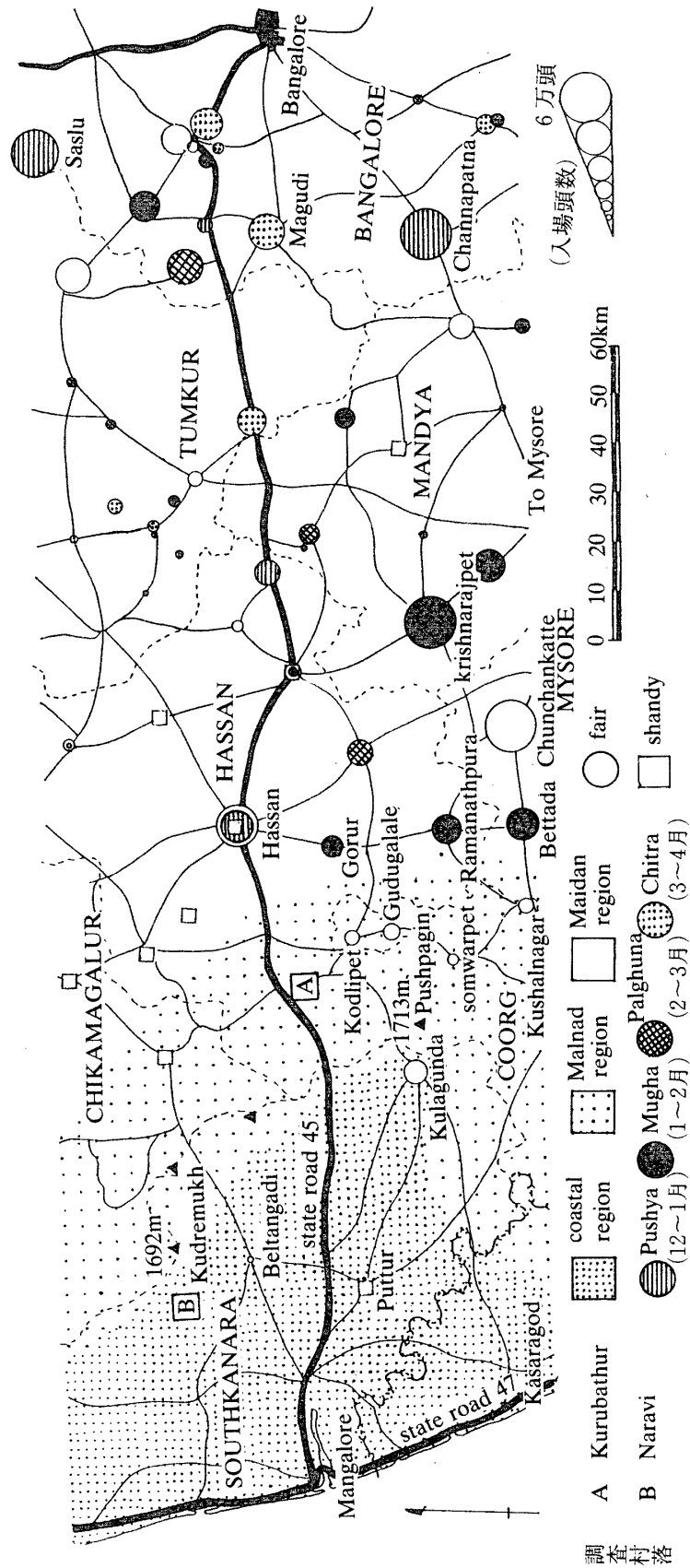


図22 牛市の規模別分布と開市月 (ヒンドゥー暦) (1961年家畜センサスより作成)
Figure 22. Distribution of Cattle market and market month.

Caitra 月にかけて漸減傾向がみられる。つまり、Pausa 月には開市数が6カ所と多くないが、入場頭数では6万頭規模の大市が2カ所開市されている。これに対して、Magha 月、Phalguna 月そして Caitra 月にかけて、開市が多くなるものの、5千頭未満の小規模なものが多くなっていく。

(3) 大市取引にみるウシの地域間移動

前掲第21図と第22表とを参考にし、またイギリス歴で開市期の明日、大市を考えてウシの流れを考えると、次のようにいえよう。

Kharif 作物の収穫が終わり Rabi 作物の植え付けがほぼ完了した Pushya 月に、バンガロール近辺では、北北西のサスル (Saslu) と南西のチャンナパトナ (Channapatna) でウシの大市が開かれ、それぞれ北方向および西方向へのウシの流れの起点となる。同時に、イギリス歴の1月初旬にハッサン市での大市が開市する。次いで、Mugha 月にはマンディヤ県、マイソール県北部およびハッサン県南部で大市が開かれ、さらにこれに続く Phalguna 月には、それらの周辺を埋めるように地方の町や村で開市されていく。こうしてバンガロール周辺に始まる大市の連鎖は3カ月で一応終了するが、新たに Chitra 月の大市がバンガロール近辺から開市される。以上のように、マイダン地域の大市でのウシ取引は、ほぼ4カ月で終了する。

次に、マルナードゥ及び海岸平野における大市はどうか。第23図でみるように、マルナードゥ地域の大市4カ所はいずれもクールグ県の北部にあり、それらの開市期は、イギリス歴での1月が2カ所、3月1カ所、残りの1カ所がヒンドゥ暦の Karthika (10~11月) となっている。調査村落クルバドゥール行政村の村人がウシ取引をするコドリペット (Kodlipet) やグズガレエレ (Gudugalale, Shanivarasanthe) の両市は、マイダン地域のハッサンやゴルール (Gorur), ラマナタプラ (Ramanathpura), ベダタプラ (Bettadapura) の大市終了が、両者が1月第3週、後者が同月第4週に開かれる。

そこではハリカール種の Bullock を目玉にし、多くの小型マルナードゥギイダス種の牛や若い水牛の取引が行われる。開市期間は10日前後で、それらの入場頭数は5~6千頭である。3月第二週にサンマーペット (Sommarpet) で開かれるサマスワラ (Someshware) 市は、本来は、Cattle show であり、入場頭数も3千頭前後と少なかったが、周辺にこの時期の大市がなかったことから、牛市としての昨日を兼ね備えるようになったと思われる。既述のサクレスプール牛市も Cattle show から発展したものであり、マルナードゥ地域における牛市の起源の一端を示しているといえる。

一方、マイソール県境のクシャルナガル (Kushalnagar) 大市は Karthika に開市される。この時期に開かれる大市は、既述のようにバンガロール県北西部や、トムクール県に多く

みられるものの、ハッサン県下では見いだせない。クシャルナガル大市がこの時期に開かれ理由に次いで、確証は得ていないが、マイダン地域から西ガーツ山地を越えてケララ州の2～3期作の水田地帯へ耕起・運搬用牝ウシを供給するためと思われる。つまり、ケララ州の海岸地域ではこのころ、米の1期作の収穫を終え2期作にはいる時期で、耕起用牝ウシの需要が高くなるからである。以上のように、マルナードゥ地域の市場は地域内へのウシ供給ばかりでなく海岸平野への供給の中継的機能を有しているといえる。

最後に、マラバル海岸平野にあるサウスカナラ県におけるウシの地域間移動について検討してみよう。同県下の市場はスブラマニア (Subramanya, Sullia), カリヤンガラ (Kariyangala, Belthangadi 部), シータナデー (Seethandi, Karkal 郡) の3つ、及び週市としてプツール (Puttur), コタ (Kota), クンジーラ (Kunjila) の3つがある。前者は11月上旬～12月中旬 (15日間) のスブラマニヤ大市を皮切りに、北の方へ順にカリヤンガラ (10日間), シータナデー (12日間) と連鎖的に続いていく。各大市では、マイダン地域からハリカール種などのウシを連れてきた巡回商人によってにぎわう。なお、プツールとコタの週市は日曜日、ウツビー (Udipi) 町のクンジーラ (Kunjila) 週市は火曜日に開かれ、いずれも400頭前後が入場する。

サウスカナラ県の市場に入場するウシの種類及び仕入れ地について、まず、スブラマニヤ大市をみると、ハリカール種及びそのほかの交配種が多く、ついでマイソール地方種やサウスカナラ地方種が続く。水牛では、地方種、ダルワーク種及びムラー種が主である。それらの仕入れ地は、県外ではハッサン、トムクール、チックマガルール、バンガロールなどマイダン地域の諸県、県内ではプツール、ベルタンガデー (Belthangadi) 等近隣の諸郡が主となっている。これに対し、後者のシータナデー大市には、ゼヴ牛では、ハリカール種及びジェーシ種、シンディ種とオラール種などとの交配種⁵⁴⁾が主で、水牛では前者とほぼ同様な傾向を有している。また、それらの牛の仕入れ地は、ハッサンを筆頭にトムクール、ダールワル、シモガなど、東隣するマイダン地域の諸県である。なお、サウスカナラ県下の市場ウシの種類については、市場、週市の別なく、水牛とりわけ牝水牛が中心であり、ゼヴ牛が少ないことを特徴としてあげられる。さらにまた、地方の町を野営しながら搾乳量の多い牝水牛を連れて生乳を売り歩く業者が増えており、ウシの地域間移動の特例として興味を引く。

ついで、サウスカナラ県における村落レベルでのウシ取引の実態を筆者らが標本調査したナラビ村を例に、付け加えよう。第23表は、同村のサンプル世帯23戸にみる過去5か年間のウシの取引状況である。ウシ取引の8割近くは村内及び村外の庭先で行われ、市場や週市での取引は飼育規模の大きい農家に3～4例をみるにすぎない。取引相手は村内外の

Table 21 Number of cattle fairs by size and market month

(単位 10,000頭)

カレンダー別	市数	入場頭数	1市あたり頭数	入場頭数規模					
				0~0.29	0.3~0.49	0.5~0.99	1.0~2.9	3.0~6.0	
ヒンドウ暦	Pushya (12~ 1)	6	13.4	2.23	2	—	1	1	2
	Magha (1~ 2)	12	19.0	1.58	1	1	4	5	1
	Phalguna (2~3)	7	6.0	0.86	4	—	—	2	1
	Caitra (3~ 4)	11	8.8	0.80	4	2	1	4	—
	その他	4	3.8	0.95	—	—	2	2	—
イギリス暦	6	12.2	2.03	1	2	3	—	1	
不明	7	6.5	0.93	1	2	—	1	2	
計	53	69.7	1.32	13	7	11	15	7	

資料 Government of Mysore; Thirteenth Quinquennial Livestock Census Report, 1961 より作成

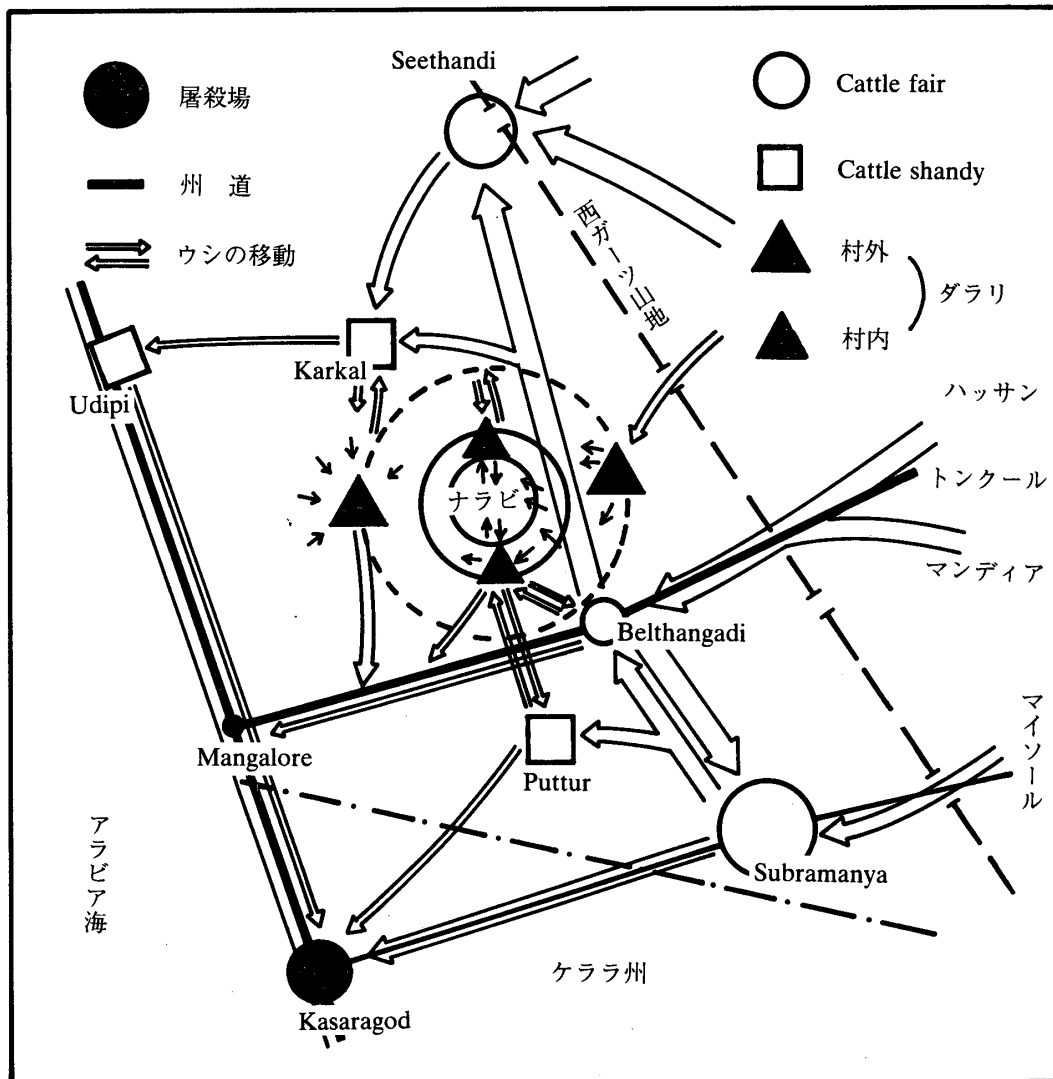


図23 ナラビ村からみたウシの地域間移動

Figure 23.

Table 22

年次	Cattle fairs	県名	開市月	期間	ゼブ牛				水牛		合計	主要種	仕入地	仕向先
					Bull	Bullock	Cow	Calves	He	She				
	Magadi	Bangalore	3月	7	2,000	5,000	1,000	2,000	-	-	10,000	ハリカール, 地方	Ban, Man, My, Tum, Ko,	Bombay, Madras
1950 ^{a)}	Hemogiri	Mandya	2月	12	400	38,000	1,000	20,000	40	560	60,000	地方, ハリカール	Mysore, state	Madras, Goorg, Bombay
	Hassan	Hassan	1月	8	7,000	9,000	2,000	10,000	200	800	29,000	アムリット, ハリカール	周辺	Mysore州外
	Ramanathpur	Hassan	12月	4	1,000	2,000	1,000	7,000	400	400	11,800	同上	周辺	同上
1971 ^{b)}	Subramanya	S. K	11月	15		650	50	30	3,750	1,250	6,084 ^{b)}	ハリカール, 地方	Has, Tum, Chik, Ban, その他	S. K

注)

- 1) Ban: Bangalore, Man: Mandya, My: Mysore, Tum: Tumkur, Ko: kolar, Has: Hassan, Chik: Chikmagalur
- 2) a) は Government of India (1956): *Report on the Marketing of Cattle in India*, pp. 172-175.
b) は Government of Karnataka (1973): *Kannataka state Gazetteer-South Kanara District*, pp. 178-179.
c) は水牛の calves 354頭を含む。
- 3) S. K: South Kanara.

Table 23 A list of households keeping bovine in Naravi village

(1982. 10)

番号	Jati又はCommunity	土地所有	ゼブ牛		水牝		合計	家畜 ^{a)} 単位数			購入頭数 ^{b)}						販売頭数 ^{b)}						取引場所			取引相手			備考
			牝	牡	牝	牡		Cow	She	Ox	He	Cow	She	Ox	He	Cow	She	Ox	He	村内	村外	市	A	B	C				
①	Jain	18.0	9 (3)	5 (4)	5 (1)	3 (2)	22	27.0	1	2	2	2	2	2	2	-	-	●	●	●	○	○	○		県下のCattle fair				
②	Jain	20.5	5 (2)	4 (2)	7 (2)	3 (2)	19	25.0	-	1	2	1	3	2	2	-	-	●	●	●		○			直接取引				
③	Billava	25.8	8 (2)	8 (4)	-	2 (2)	18	19.0	1	-	4	-	-	-	2	2	-	●	●	●		○	×		巡回商人に多く依存する				
④	Billava	7.0	1 (-)	8 (8)	1 (-)	2 (2)	12	18.6	-	1	8	-	-	1	3	2	●	●	●	○	×	○	×		牡水牛は村内の商人より購入				
⑤	Christian	10.9	2 (-)	4 (4)	3 (1)	2 (2)	11	14.8	-	1	3	2	-	-	2	2	●	●	●			○	×		seethanadi cattle fair (牝水牛の直接購入)				
⑥	Brahmin	28.5	8 (3)	6 (4)	2 (-)	-	16	14.2	3	1	4	-	2	-	-	-	●	●	●			○			Hassan Cattle fair など 直接取引				
⑦	Jain	7.0	4 (-)	5 (2)	3 (-)	-	12	13.6	-	2	2	-	-	-	-	-	●	●	●			○			直接取引, ローソク購入				
⑧	N. K	3.0	4 (1)	2 (2)	1 (-)	2 (2)	9	12.8	1	-	2	2	-	-	-	2	●						×		巡回商人に依存				
⑨	Billava	10.0	6 (-)	2 (2)	-	2 (2)	10	11.4	1	-	2	-	-	-	-	-	●	●	●			○			Subramanya cattle fair (牡水牛)				
⑩	Jain	9.0	1 (-)	3 (2)	1 (-)	2 (2)	7	11.4	-	-	1	2	-	-	2	2	●	●	●			○	×		牡牛はダラリより				
⑪	Christian	19.5	3 (-)	-	3 (1)	2 (-)	8	11.2	-	3	-	2	1	2	-	-	●	●	●			○	⊗		牡水牛-巡回商人より (3頭)				
⑫	Heggade	3.0	4 (-)	3 (2)	2 (1)	-	9	11.0	1	2	2	-	-	-	2	-	●	●	●			○	×		牡牛のみ巡回商人より, 他は直接取引				
⑬	Moolya	2.2	3 (2)	3 (-)	-	2 (2)	8	10.8	-	-	-	-	-	-	-	-	(●)						(×)		8年前牡水牛の入替え				
⑭	Heggade	4.0	2 (-)	2 (-)	2 (1)	2 (2)	8	10.4	-	1	1	2	-	-	-	2	●	●	●			○	×		ローソク購入				

番号	Jati又はCommunity	土地所有	ゼブ牛		水牛		合計	家畜 ^{a)} 単位数	購入頭数 ^{b)}				販売頭数 ^{b)}				取引場所			取引相手			備考			
			牝	牡	牝	牡			Cow	She	Ox	He	Cow	She	Ox	He	村外	村内	市	A	B	C				
15	Billava	6.8	3(-)	3(2)	-	2(2)	8	9.0	-	-	-	2	-	-	2	●								×	下取り400ルピー	
16	Brahmin	6.3	3(-)	1(-)	-	2(2)	6	8.0	-	-	1	-	-	-	(●)	●								○	8年前牡水牛の入替え	
17	Christian	3.0	1(-)	2(2)	-	2(2)	5	7.6	-	-	2	2	-	-	●									○	巡回商人	
18	B. S	4.5	6(2)	2(2)	-	-	8	7.4	-	-	-	-	-	-	●	●								○	直接取引	
19	Christian	1.2	-	2(2)	-	2(2)	4	7.2	-	-	2	2	-	-	●	●								○	直接取引	
20	Christian	1.5	4(1)	-	2(1)	-	6	6.2	1	1	-	-	1	-	-	●								○	cow は娘の嫁ぎ先	
21	Moolya	6.8	3(-)	-	-	2(2)	5	6.2	-	-	-	2	-	-	●										×	下取り500ルピー
22	Christian	6.5	1(-)	-	-	2(2)	3	4.8	1	-	-	2	-	-	●									×	村内のダラリ	
23	Brahmin	1.0	6(1)	-	-	-	6	4.4	1	-	-	-	2	-	●	●									○	直接取引
24	Jain	2.0	4(2)	1(-)	-	-	5	3.6	1	-	-	-	-	-	●	●									○	子牛連れ直接購入
25	Brahmin	3.0	4(2)	-	-	-	4	3.2	1	-	-	-	1	-	●										○	ローン購入
26	Brahmin	-	2(1)	1(-)	-	-	3	2.6	2	-	-	-	1	-	●	●									○	直接取引

注) a) 家畜単位の計算は、中里 (1984, p. 159) による。

b) 5ヶ年間の取引頭数

●は取引のあったとき、○は直接取引、×はダラリ取引を意味する。

農民とダラリである。ダラリには4つのタイプがあり、ナラビ村内の2人のダラリ（いずれもイスラム教徒）、定期的に村を巡回する村外のダラリ、マイダン地域からやってくる巡回商人、他州の牝水牛専門の巡回商人である。表では、ダラリ相手の取引と農民同志の取引とに区分しており、定期的に村外及び県外・他州からのダラリはすべて巡回商人として扱っている。この村では、イスラム教徒によるダラリ、ヒンドゥー教徒にしても、キリスト教徒であれ、ダラリ取引に依存しているといえよう。

大市でウシ取引をしている農家のうち、ジャイナ教徒とヒンドゥー教徒の①④⑤は、県内外の大市に出向き、ダラリを介せず直接取引を行っている。これに対してキリスト教徒の⑥は巡回商人に牝水牛の購入・販売を依存している。この⑥例にみるように、耕起用牝水牛の更新については、約5割の世帯は巡回商人を介して若い牝水牛（2～3才）を購入し、老いた牝水牛（11才以上）を販売している。巡回商人の巡回時期は大市の開市期とほぼ同じで、10～12月に集中している。一方、村内の2人のダラリは、この巡回商人と接触して村人に仲介したり、屠場送り用の老廃水牛を購入するなど村人と日常的に接しているが、一般に村内のヒンドゥー教徒やジャイナ教徒から嫌がられているようである。

以上のように、サウスカナラ県における村落レベルでのウシの地域間移動は、おもに牝水牛と牡牛を中心としているが、これを第25図のように模式化することができる。

六. おわりに

“世界一のウシの国”インドにおけるウシ飼育の実態は、“聖なる牛”論争に比べるとこれまでほとんど取り上げられることがなかったと言える。この小稿では、西ガーツ山地におけるウシ飼育の実態をハッサン県クルバトゥール行政村を事例として、①村落社会、②農業経営、③地域間関係の3点よりミクロ的に分析してきた。

まず、村落社会との関係からウシ飼育を見ると、それは、村落経済の維持もしくは拡大再生産にはってきわめて重要な役割をになっているといえる。具体的には、米作およびプランテーション作物（コーヒー・カルダモンなど）にとっての主要な肥料源（牛ふん・❖肥）であり、その意義は最近の化学肥料の値上がりにより、一層強まっている。広大な入会放牧地は、これまで、村落社会として管理・維持され、ウシ飼育を可能にしてきたが、近年における過放牧やその一部の分割利用は、従来のウシ飼育の慣行を大きく変化させており、行政上見過ごすことの出来ない問題となっている。さらに、牧童による昼間放牧や村営ウシ囲い場の果たす役割などから、ウシ飼育と村落社会とのあり方との関係は密接不可分なものであることを指摘した。

第2点のウシ飼育と個別農家の農業経営との関連については、サンプル農家調査によっ

て3つの飼育経営型が依存することを明らかにした。つまり、飼育規模について零細規模（2頭以下）、小規模（3～8頭）、中規模（9～29頭）および大規模（30～60頭）飼育の4つに区分し、それぞれウシ飼育の状況を土地所有と関連づけて明らかにした。4つのタイプのなかでは、中規模および大規模飼育型が、飼育頭数や土地所有の面で大きな位置を占めること、近年コーヒー・カルダモンの栽培を拡大させつつウシ飼育頭数を増加させている事実を明らかにした。しかし、一方、1966年当時と比較すると、零細規模ながら、多くの村民にウシ飼育が普及しつつあることが知れた。

飼育型に関しては、ゼヴ牛、水牛それぞれの牝牡の組合せによる15タイプのうち調査村落で検出されるのは11タイプであることを示し、各々に就いて飼育と農地所有の状況を明らかにした。これら11タイプのうち Cow 型（20戸）が最も多く、これに Cow・Ox 型（14戸）が続いて、伝統的なインドゼヴ牛飼育が卓越していることを示すと共に、近年は、中規模飼育農家の増加と関連して、[Cow・Ox・She・He] 型飼育（14戸）が目立つ。つまり、“聖なる牛”飼育を基本としながらも、プランテーション経営農家がゼヴ牛より経済的な水牛を飼育するという合理的な飼育型に転じつつある。なお、1966年当時に較べ Cow 型が著しく増加したのは、農地を持たない農業労働者や職人・商人層、さらに零細土地所有者が政府ローンにより Cow 購入が容易になったからである。

ウシ飼育を経営的特徴から分類すると、A型－拡大再生産型、B型－単純再生産型およびC型－購入牛飼育型の3つに区分される。A型とB型とは、いずれも自家生産可能な飼育構成をしているのに対して、C型は、自家生産が希で、ほとんど他からの購入に依存している。A型とB型との差異は、前者がウシ飼育頭数を自家生産により増頭し、今後もその可能性を有する牝牡別および年齢構成になっているのに対し、後者は現状維持的な状況にあることにある。これら3グループは、それぞれ搾乳重要視型と使役重要型とに細分されるが、近年の搾乳用牝水牛の導入によって前者の比重が次第に増していく趨勢にある。

第3のウシの地域間移動に関しては、サンプル調査村落の事例では飼育ウシの31%は購入したものであり、その取引の多くは売り手との直接取引であり、イスラム教徒のダラリ（家畜商人）を介する購入は例外的にしか認められない。これら直接取引の過半は売り手の庭先で調査地区から3マイルの圏内におさまっている。また購入ウシの36%は、調査村周辺で開かれる7か所の牛市で求められたもので、サンプル農家23戸のうち16戸がこれを行っており、庭先取引ほど多く購入していないが、割合一般的と言える。これら7か所の牛市は、2つの週市を除くと、年一回開催される大市である。大市は、すべて冬季の1～2月に開かれ、主にマイダン地域から連れてこられたウシが取引される。売れ残ったウシは、ダラリ等によって、さらに西ガーツ山地を下り、マラバル海岸平野の牛市や一時的宿

営地で売り捌かれる。マイダンやマルナードさらにマラバル海岸平野等で不要となった老齢ウシや不妊牛などは、ケララ州の屠殺場へと移動していくものと推察される。

以上のように要約されるが、今後に残された課題も多い。第1にヒンドゥー教徒の村人とイスラム教徒のダラリとの関係である。村人はよく「ダラリはすかんから、彼らからウシは買わないし、また信用出来ないから彼らにはウシは売らない」と言う。この言葉を額面通り受け取るとヒンドゥー・イスラム両教徒の宗教的対立と理解されやすいが、事実はどうであろうか。ヒンドゥー教徒にとっては、売買手数料を支払うのが惜しく、自ら直接取引した方が良いという経済合理性があるように見受けられる。

残された課題の第2の問題は、ウシ飼育の適正規模に関してである。調査地区に於ける放牧地の過放牧状態から見れば、ウシの飼育頭数は現段階で既に多すぎると言わざるをえない。しかし、上層農家の多くは、農業集約化を進める為にもウシ飼育頭数を増やす意欲を持っており、同時に州政府は、土地のない低所得層に補助金付きでウシ飼育を奨励しており、結果として調査地区及びその周辺では著しいウシ飼育頭数が増える一方で生態系の破壊が進行している。この問題は、筆者の最も関心のある点であり、同時にインドのウシ飼育の経済的評価をも併せ検討する為の準拠枠作成を試みたいと考えている。

さらに、家畜飼育の問題を考える際には、いわゆるヒンドゥー定着農耕社会は、一方で半遊牧的な牧童カーストやイスラム教徒といったヒンドゥー社会の最下層民やヒンドゥー教徒以外の人々によって支えられており、これらの人々・コミュニティの歴史的・文化的な特質と今日的な社会・経済的関係・役割とを明らかにしなければならない。すでに、D.E. Sopher (1975) が、牧童カースト民についての地理学的アプローチを試みている。

第4点目は、インドの家畜に関わる全てのカースト・コミュニティ、例えば繁殖・育成業者や家畜商・追い子・屠殺・皮革業者や食肉商などのいわば“家畜の一生”にかかわる人々の社会的特質を明らかにする必要がある。しかし、資料不足の現状では、ミクロレベルの調査を今後とも継続する必要がある。

本稿は、研究グループの代表・藤原健蔵先生をはじめメンバーの中山修一、米田巖、貞方昇、高橋春成の各氏による現地調査およびとりまとめの段階でのご指導・援助によるところが大きい。特に、藤原健蔵先生には、本稿作成にあたり多大な助言・指導を頂き、心より感謝申し上げます。さらに、新海日出夫、井野崎千恵子両氏にも感謝申し上げます。

なお、本稿は、Fujiwara. K ed (1984): Geographical Field Research in South India. 1682, Research and Source Unit for Regional Geography, University of Hiroshima, 273 p. の Chapter 7; livestock Farming in Kurubathur and Yadawarahari. pp. 62-75. を全面的に書き改めたものである。

注および参考文献

- 1) 拙稿 (1987) : 家畜単位について, 地理月報, No.346, p. 11や拙稿 (1988) : インドの“ウシ”飼育と白い革命 (White Revolution), 地理月報, No355, pp. 1~3 に等しい。
- 2) FAO (1984): 1983 fao production year book, vo 137, pp. 216-218.
- 3) Marvin Harris (1966) に始まる約20年間にも及ぶ文化人類学上の有名な論争である。一つは, ハリス等の主張する技術環境要因 (technoenvi-romental factors) から, インドの牛資源を説明しようとするグループと, 他方は Alan Heston (1979) に代表されるいわゆるアヒンサー (Ahimsa, 殺生禁止) のヒンドゥー教信仰から説明しようとする立場がある。とりわけ, インド牛 (Indian Zebu cattle) の飼育頭数を巡って, 前者は現状では, むしろ足りない状況であり決して多すぎる事はないとし, 伝統的立場の後者は多すぎるとし, この余剰牛の原因を“聖なる牛”として殺さないヒンドゥー教徒義にその原因を求めている。地理学では, F. Simoons (1974) がこの論争をよく理解しており, 邦文では片多順 (1983) が要領よくまとめている。なお, 石田寛 (1972) は, 北インドの動物 (家畜) 崇拜, 放牧慣行等の優れた文化地理学成果を挙げている。
- 4) この問題は, “聖なる牛”論争と問題の本質は同じであるが, インド牝牛の屠殺をめぐる, 牝牛保護の立場のヒンドゥー教徒の祭りや宴会用にも牝牛屠殺を行ってきたモスリム教徒との間の対立及び, ウエストベンガル州とケララ州との2州がいずれも牝牛屠殺禁止の法律制定には加わらず, 今日も依然として一定の年齢になった牝牛を屠殺していることに対するいわば政治的対立がみられる。この問題に関しては, B.M. Batra (1981) の研究に詳しい。
- 5) 5年に1回の家畜センサス調査は, 中央政府の認定したパトワリ (Patwari) がおこなっているが, 彼らの多くは, この調査に十分な時間と注意を払わないことが表明されている。また, 筆者らの調査 (代表者: 広島大学教授藤原健蔵, テーマ: インド・干ばつ常習地域の農業と村落変化, 期間: 1987年7月中旬-10月初旬) においても, 北インド, ラジャスターン州ジャイプール県下のアバネリ村 (Abhaneri) では, 家畜センサス調査のためにパトワリが村を訪ね, 世帯毎に調査することはなく, 彼はデスクワークでやっているにすぎないと数人の村人は証言した。
- 6) ①子牛育成費, ②搾乳技術の経済性, ③牛乳生産の諸機能, ④最小飼料費の公式化, ⑤穀作と家畜飼料の統合性, ⑥酪農業における労働利用, ⑦養鶏業の経済性, ⑧酪農振興計画上のインパクト, その他に⑨論議を尽くすための重要論文のリストアップ作業との9つのセクションに分かれ, 合計56篇の論文が公開されている。このシンポジウムでの研究発表の要旨は, *Indian Journal of Agricultural Economics*. vol 35, No. 4, 1988, pp. 152-190.に掲載されている。
- 7) 1959年のカルナータカ州における Village Panchayat and local boards Act によれば, 行政村は, 1,500人以上10,000人を越えない人々と, 11人以上19人以下の村会議員を有すとある。行政村機能としては, 政府の末端行政及び独自の財源に基づいてのサービス活動との双方を行っている。
- 8) 政府統計の最小統計単位区 (人口や家畜など) で, 徴税単位でもあり, イギリス植民地
- 9) Fujiwara, K (1984): Rural Settlement of Kurubathur and Yadavarahalli and their Recent changes, Fujiwara, K ed, Geographical Field Research in South India, 1982, Univ. of Hiroshima, pp. 96-110.
- 10) 調査項目は, ①ウシ飼育頭数, ②購入・販売の有無 (過去10年間), ③飼育・管理の方法と状況, ④飼育目的, ⑤農具・農用機械の所有とその利用状況などを中心にし, さらにウシ1頭毎の年齢, 体高, 体重, 毛色, 出産地, 搾乳 (使役) の有無, 購入の有無, 去勢の有無, 人工授精の有無などの項目を付け加えたものとなった。
- 11) 日本においても同様であるが, インドの牧畜カーストのみならず水田耕作農民のウシの個体識別は, 毛色や身体的特徴の他に, 年齢によっている。つまり, 若齢時のウシは, 歯の生え代わりの観察によりその年齢が推定できる。このことにより, ウシ飼育農民は, ほぼ正確にこのウシの年齢を熟知している。
- 12) Randhawa, M.S. al (1961): Farmers of India, vol. II, Indian Council of Agricultural Research, New Delhi, p. 211.

- 13) 注12) p. 212.
- 14) Govt. of Mysore (1973): Hassan District, Mysore Gazette, Bangalore, p. 7.
- 15) この地方の支配者 Tigu suttan が, 18世紀末に築造した砦から眺めた景色が美しかったので, “美しい場所” という意味で Manjarabad (Manjar は美しい所) と名付けたとされている。その他には, 霧 (カンナダ語, manja) のかかるところという意味で, Manjarabad とされたという説もある。注14, p. 650.
- 16) 注14)p. 188.
- 17) 海岸地域やマルナードゥ地域では, 南西モンスーン期 (6~9月) に年間降水量の9割以上の降雨をみるが, 内陸の東部高原地域では, 約5割程度にとどまる傾向にある。注14), pp. 26-29.
- 18) Govt. of Karnataka (1975): statistical abstract of Karnataka 1973-74, p. 32.
- 19) Bharucha, F.R and Shankarnarayan, K.A (1958): Effects of Overgrazing on the grasslands of the western ghats, India, Ecology, vol 39. No. 1, pp. 152-153.
- 20) 毎週金曜日に開市されるためにサクラバラサンテ (Sakravarasanthé, Friday Shandy) と称される。1982年の定期市開催請負人は, G.R. Shamana G で, 落札価格は2,000~3,000ルピーという。1982年8月●日の開市には, 68店舗が出店。玉葱・粗糖・トウガラシの他に子供服・ハンカチ・下着など食料品や衣料品が主なものであり, 石灰, 壺や竹細工などその他魚屋, 手相見屋, 散髪屋などが出店。午前10時頃より周辺の村々より徒歩, 自転車, バスなどを利用して買物客が延べ1,000人程度訪ねた。客層は, 比較的低いカーストの者が多く, 女性の参加が多くみられた。
- 21) 中山修一 (1983) : インド西ガーツ山地の核集落における商業機能の発展, 地理科学, vol. 38, No. 2, pp. 70-90.
- 22) Balasubramanyam, K. (1970); Census of India 1961, Mysore Village Survey Monograph, No. 15 (Karubathur village). Delhi, Government of India, p. 3.
- 23) 注9), pp. 107-110.
- 24) Maida, I (1984): Population and Occupational structure of maland Villages Fujiwara, K ed, (1984) Geographical Field Research India, 1982, Univ. of Hiroshima, pp. 42-43.
- 25) 調査村落では, バージラ (Bajira, とうじんびえ), ラギー (Ragi, しこくびえ) とジョワール (Jowar, もろこし) の三大雑穀の作付は, 僅かながらも飼料用としての作付けがなされる可能性はあるが, 統計上にはでてこない。野菜やチリーやピーナッツなどの栽培が, 屋敷周りで僅かにみられる。
- 26) 注14)
- 27)
- 28) 平均収量は, 332.6kg/10 a (1981-82年) で, 州平均の230.4kg/10 a (1976-1977年) を大きく上回り, 北インドの Punjab や Haryana の両州の水準 (370~390kg/10 a) に近づいている。注23), p. 52および Jaiswal, P.L ed (1980): Handboob of Agricultural Research, New Delhi, p. 763.
- 29) ウシ❖屋 (コテイゲ, Kottige) は, マイダ地方と異なり, 外❖屋形式で, 母屋接続型と, 分離型との二つのタイプがある。いずれも土壁でつくられ, 風雨の強い南西モンスーン季に多く生まれるこうしように保温に留意した構造となっている。
- 30) 家畜単位は, Livestock Units の訳であり, インドでは, Whyten 等により Cow Units として計算されている。ここでは,
- 31)
- 32) 注21)
- 33) 黒毛の小型在来種で, 耐病性に優れたゼヴ牛。搾乳期間は僅か6~7カ月しかなく乳量も少ない。Govt. of Karnataka (1973): South Kanara District, Karnataka State Gazetteer, Bangalore, p. 169.
- 34) カルナータカ州のハッサン, トンケール両州に多くみられる。灰色の牽引用牛で牝牛は乳量は少ない。注12) p. 249および, Singh, H (1966): Domestic Animaks, National Book Trust, India, New Delhi, p. 5.など。

- 35) ハリアナとパンジャブ両州やデリーに多く、インドも最も乳・ギー (Ghee, バター) の生産の多い水牛。注29)の Singh, H (1966, R 12) 等) Block Development Board) 地域開発事務所) の略称。カルナータカ州では, Talnk Development office (郡開発事務所) と称す。
- 36) 注21), p. 2によれば, 1960年頃には雨季には放牧されず, この期間中に数多くのウシが羅病し病死するという。
- 37) 調査地区だけでなく, インド国内全てにいえることで, 現在のところ羅病名や病死頭数は, 全く把握されていない。
- 38) この地方では, 入会放牧地での採草や乾草生産は皆無で, 稲藁が永い乾季の主要な粗飼料となっている。
- 39) 注21), p. 22.
- 40) 耕作地の周囲100ヤード (90m) の範囲の林野は, 耕作者に肥料, 燃料, 放牧及びその他に独占的に利用されることが認められ, そのような土地をクマキ (Kumaki) という。注28), p. 10.による。
- 41) 注14)
- 42) 1982年9月●日から日間にわたり現地調査, その調査報告は, 注9), pp.
- 43) 注14), 44
- 44) オーウイン (三澤嶽郎訳) (1980) : オープンフィールド, 御茶の水書房, p. 217.
- 45) 兄弟3人で分割所有し, その経営は長男, 次男の2人が行い, 3男は高等学校の英語教師である。
- 46) この他に, Cow を役用, Ox を去勢せず種牡牛として, she-buffalo は種牡牛の他に1頭での牽引用として使役されることがある。
- 47) ハッサン県したの8郡のうち, マルナード地方のマンジャラバード郡の1郡のみ, 総水牛頭数に占める牡水牛率が, 39% (1977家畜センサス) と高く, マイダン地方に入る他の6郡は, いずれも牡水牛率は, 11~18%と低率で, セミマルナード地域のベルール (Belur) 郡でやっと22%である。しかも牽引を含む役用向けの牡水牛割合では, マンジャラバード郡の46%とベルール郡の30%程度を除くと, 他のマイダン地域の6郡下は1~10%であり, これらの県下では, 牽引向け牡水牛となると皆無に近い。
- 48) 家畜商人の生態や所属ジャティーなどについての研究は, ほとんどされていない。現時点では, Government of India (1956): Report on the marketing of Cattle in India と Sopher, D.E (1975): Indian Pastoral castes and livestock Ecologies: a Geographical Analysis, p. 37.などに家畜商人の記載が若干見られるが, いずれも castes もしくは tribes について述べてはいるが, イスラム教徒の家畜商人についての記載がみられない。しかし, 筆者の調査では, イスラム教徒が家畜商人として, 大きな役割を演じていることが知れた。
- 49) 一般的には, 家畜商人同志の取引の場合にみられる。布の下で, 相手の指を握ることにより, ひそかに値段を知らせるやり片で, 周りの人々にはその値段は気づかれない。注44)の Government of India (1956)の p. 86.
- 50) インドの牛市には, 大市・年市 (Jhatra, Fair) と週市 (Shandy, Weekly Market) とがあり, 乾燥地域では, 前者が, 湿潤地域では, 後者が卓越立地する傾向が, 見られる。
- 51) FAO (農林省畜産局畜政課訳) (1971) : インド及びパキスタンのゼヴ牛, p. 172.
- 52) 注47), p. 176.
- 53) (1987) :
- 54) 注51)

文献

- Batra, S.M (1981); Cow and Cow-Slaughter in India—religious, political and social aspect, University of Delhi, 43p.
- FAO (農林省畜産局畜政課訳) (1971) ; 『インドおよびパキスタンのゼヴ牛』, 214p.
- Fujiwara, K ed (1984); Geographical Field Research in South India, 1982, Research and Source Unit for Regional Geography, University of Hiroshima, 273p.
- グルー (上野福男監訳) (1971) ; 『熱帯の地理』, 朝倉書店, p. 253.
- Government of India (1956); Report on the Marketing of Cattle in India, New Delhi, 235p.
- Government of Karnataka (1973); Hassan District, Mysore State Gazetteer, Bangalore, 738p.
- Government of Karnataka (1973); South Kanara District, Karnataka State Gazetteer, Bangalore, 863p.
- Harris, Marvin (1966); The cultural ecology of Indians sacred cattle. *Current Anthropology* 7, pp. 51–59.
- Heston, Allen (1971); An approach to the sacred cow of India, *Current Anthropology* 12, pp. 191–210.
- Ishida, Hiroshi (1972); A Cultural Geography of the Great Plains of India: Essays, Techniques and Interim Report—cum—Methods, Department of Geography, University of Hiroshima, 304p. Jaiswal.
- P.L & Lokeshwar, R.R (1981); Handbook of Animal Husbandry, Indian Council of Agricultural Research, New Delhi, 788p. 方多 順 (1983) ; インドの「聖なる牛」論争について, 江淵・伊藤編『儀礼と象徴——文化人類学的考察』九州出版会, pp. 229–244.
- Kataria, M.S (1982); Geography of Indian Livestock and White Revolution, Wishal Publications, 142p.
- Kumar <s(19
- Odendhal, S (1972); Energetic of Indian Cattle in Their Environment, human Ecology, vol 1, No. 1, pp. 3–22.
- Ranganath, K (1981); Livestock Industry in Karnataka—Problem and Prospect of Development, (Unpublished ph. D dissertation, Dept. of Geogr., University of Mysore), 480p.
- Rnadhawa, M.S. et. al (1961); Farmers of India—vol. 2 Madras, Andhra Pradesh, Mysore & Lerala, Indian Council of Agricultural Research, New Delhi, 428p.
- Simoons, Frederic J (1974); Contemporary research themes in the cultural geography of domesticated animal. *Geographical Review*.
- Singh, Harbans (1966); Domestic Animals, National Book Trust, New Delhi. 154p. Soper, D.E (1975); Indian Pastoral Castes and Livestock Ecologies: A geo-Space, O.H.K and Learmonth, A.T.A (1965); Indian and Pakistan, Methuen, 877p.
- Whyte, R.O (1964); THE GRASSLAND AND FODDER RESOURCES OF INDIA, Indian council of agricultural research, NEW DELHI, 553p.